

茨城県教育財団文化財調査報告第70集

主要地方道水戸鉾田佐原線道路改良  
工事地内埋蔵文化財調査報告書

餓 鬼 塚  
沢 三 木 台 遺 跡

平成 3 年 10 月

財団法人 茨 城 県 教 育 財 団

茨城県教育財団文化財調査報告第70集

主要地方道水戸鉾田佐原線道路改良  
工事地内埋蔵文化財調査報告書

が 鬼 塚  
ざわ み き だい  
沢 三 木 台 遺 跡

平成 3 年 10 月

財団法人 茨 城 県 教 育 財 団

# 序

茨城県は、産業・経済の発展に伴う広域流通機構の整備と、県土の普遍的な発展を図るために、県内の交通体系の整備を進めております。

主要地方道水戸鉾田佐原線道路改良工事もその一環として計画されたものですが、その予定地内には、埋蔵文化財包蔵地である沢三木台遺跡をはじめ多くの遺跡が確認されていました。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び昭和62年7月から昭和62年10月にかけて主要地方道水戸鉾田佐原線道路改良工事地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、沢三木台遺跡、餓鬼塚の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な資料としてはもとより、教育、文化向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査および整理にあたり、委託者である茨城県はもとより茨城県教育委員会、鉾田町教育委員会をはじめ、関係各機関および関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、深く感謝の意を表します。

平成3年10月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 磯田 勇

# 例 言

- 1 本書は、昭和62年度に茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、発掘調査を実施した餓鬼塚、沢三木台遺跡の発掘調査報告書である。

なお、2遺跡の所在地は次のとおりである。

餓鬼塚－鹿島郡銚田町西台714－7番地ほか

沢三木台遺跡－鹿島郡銚田町塔が崎415番地ほか

- 2 沢三木台遺跡、餓鬼塚の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

平成2年度初めの組織改正により、従来の調査課（企画管理班、調査第一・二・三班、整理班）は埋蔵文化財部となり、その下に企画管理課、調査課及び整理課をおき、調査課には、調査第一・二・三班の三つの班をおくこととなった。

理 事 長	川 又 友 三 郎	昭和61年4月～昭和63年5月	
	磯 田 勇	昭和63年6月～	
副 理 事 長	磯 田 勇	昭和61年4月～昭和63年3月	
	小 林 元	昭和63年4月～平成3年7月	
	角 田 芳 夫	平成3年7月～	
常 務 理 事	滑 川 貞 雄	昭和61年4月～平成元年3月	
	小 林 洋	平成元年4月～平成3年3月	
	本 田 三 郎	平成3年4月～	
事 務 局 長	坂 場 庸 克	昭和62年4月～平成元年3月	
	一 木 邦 彦	平成元年4月～	
埋蔵文化財部長	石 井 毅	平成2年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	北 沢 勝 行	平成2年4月～
	課長代理	水 飼 敏 夫	平成2年4月～（昭和62年4月～平成2年3月 企画管理班長）
	主任調査員	山 本 静 男	（昭和61年4月～平成元年3月 企画管理班）
	主任調査員	根 本 康 弘	平成3年4月～
	主 任	山 崎 初 雄	（昭和60年4月～平成元年3月 企画管理班）
	主 事	大 部 章	（昭和61年4月～平成2年3月 企画管理班）
	主 事	飯 島 康 司	平成3年4月～
	主 事	吉 井 正 明	平成元年4月～



	主 事	大 貫 吉 成	平成2年4月～
調 査 課	調 査 課 長	青 木 義 夫	昭和59年4月～平成元年3月
	課長(部長兼務)	石 井 毅	平成元年4月～ (昭和62年度調査第三班長)
	主任調査員	鈴 木 美 治	昭和62年度調査
	調 査 員	小松崎 猛彦	昭和62年度調査
整 理 課	課 長	沼 田 文 夫	平成2年4月～
	主任調査員	小松崎 猛彦	平成3年度整理・執筆・編集

- 3 本書に使用した記号等については、第3章の遺構、遺物の記載方法の項を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、須恵器について、後藤建一氏（静岡県湖西市教育委員会）から御指導をいただいた。

# 目 次

序	
例言	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法	1
1 地区設定	1
2 基本土層の検討	2
3 遺構確認	3
4 遺構調査	3
第3節 調査経過	4
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 遺構・遺物の記載方法	10
第1節 遺構・遺物の記載方法	10
第2節 表の見方	13
第4章 餓鬼塚	17
第1節 遺跡の概要	17
第2節 遺構と遺物	17
1 堀	17
2 出土遺物	18
第3節 考察	21
第5章 沢三木台遺跡	23
第1節 遺跡の概要	23
第2節 遺構と遺物	23
1 竪穴住居跡	23
2 土坑	90
3 ピット群	95
第3節 考察	101
結語	111

# 插图目次

第 1 图	調査区呼称方法概念图	1	第 37 图	第12号住居跡出土遺物実測图	59
第 2 图	基本土層图	2	第 38 图	第13号住居跡実測图	60
第 3 图	餓鬼塚・沢三木台遺跡周辺遺跡 分布图	8	第 39 图	第13号住居跡竈実測图, 遺物 出土位置图	61
<b>餓鬼塚</b>					
第 4 图	餓鬼塚全体图	16	第 40 图	第13号住居跡出土遺物実測图(1)	63
第 5 图	餓鬼塚出土遺物実測・拓影图	18	第 41 图	第13号住居跡出土遺物実測图(2)	64
第 6 图	第 1 号堀実測图	19~20	第 42 图	第14号住居跡実測图	67
<b>沢三木台遺跡</b>					
第 7 图	沢三木台遺跡全体图	22	第 43 图	第14号住居跡竈実測图, 第14・19号 住居跡遺物出土位置图	68
第 8 图	第 1 号住居跡・竈実測图	24	第 44 图	第14号住居跡出土遺物実測图(1)	70
第 9 图	第 1 号住居跡出土遺物実測图	26	第 45 图	第14号住居跡出土遺物実測・ 拓影图(2)	71
第 10 图	第 2 号住居跡実測图	28	第 46 图	第15・16号住居跡実測图	73
第 11 图	第 2 号住居跡竈実測图	29	第 47 图	第15号住居跡竈実測图	74
第 12 图	第 2 号住居跡出土遺物実測・ 拓影图(1)	30	第 48 图	第15号住居跡出土遺物実測图	74
第 13 图	第 2 号住居跡出土遺物実測图(2)	31	第 49 图	第16号住居跡出土遺物実測图	75
第 14 图	第 3 号住居跡実測图	33	第 50 图	第17号住居跡実測图	77
第 15 图	第 3 号住居跡竈実測图	34	第 51 图	第17号住居跡竈実測图	78
第 16 图	第 3 号住居跡出土遺物実測图	34	第 52 图	第17号住居跡出土遺物実測图	78
第 17 图	第 4 号住居跡実測图	36	第 53 图	第18・20号住居跡実測图	80
第 18 图	第 4 号住居跡竈実測图	37	第 54 图	第18・20号住居跡実測图, 遺物出土位置图	81
第 19 图	第 4 号住居跡出土遺物実測图	38	第 55 图	第18号住居跡竈実測图	82
第 20 图	第 5 号住居跡・竈実測图	40	第 56 图	第18号住居跡出土遺物実測图(1)	84
第 21 图	第 6 号住居跡実測图	41	第 57 图	第18号住居跡出土遺物実測・ 拓影图(2)	85
第 22 图	第 6 号住居跡竈実測图	42	第 58 图	第19号住居跡・竈実測图	87
第 23 图	第 6 号住居跡出土遺物実測图	42	第 59 图	第19号住居跡出土遺物実測・ 拓影图	88
第 24 图	第 7 号住居跡・竈実測图	44	第 60 图	第 1~7・9・10号土坑実測图	92
第 25 图	第 7 号住居跡出土遺物実測图	45	第 61 图	第11・13~15号土坑実測图, 第 9・ 10号土坑出土遺物実測图	93
第 26 图	第 8 号住居跡実測图	46	第 62 图	ピット群実測图, 出土遺物実測图	97
第 27 图	第 8 号住居跡竈実測图	47	第 63 图	遺構外出土遺物拓影图	98
第 28 图	第 8 号住居跡出土遺物実測图	48	第 64 图	遺構外出土遺物実測图	99
第 29 图	第 9 号住居跡実測图	50	第 65 图	沢三木台遺跡遺構配置图	104
第 30 图	第 9 号住居跡竈実測图	51	第 66 图	沢三木台遺跡鬼高期遺物集成图	105
第 31 图	第 9 号住居跡出土遺物実測图	52	第 67 图	沢三木台 II A 期住居跡規模・ 主軸方向	107
第 32 图	第10号住居跡実測图	53			
第 33 图	第10号住居跡竈実測图	54			
第 34 图	第11号住居跡・竈実測图	55			
第 35 图	第11号住居跡出土遺物実測图	56			
第 36 图	第12号住居跡・竈実測图	58			

第 68 図 沢三木台 II B 期住居跡規模・  
主軸方向……………108

第 69 図 沢三木台 II C 期住居跡規模・  
主軸方向……………108

第 70 図 沢三木台 III 期住居跡規模・  
主軸方向……………109

## 表 目 次

表 1 住居跡一覧表 …………… 89

表 2 土坑一覧表 …………… 94

表 3 ピット群一覧表 …………… 95

## 写 真 目 次

PL 1 遺跡遠景（沢三木台遺跡）

PL 2 餓鬼塚調査前全景，試掘（南）

PL 3 第 1 号堀土層セクション，堀完掘

PL 4 沢三木台遺跡調査前全景，試掘，谷部  
試掘

PL 5 第 1 号住居跡完掘，遺物出土状況，第  
2 号住居跡完掘

PL 6 第 2 号住居跡遺物出土状況，第 3 号住  
居跡完掘，第 4 号住居跡完掘

PL 7 第 5 号住居跡完掘，第 6 号住居跡完掘，  
第 7 号住居跡完掘

PL 8 第 8 号住居跡完掘，第 9 号住居跡完掘，  
第 10 号住居跡完掘

PL 9 第 11 号住居跡完掘，第 12 号住居跡完掘，  
第 13 号住居跡完掘

PL 10 第 14・19 号住居跡完掘，竈土層セクシ  
ョン，第 15・16 号住居跡完掘

PL 11 第 17 号住居跡完掘，遺物出土状況，第  
18・20 号住居跡完掘

PL 12 第 18 号住居跡竈土層セクション，遺物出  
土状況，第 19 号住居跡完掘

PL 13 第 1 A・B 号土坑完掘，第 2 号土坑完  
掘，遺物（貝）出土状況，第 3 号土坑完  
掘・第 4 号土坑完掘・第 5 号土坑完掘，  
第 6 号土坑土層セクション，第 7 号土坑  
完掘

PL 14 第 9 号土坑完掘，第 10 号土坑完掘，第  
11 号土坑完掘，第 13 号土層セクション，  
第 14 号土坑土層セクション，第 15 号土坑  
完掘，ピット群

PL 15 第 1 号住居跡出土遺物，第 2 号住居跡  
出土遺物

PL 16 第 2 号住居跡出土遺物，第 3 号住居跡  
出土遺物

PL 17 第 4 号住居跡出土遺物，第 6 号住居跡  
出土遺物

PL 18 第 7 号住居跡出土遺物，第 8 号住居跡  
出土遺物

PL 19 第 9 号住居跡出土遺物，第 11 号住居跡  
出土遺物

PL 20 第 12 号住居跡出土遺物，第 13 号住居跡  
出土遺物

PL 21 第 13 号住居跡出土遺物

PL 22 第 14 号住居跡出土遺物

PL 23 第 14 号住居跡出土遺物，第 15 号住居跡  
出土遺物，第 16 号住居跡出土遺物，第  
17 号住居跡出土遺物

PL 24 第 18 号住居跡出土遺物

PL 25 第 18 号住居跡出土遺物，第 19 号住居跡  
出土遺物，第 1・2・6・9・15 号土坑  
出土遺物

PL 26 遺構外出土遺物，ピット群出土遺物，  
縄文土器

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経過

主要地方道水戸鉾田佐原線は、鉾田町内を通過して県央と鹿行地区を結ぶ重要な役割を果たす道路であるが、幅員が狭く急カーブが多いため、近年の交通量の増加に対応が難しくなっている。特に鉾田町内においては、道路沿いに人家が密集し、幅員を拡張することは極めて困難なため、茨城県は、交通量の緩和と道路網の整備を図るため鉾田町串挽を起点として畑田・塔ヶ崎を結ぶ約6.1kmの環状線道路の建設を計画した。

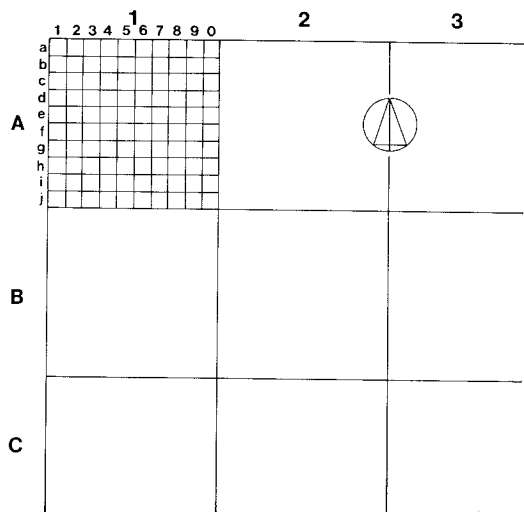
工事に先立ち、昭和61年9月1日、茨城県は、茨城県教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。これに対し、茨城県教育委員会は分布調査を実施し、工事予定地内に沢三木台遺跡と餓鬼塚の2遺跡の存在を確認し、同年9月22日、遺跡の取り扱いについて茨城県教育委員会と協議されたい旨回答した。そこで、昭和61年10月20日、茨城県教育委員会と茨城県は、文化財保護の立場から埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた結果、現状保存が困難であることから記録保存の処置を講ずることとなり、調査機関として茨城県教育財団が紹介された。茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を締結し、昭和62年7月1日から昭和62年10月までの予定で沢三木台遺跡(8,802.04m<sup>2</sup>)、餓鬼塚(1,170m<sup>2</sup>)の調査を実施することとなった。

## 第2節 調査方法

### 1 地区設定

発掘調査を実施するにあたり、遺跡及び遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。

なお、日本平面直角座標第IX系座標、X軸(南北)、Y軸(東西)の交点を基準点として、40m方眼を設定し、この40m四方の区画を大調査区(大グリッド)とした。さらに、この大調査区を東西、南北に各々十等分して4m四方の小調査区(小グリッド)を



第1図 調査区呼称方法概念図

設定した。

調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用いて表記した。まず、大調査区の名称は、北から南へA, B, C……, 西から東へ1, 2, 3……と大文字を付し、「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに、大調査区を4m方眼に100分割した小調査区をそれぞれ同様に、北から南へ「a」、「b」、「c」……「j」、西から東へ「1」、「2」、「3」……「9」、「0」と小文字を付した。各小調査区の名称は、大調査区の名称と合わせて、「A1a<sub>1</sub>」区、「B2b<sub>2</sub>」区のように呼称した。

なお、基準点の測量杭打ちは、財団法人茨城県建設技術公社に委託した。

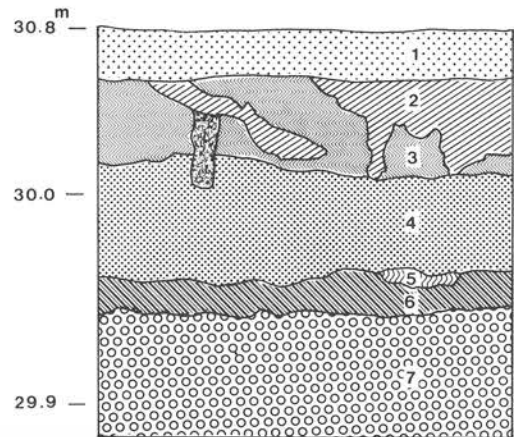
各遺跡の基準点は、次のとおりである。

- |            |    |               |    |              |
|------------|----|---------------|----|--------------|
| (1) 餓鬼塚    | X軸 | (南北) 17,840m, | Y軸 | (東西) 60,480m |
| (2) 沢三木台遺跡 | X軸 | (南北) 17,320m, | Y軸 | (東西) 60,160m |

## 2 基本土層の検討

沢三木台遺跡の中央部、A3c<sub>7</sub>区内にテストピットを設定し、土層を観察した。

第1層は表土（耕作土）で、20～25cmほどの厚さを有し、ローム粒子を少量含む締まりのない暗褐色土である。第2、3層は、ソフトローム層で、ゴボウやヤマイモ耕作による攪乱（トレンチャー痕）を受けている。第2層は、10～45cmの厚さを有し、ローム粒子、炭化粒子を少量含む暗褐色土であるが、第3層は、40～50cmの厚さを有する褐色土であり、ローム粒子多量、炭化粒子を極少量含む締まりを有し、少し粘性がある。第4層は、極めて締まりのあるハードローム層で50～60cmの厚さを有し、ローム



第2図 基本土層図

粒子少量を含む褐色土である。第5層は、14～20cmの厚さを有するハードローム層で、第4層とほぼ同一の褐色土であるが、黄橙色や浅黄橙色の鹿沼パミスを不規則に含んでいる。第6層は、10cm程の薄い鹿沼パミス層である。第7層は極めて締まりのある硬いハードローム層で、褐色を呈している。

遺構の多くは、第3層のソフトローム層を掘り込んで構築されているが、第15号土坑のようにハードローム層に達する例も見られた。

### 3 遺構確認

試掘は、調査面積の16分の1、次いで8分の1、4分の1の割合で遺構確認を行った。試掘の結果、遺跡全体にゴボウやヤマイモ耕作のためのトレンチャーによる攪乱があった。調査区の中央部から北側には、遺構は確認されなかった。一部には谷状の落ち込みが認められたため、幅2m、南北40m、東西36mの十字のトレンチを入れて遺構確認に努めたが、自然堆積の谷であることが判明した。調査区の南側からは、縄文式土器片、土師器及び須恵器の破片とともに住居跡や土坑と思われる落ち込みが確認され、表土の厚さは30～60cmであることも判明した。この試掘結果をふまえて、重機による表土除去を実施した。重機で表土除去を実施したあと、人力による遺構確認を行い、住居跡20軒や土坑15基を確認した。

なお、餓鬼塚は、面積の4分の1まで試掘調査を実施したが、塚状の高まりは確認されず、確認できたのは堀1条だけである。

### 4 遺構調査

当遺跡における遺構の調査は、次の方法で行った。

住居跡の調査は、長軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを設け、4区に分けて掘り込む「四分分割法」を基本とした。地区の名称は、北から時計回りに1～4区とした。堀の調査は、適宜な位置に土層観察用ベルトを設定し、掘り込みを実施した。土坑の調査は、長径で二分分割して掘り込む「二分分割法」で行った。

土層観察は、色相、含有物、混入物の種類及び量並びに粘性や締まり具合を観察して、分類の基準とした。色相の判定は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄 日本色研事業株式会社)を使用した。

遺物の取り上げについては、住居跡、堀、土坑の各区と遺物番号、出土位置及びレベルを記録して収納した。

遺構や遺物の出土状況の平面実測は、水糸方眼地張り測量で行った。

また、土層断面や遺構断面の実測は、標高をもとに水平にセットした水糸を基準にして実測した。縮尺は20分の1を基本としたが、竈や部分的な微細図については10分の1の縮尺で作成した。

記録の過程は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成を基本とした。図面や写真に記録できない事項に関しては、野帳及び調査記録カードに記録し、さらに遺構カードに整理した。



### 第3節 調査経過

沢三木台遺跡、餓鬼塚の発掘調査は、昭和62年7月1日から昭和62年10月31日までの4か月にわたって実施された。以下、調査の経過について、その概要を月ごとに記述する。

7月前半 沢三木台遺跡の発掘調査に必要な現場倉庫の設置、調査器材の搬入を行うとともに調査前の全景写真撮影を実施した。13日から遺跡面積の16分の1のグリッドを設定して、北側から試掘調査を行った。

後半 引き続き北部から中央部のグリッドによる試掘調査を実施したが、ゴボウやヤマイモ耕作によるトレンチャーがローム層まで掘り下げているため、遺構の確認は困難であった。試掘調査は、4分の1まで拡張をした。調査区のほぼ中央部東側に黒色土の落ち込みを確認したが、自然堆積の谷であることが判明し、調査区の北部や中央部及び南端斜面部からは遺構を確認することはできなかった。

8月前半 調査区の南端斜面部を除く南側から縄文式土器片や土師器・須恵器の破片が出土し、住居跡や土坑の落ち込みが多数確認された。3日から重機による表土除去を行って遺構確認作業を実施した。その結果、竪穴住居跡18軒、土坑14基、ピット群1か所を確認した。

後半 遺構確認状況の写真撮影を行い、調査区の南側から竪穴住居跡の調査を開始した。28日までに住居跡4軒、土坑11基の調査が終了した。

9月前半 住居跡の調査は、竈の調査や住居跡の平面図作成などの記録作業が中心となった。

後半 引き続き遺構調査を実施したが、台風や大雨のため作業を中止した日が多かった。30日には住居跡13軒、ピット群の調査を終了した。

10月前半 沢三木台遺跡の残りの遺構調査を進めるとともに、7日には餓鬼塚の遺構調査前全景写真撮影を行い、8日には試掘調査を沢三木台遺跡の調査と平行して行った。餓鬼塚は、斜面部のため、最初から面積の4分の1のグリッドを設定して、試掘調査を実施した。試掘調査の結果、調査区の西端に堀状の落ち込みを確認したため、グリッドを拡張し、堀を確認した。その他のグリッドからは、遺構は確認されず遺物は東側のグリッドから石鏃1点と煙管（銅）1点が出土している。

後半 餓鬼塚は、堀の土層や平面実測調査を行った。沢三木台遺跡は、住居跡の調査を継続して実施し、両遺跡とも30日にはすべての調査を終了した。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

沢三木台遺跡は、鹿島郡鉾田町塔が崎415番地ほかに所在し、餓鬼塚は、沢三木台遺跡から北東へ500mほど離れた同町西台714-7番地ほかに所在している。

鉾田町は、首都東京から北東へ約80kmに位置し、太平洋に面して茨城県の南東部に所在している。町域は、東西16km、南北13km、面積は、約107km<sup>2</sup>である。人口は、平成3年4月現在28,934人である。北は東茨城郡茨城町、鹿島郡旭村、東は太平洋、南は鹿島郡大洋村、行方郡北浦村、西は行方郡玉造町、東茨城郡小川町に接している。市街地は北浦の湖頭に形成され、古くから水陸交通の要衝の地である。

当町の太平洋岸には国道51号が縦断し、市街地中央部を主要地方道茨城鹿島線、水戸鉾田佐原線が通っているほか、鹿島鉄道鉾田線、鹿島臨海鉄道大洗鹿島線が運行しているなど鹿行地域の交通の要衝であり、地方行政、経済、文化及び教育の中心として栄えている。さらに、畑作を中心とした農業は鉾田町の産業の中核をなしており、近年メロンをはじめとする施設園芸農業が急激に発達し、京浜市場を中心に全国に出荷されている。そして、太平洋沿岸には大竹海岸などの海水浴場や釣り場を有し、観光地へと発展している。

本町の地形は、南西部が標高19～35mの行方台地であり、台地の東北部を巴川が町の北西から南東に流下し北浦に流入している。その巴川を境として町の北から南東部にかけては標高20～44mの鹿島台地で、両台地は、南側の北浦村、大洋村の方面へ延びている。

また、鉾田川は、町のほぼ中央東部を北から南に流下し巴川と北浦湖頭の沖積低地で合流している。

町の南部中ほどには、北浦が入り込みその湖頭の沖積低地に市街地が形成されている。行方・鹿島台地には、巴・鉾田川の支流がそれぞれ樹枝状に入り込み複雑な地形を形成しており、台地上は、畑地あるいは山林となっている。両河川とその支流の地域は沖積低地で水田となっている。

沢三木台遺跡は、鉾田町役場からほぼ西へ1.6kmほどの地点にあり、当遺跡は、南に流下する鉾田川と南東に流下する巴川に挟まれた鹿島台地の北西端に所在し、標高25～33mの舌状台地縁辺部に位置している。台地は、遺跡の東側と西側の両方から小支谷が入っており、台地上は畑地や山林となっている。この台地の周辺は、鉾田川、巴川や北浦湖頭の沖積低地が開け、主に水田となっている。水田との比高は25～31mである。

餓鬼塚は、沢三木台遺跡から北東500mほどのところに所在しており、遺跡の所在する台地は標高9～25mで、西及び東側には、小支谷が入り込んでいる。低地との比高は7～24mである。

## 第2節 歴史的環境

北浦、巴川及び銚田川（七瀬川）を望む台地には、貝塚や古墳及び集落跡などが数多く分布し、古代から多くの人々の生活の場であったことを示している。

銚田町には、「茨城県遺跡地図」<sup>(1)</sup>によると、縄文時代35遺跡、弥生時代8遺跡、古墳時代57遺跡、奈良・平安時代2遺跡、鎌倉・室町時代21遺跡及び江戸時代1遺跡の計124遺跡が確認されている。

先土器時代の遺跡は、確認されていないが、遺物として銚田川流域にある徳宿遺跡<sup>(2)</sup><1>から出土した尖頭器が、巴川流域では梨ノ子木久保遺跡<sup>(3)</sup><9>からは柳葉形の巨大な尖頭器が出土し報告されている。

縄文時代になると、貝塚が形成されるようになり、現在までに350か所ほど発見されている。当町においては14か所確認されているが、各貝塚とも発掘調査はほとんど実施されていないのが現状である。この時代の遺跡は銚田川と巴川の河岸の台地縁辺部に広く分布している。

巴川流域には、早期～前期に形成された串挽貝塚<sup>(4)</sup><2>があり、ハイガイ、マガキ、オキシジミ、ハマグリ<sup>(5)</sup>の貝類と胎土に繊維を含む土器片が出土している。中期では、ハマグリ等の貝類や加曾利E式土器片が出土した畑田貝塚<sup>(5)</sup><3>、ハマグリ・ウミナ等の貝類と阿玉台式土器片、加曾利E式土器片が出土した権現平貝塚<sup>(6)</sup><4>、早期の沈線文系から中期の加曾利E式にかけての縄文式土器片が出土した梨ノ子木久保遺跡、その他、坂戸遺跡<sup>(7)</sup><5>、青柳貝塚<sup>(8)</sup><6>、中の宮遺跡<sup>(9)</sup><7>及び鳥栖遺跡<sup>(10)</sup><8>が存在する。

銚田川流域には、中期に形成された銚田貝塚<sup>(11)</sup><10>、飯名貝塚<sup>(12)</sup><11>、秋山遺跡<sup>(13)</sup><12>、後期の石崎台遺跡<sup>(14)</sup><13>、晩期の徳宿遺跡<sup>(15)</sup><15>、鎌田遺跡<sup>(16)</sup><14>等が存在する。

弥生時代の遺跡は、銚田川またはその支流に近い台地縁辺部に徳宿遺跡、埴遺跡<sup>(17)</sup><16>、安塚遺跡<sup>(18)</sup><17>、畑田遺跡が確認されている。

出土遺物を見ると、徳宿遺跡と埴遺跡から中期の足洗式土器が、安塚遺跡からは足洗式土器と後期の土器<sup>(19)</sup>（十王台式土器に独特な附加条第二種による羽状縄文がほとんど見られないことから十王台式併行期と考えられる。）が、畑田遺跡<sup>(20)</sup>からは後期の十王台式土器が、それぞれ出土している。

古墳時代の遺跡は、古墳（群）及び集落跡が55か所と比較的によく確認されている。不二内古墳群<sup>(21)</sup><19>からは、高さ53cmの「跪座する男」や高さ68.5cmの「壺をささげる女」などの人物埴輪が出土している。野友権現峯古墳群<sup>(22)</sup><20>、富士峯古墳群<sup>(23)</sup><21>、当間二ツ塚古墳<sup>(24)</sup><22>及び氷川古墳<sup>(25)</sup><23>からは埴輪がそれぞれ出土し、二ツ塚古墳<sup>(26)</sup><24>からは直刀・勾玉が出土している。

また、安房古墳群<sup>(27)</sup><25>からは、7世紀中葉から8世紀初頭に位置づけられる須恵器・鉄鍬が出土している。古墳は、円墳がほとんどで、方墳、前方後円墳は少ない。集落跡では、銚田川流

域に中期から後期にかけて埜遺跡、烟田川波遺跡<18>及び西台遺跡<26>が存在している。割り塚古墳<27>からは円墳10基が確認されている。

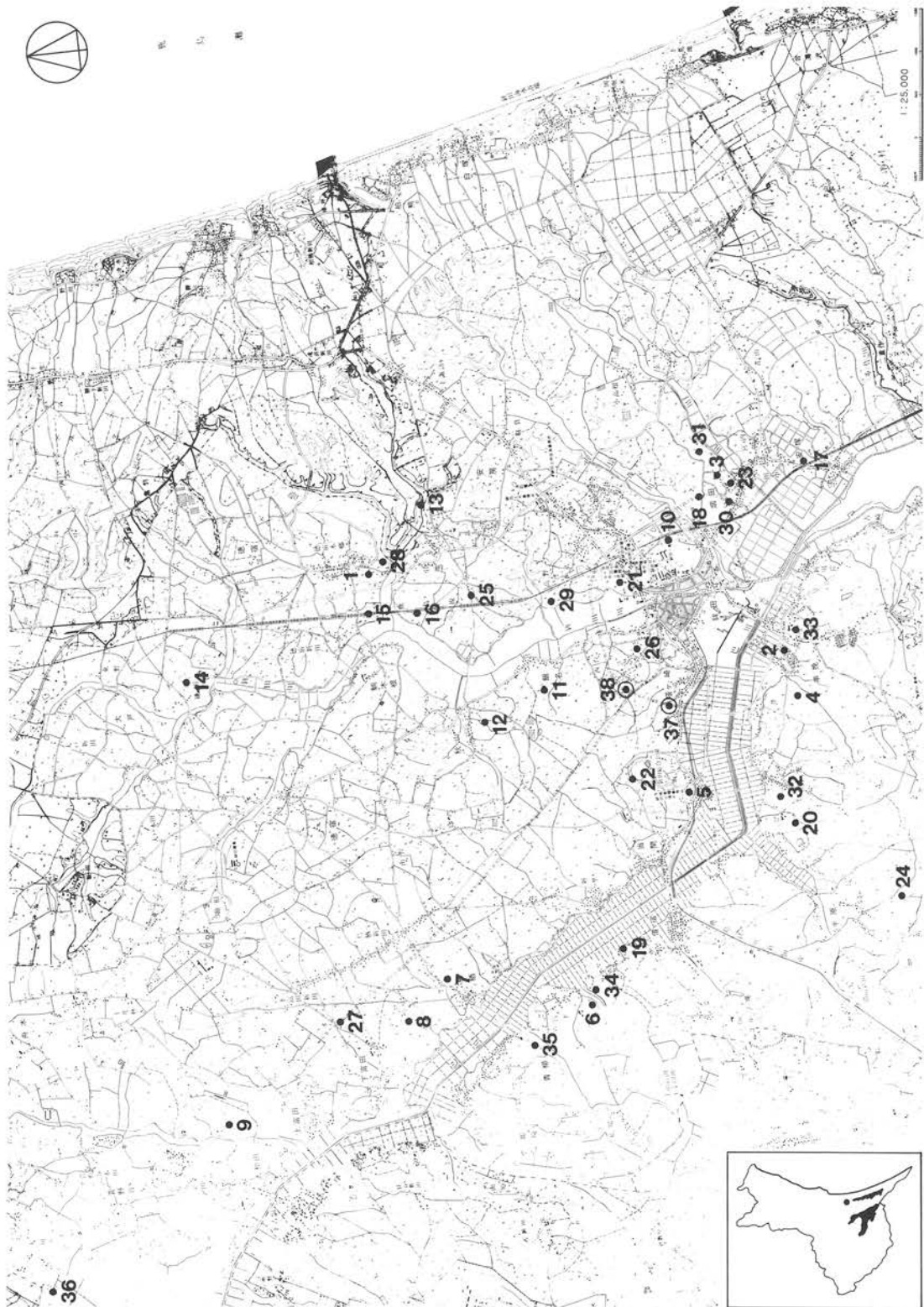
中世になると城館跡が中心となり、21か所確認されている。平安から戦国時代にかけて常陸大掾<sup>だいじょう</sup>氏の支族である鹿島氏一族の徳宿親幹<sup>とくしゆくちかもと</sup>が築いた徳宿城跡<28>、鎌倉から戦国時代にかけて安房又太郎<sup>あんぼうまたろう</sup>の築いた三階城跡<sup>さんがい</sup><29>、同じく大掾氏一族の烟田幹秀<sup>かまたもとひで</sup>が築いた烟田城跡<30>、そして烟田氏の家臣の館と伝えられている、富士山館<31>をはじめとする埜八館<sup>(11)</sup>や砦跡が残っている。巴川流域には、武田通信<sup>たけだみちのぶ</sup>の築いた野友城跡<sup>のども</sup><32>や、郷土砦跡<sup>きょうどとりで</sup><33>、蕨砦跡<sup>わらびとりで</sup><34>及び堀の内砦跡<sup>ほりうち</sup><35>が存在している。

近世の遺跡としては、町北部の大川、紅葉地区に紅葉の勘十郎堀<36>が存在している。1706年、水戸藩は大規模な藩営工事に着手し、松波勘十郎を中心として涸沼川から巴川流域の紅葉に至る堀割工事をしたものである。これは、涸沼と北浦、巴川の水運を利用して奥州諸藩の物資を江戸に運ぶための中継地<sup>(12)</sup>であったものと考えられる。

以上のように、鉾田町は、鉾田川と巴川の水資源に恵まれ、原始・古代から近世まで各時代にわたり多くの遺跡があり、この地に人々の生活が営まれてきたことが窺える。

#### 引用・参考文献

- (1) 「茨城県遺跡地図」 茨城県教育委員会 1987年
- (2) 「茨城県史料」 考古資料編 先土器・縄文時代 茨城県 1979年
- (3)(10) 茨城県教育財団 「梨ノ子木久保遺跡・割り塚古墳」 茨城県教育財団文化財調査報告 第47集 1988年
- (4)(5)(6) 斎藤弘道 「県内貝塚における動物遺存体の研究3」 学術調査概報3 茨城県歴史館 1979年
- (7) 茨城県教育財団 「烟田遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告VI 1980年
- (8) 鈴木正博 「十王台式理解のために(1),(2)」 常総台地7, 8 1976年
- (9) 「茨城県史料」 考古資料編 古墳時代 茨城県 1974年
- (10) 茨城県教育財団 「烟田川波遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第68集 1990年
- (11) 今瀬文也 「日本城郭大系 第4巻」 新人物往来社 1979年
- (12) 「茨城県史」 近世編 茨城県 1985年
- (13) 「阿巳の山遺跡」 鉾田町教育委員会 1986年



第3図 餓鬼塚・沢三木台遺跡周辺遺跡分布図

表1 餓鬼塚・沢三木台遺跡周辺遺跡一覧表

図中 番号	遺跡名	遺跡の時代								図中 番号	遺跡名	遺跡の時代							
		先土器	縄文	弥生	古墳	奈・平	鎌・室	江戸	先土器			縄文	弥生	古墳	奈・平	鎌・室	江戸		
1	徳宿遺跡	○	○	○						20	野友権現峯古墳				○				
2	串挽貝塚		○							21	富士峯古墳群				○				
3	畑田貝塚		○							22	当間二ツ塚古墳				○				
4	権現平貝塚		○							23	水川古墳				○				
5	坂戸遺跡		○							24	二ツ塚古墳				○				
6	青柳貝塚		○							25	安房古墳群				○				
7	中の宮遺跡		○							26	西台遺跡				○				
8	烏柄遺跡		○							27	割り塚古墳				○				
9	梨ノ子木久保遺跡		○							28	徳宿城跡				○				
10	鉢田貝塚		○							29	三階城跡							○	
11	飯名貝塚		○							30	畑田城跡							○	
12	秋山遺跡		○							31	富士山館							○	
13	石崎台遺跡		○							32	野友城跡							○	
14	鎌田遺跡		○							33	郷土砦跡							○	
15	徳宿遺跡		○							34	廠砦跡							○	
16	塙遺跡			○	○					35	堀の内砦跡							○	
17	安塚遺跡			○						36	紅葉の勘十郎堀								○
18	畑田川波遺跡			○						37	沢三木台遺跡	当遺跡							
19	不二内古墳群			○						38	餓鬼塚	当遺跡							

# 第3章 遺構・遺物の記載方法

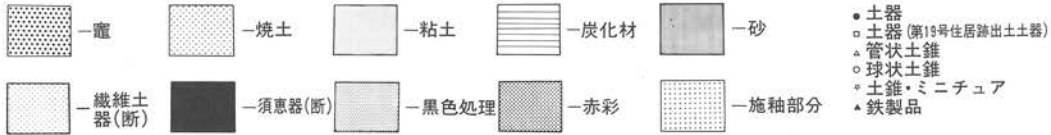
## 第1節 遺構・遺物の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は、下記の要領で統一した。

### 1 使用記号

名称	竪穴住居跡	土 坑	堀	ピット	土 器	石 器	土 製 品	金属製品
記号	SI	SK	SD	P <sub>1</sub> ...	P	Q	DP	M

### 2 遺構・遺物の表示方法



### 3 土層の分類

各遺構における堆積土の土層については、調査時に、含有物、色調、粘性及び締まり具合などを観点として線引きし観察記録を行った。

なお、色調については「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社発行)を使用し、図版実測図中に土層解説の記号を記載した。

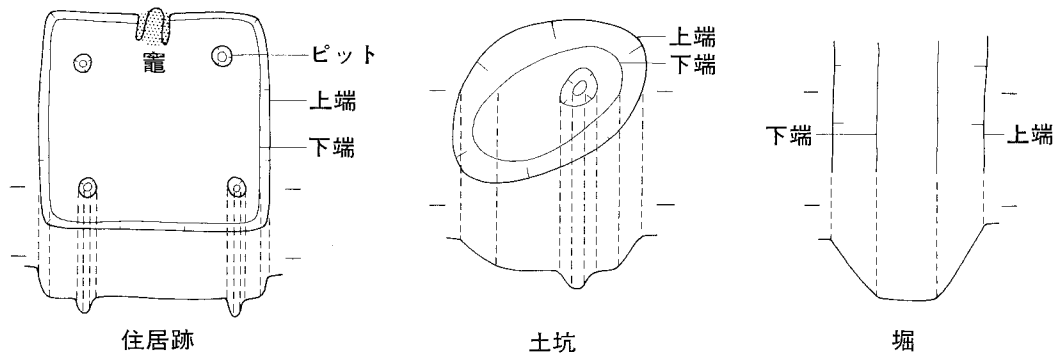
含有物の量については少量(面積の10%未満)検出されたものを基準とし、中量(10%以上30%未満)検出されたものには「'」を、多量(30%以上)検出されたものについては「”」をアルファベットの右上にそれぞれ付加して表示した。

番号	土色名	色相 明度/彩度	含有物
1	明 褐 色	Hue 7.5YR $\frac{5}{6}$ $\frac{5}{8}$ $\frac{6}{5}$ $\frac{4}{3}$	a
		Hue 10 YR $\frac{7}{6}$	ローム・ローム粒子 ロームブロック
2	にぶい黄褐色	Hue 10 YR $\frac{5}{4}$ $\frac{5}{3}$	ハードロームブロック
3	にぶい褐色	Hue 7.5YR $\frac{5}{4}$ $\frac{5}{3}$	b
4	褐 色	Hue 7.5YR $\frac{4}{3}$ $\frac{4}{4}$ $\frac{4}{6}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{3}$	c
		Hue 10 YR $\frac{4}{6}$	焼土・焼土粒子・焼土ブロック
5	暗 褐 色	Hue 7.5YR $\frac{3}{3}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{4}{3}$	d
		Hue 10 YR $\frac{3}{3}$	炭化物・炭化粒子
		Hue 5 YR $\frac{3}{3}$	e
6	極暗褐色	Hue 7.5YR $\frac{2}{3}$	f
			粘土・粘土ブロック
			g
			砂
			h
			礫



7	黒褐色	Hue 7.5YR	$\frac{2}{2}$ $\frac{3}{2}$ $\frac{3}{3}$ $\frac{2}{3}$	i	黒色土・黒色土粒子・黒褐色土・暗褐色土・灰褐色土
		Hue 10 YR	$\frac{3}{1}$ $\frac{2}{2}$ $\frac{2}{1}$	j	ローム粒子・ハードロームブロック・焼土粒子・炭化粒子
		Hue 5 YR	$\frac{3}{2}$ $\frac{2}{2}$ $\frac{2}{1}$	k	攪乱
8	灰褐色	Hue 7.5YR	$\frac{4}{2}$ $\frac{5}{2}$ $\frac{2}{1}$	l	灰・ローム・ハードロームブロック
		Hue 10 YR	$\frac{5}{2}$	m	ローム粒子・焼土粒子
		Hue 5 YR	$\frac{4}{2}$	n	ローム粒子・炭化粒子
9	浅黄色	Hue 2.5Y	$\frac{7}{3}$ $\frac{8}{1}$	o	ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子
		Hue 5 YR	$\frac{5}{8}$ $\frac{3}{2}$ $\frac{5}{6}$	p	ハードロームブロック・焼土粒子
10	明赤褐色	Hue 2.5YR	$\frac{5}{8}$ $\frac{5}{6}$	q	焼土粒子・炭化粒子
		Hue 5 YR	$\frac{4}{4}$ $\frac{5}{4}$ $\frac{4}{3}$	r	焼土粒子・粘土
11	にぶい赤褐色	Hue 5 YR	$\frac{4}{6}$ $\frac{4}{4}$ $\frac{4}{8}$	s	炭化物・灰
12	赤褐色	Hue 5 YR	$\frac{2}{3}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{2}$ $\frac{3}{3}$ $\frac{3}{6}$	t	炭化物・粘土
13	暗赤褐色	Hue 2.5YR	$\frac{3}{6}$ $\frac{3}{3}$	u	炭化物・砂
		Hue 5 YR	$\frac{2}{4}$ $\frac{2}{3}$	v	ローム粒子・砂
14	極暗赤褐色	Hue 7.5YR	$\frac{6}{6}$ $\frac{6}{8}$	w	砂・黒色土
15	橙色	Hue 7.5YR	$\frac{6}{4}$ $\frac{7}{4}$	x	表土・耕作土
16	にぶい橙色	Hue 7.5YR	$\frac{8}{3}$		
17	浅黄橙色	Hue 10 YR	$\frac{6}{4}$ $\frac{7}{4}$ $\frac{5}{4}$ $\frac{7}{6}$		
18	にぶい黄橙色	Hue 7.5YR	$\frac{2}{1}$		
19	黒色	Hue 2.5YR	$\frac{4}{2}$		
20	灰赤色	Hue 10YR	$\frac{5}{6}$ $\frac{5}{8}$		
21	黄褐色	Hue 2.5YR	$\frac{5}{4}$		
		Hue 2.5YR	$\frac{8}{4}$		
22	淡黄色	Hue 2.5YR			

#### 4 遺構実測図の記載方法



- ① 住居跡は、縮尺20分の1の原図をトレースして版組みし、それをさらに3分の1に縮小して掲載した。
- ② 土坑は、縮尺20分の1の原図をトレースして版組みし、それをさらに3分の1に縮小して掲載した。
- ③ 竈は、10分の1の原図をトレースして版組みし、それをさらに3分の1に縮小して掲

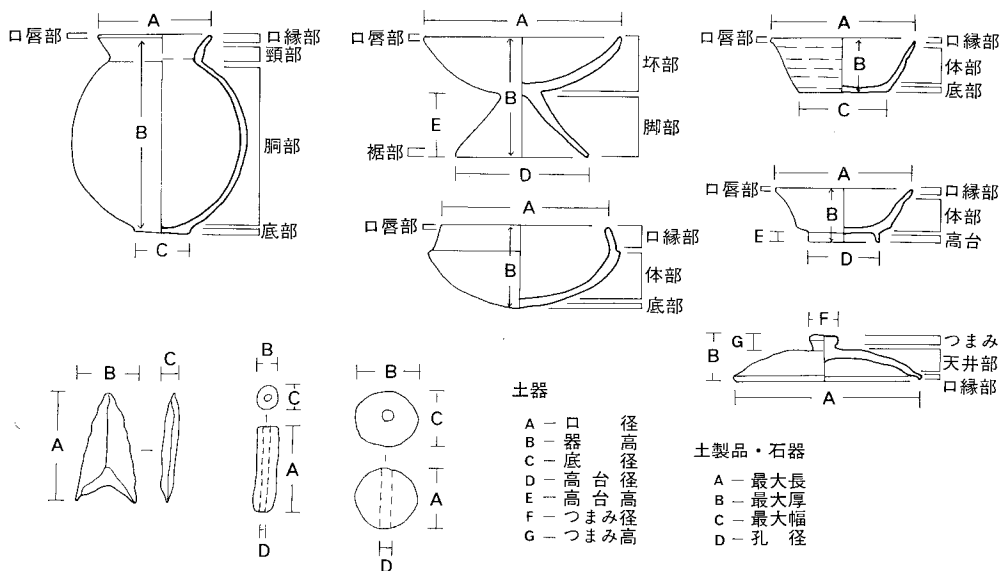
載した。

- ④ 堀は、縮尺20分の1,100分の1の原図を4分の1に縮小したものをトレースして版組みし、それを適宜に縮小して掲載した。
- ⑤ 実測図中のレベルは標高であり、m単位で表示した。  
また同一図中で同一標高の場合に限り一つの記載で表し、標高が異なる場合は各々表示した。
- ⑥ 本文の住居跡の記載について
- 「位置」は、遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。
  - 「重複関係」は、住居跡の切り合い関係を記した。
  - 「平面形」は、壁の上端部で判断し、方形・長方形の場合は下記の分類基準を設け、そのいずれかを明記した。  
方形（短軸：長軸＝1：1.1未満のもの）、長方形（短軸：長軸＝1：1.1以上のもの）
  - 「規模」は、壁の上端部の計測値であり、長軸×短軸の順にm単位で表記した。壁高は、残存壁高の計測値である。
  - 「主軸方向」は、竈を通る線を主軸として、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ傾いているかを角度で表示した。
  - 「長軸方向」は、竈を通る長軸を、「主軸方向」に準じて計測し表示した。
  - 「壁溝」は、その形状や規模を記述した。
  - 「床」は、形状や床質等を記載した。
  - 「ピット」は、その住居跡に伴うと考えられるピットをPで表示し、P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>はピット番号を表し、さらに、ピットの直径と深さを示した。
  - 「貯蔵穴」は、その形状を記述し、数字は長径、短径及び深さを示した。
  - 「覆土」は、堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」、人為堆積の場合は「人為」、攪乱を受けている場合は「攪乱」と記した。
  - 「遺物」は、遺物の種類と数、さらに出土遺物や状態を記述した。  
また、遺構の平面図中に2で示した記号を用い、出土位置をドットで表示し、接合できたものは実線で結んだ。
  - 「所見」は、当該住居跡についての時期やその他特記すべき事項を記述した。

## 5 遺物実測図の記載方法

遺跡から出土した遺物については、実測図、拓影図及び写真等により掲載した。

- ① 土器の実測図は、原則として中心線の左側に外面、右側に内面と断面を図示した。
- ② 土器拓影図は、右側に断面を図示した。
- ③ 遺物は、原則として実測図をトレースしたものを3分の1に縮小して掲載した。しかし、種類や大きさにより異なる場合もある。



## 第2節 表の見方

### 1 住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規 模		床面積 ( $\text{cm}^2$ )	各部の状況			竈 位 置	覆 土	遺 物	備 考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)		溝	床	土柱 穴数				

- ① 位置は、住居跡が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。
- ② 主(長)軸方向は、座標北を $N-0^\circ$ とし、東(E)・西(W)に何度傾いているかを表示した。  
(例  $N-10^\circ-E$ ,  $N-10^\circ-W$ )
- ③ 平面形は、現存している形状の上端面で判断し、方形・長方形の場合は下記の分類基準を設け、そのいずれかを明記した。  
方形 (長軸:短軸=1.1未満:1)    長方形 (長軸:短軸=1.1以上:1)
- ④ 規模の欄の長軸・短軸は、上端の計測値であり、壁高は残存壁高の計測値である。

- ⑤ 床面は、平坦・凹凸・皿状・緩い起伏とに分類して表記した。
- ⑥ 柱穴数は、平面図中に表示されたピットの中からその住居跡に伴うと思われる柱穴の本数を記した。
- ⑦ 竈は、その位置を記した。
- ⑧ 覆土は、自然堆積のものは「自然」、人為堆積のものは「人為」と表記し、不明のものは空欄とした。
- ⑨ 出土遺物は、実測個体数を除いた遺物の種類と、出土土器片の数を記した。
- ⑩ 備考は、重複関係等について記した。

## 2 土坑一覧表

土坑 番号	位 置	長径方向	平面形	規模		覆土	底面	壁 面	遺 物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)					

- ① 土坑番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。また、整理の過程で土坑でないと判断したものは欠番とした。
- ② 平面形は、掘り込み上面の形状を記した。
- ③ 壁面は、坑底からの立ち上がりの状態を簡潔に記した。
- ④ その他の項目については、住居跡一覧表の記載方法に準じた。

## 3 出土土器観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考

- ① 図版番号は、実測図中の番号である。
- ② 法量は、A－口径 B－器高 C－底径 D－高台径 E－高台高、単位はcmである。なお、推定値は〔 〕を付した。
- ③ 胎土・色調・焼成の欄は、上から胎土、色調及び焼成の順で記した。色調については、前節の土層の分類と同じ土色帖を使用した。焼成については、良好、普通、不良に分類し焼き締まって硬いものは良好、焼成があまく手でこすると器面が剥落するものを不良とし、その中間のものを普通とした。
- ④ 備考の欄は、実測(P)番号、土器の残存率、出土位置、その他必要と思われる事項を記した。

#### 4 土製品・鉄製品観察表

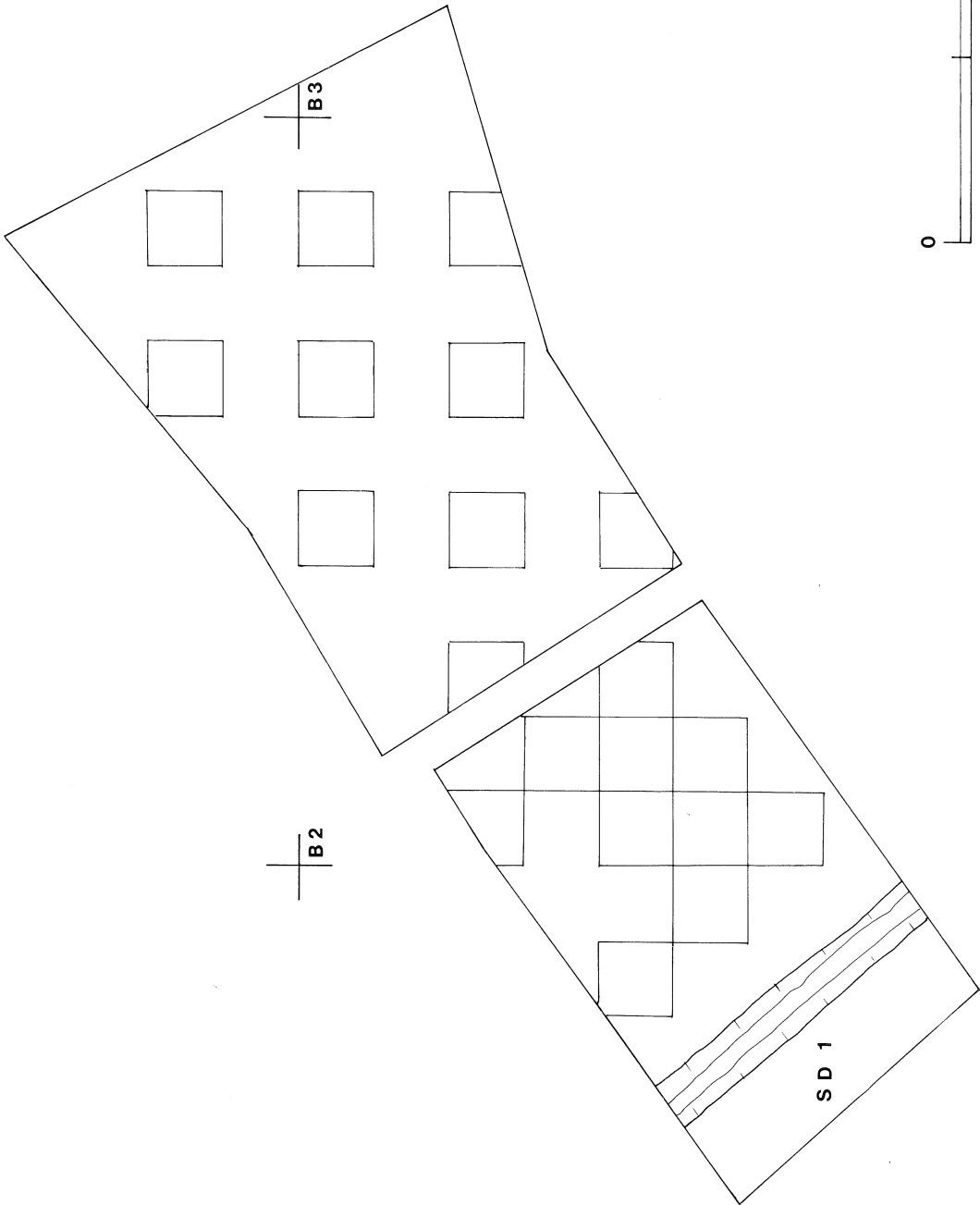
図版番号	器種	法 量(cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					

① 図版番号は、実測図中の番号である。

② 重量の欄で、〔 〕を付した数値は、一部を欠損しているものの現存値である。

#### 5 石器・石製品観察表

図版番号	器種	石 質	法 量(cm)			重 量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備 考
			最大長	最大幅	最大厚				



第4図 餓鬼塚全体図

# 第4章 餓鬼塚

## 第1節 遺跡の概要

餓鬼塚は、鹿島郡銚田町西台714-7番地ほかに所在する。巴川と銚田川にはさまれた半島状の鹿島台地の南西端に位置する。銚田町役場から、北西1.3kmほどの台地縁辺部にあり、西から東にかけてはやや緩斜の東側の小支谷に面している。調査区は、幅20m、長さ60mほどで調査面積は1,170㎡であり、現況は畑地である。

当遺跡の周辺には餓鬼塚古墳群があり、調査区は、その北側に隣接しているが、古墳や塚と思われる高まりが確認されなかった。

調査によって検出された遺構は、堀が1条である。遺物は、弥生式土器片1片、石鏃1点と煙管1点だけである。

## 第2節 遺構と遺物

### 1 堀

当調査区からは堀が1条検出されている。

#### 第1号堀（第6図）

**位置** 調査区の西端、B1区を中心に位置している。

**規模と形状** 上幅2.3～3.0m、下幅0.3～0.7m、深さ0.22～0.82mを測り、確認された長さは、16.8mで、断面形状は「〜」を呈し、壁は底面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦で硬く締まっている。

**方向** B1g<sub>9</sub>から北西方向(N-38°-W)に直線的に延びている。堀の両端は、調査区外に続いている。

**覆土** ローム粒子・炭化物を含む褐色土や黒色土が堆積し、全体的に締まっている。状況から自然堆積と判断される。

**遺物** 覆土上層から弥生式土器の細片が1片出土しているが、流れ込みと考えられる。

**所見** 地形等から排水路や区画的な用途が考えられるが、本跡の全容を把握することができず、時期を決定する遺物も出土していない状況から、その性格については、不明である。

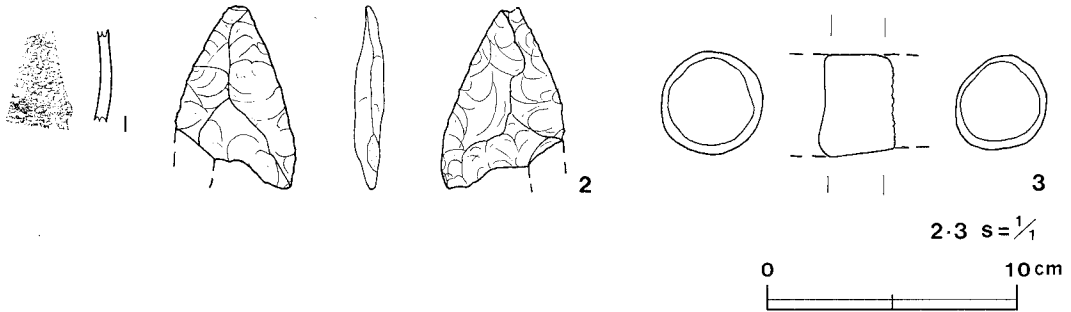


## 2 出土遺物

当調査区から出土した遺物は、グリッドから石鏃1点、煙管1点である。堀からの遺物は、流れ込みと考えられる弥生式土器片1片である。

石鏃は、基部の一部と先端が欠損している。抉りは浅く、石質は、頁岩である。

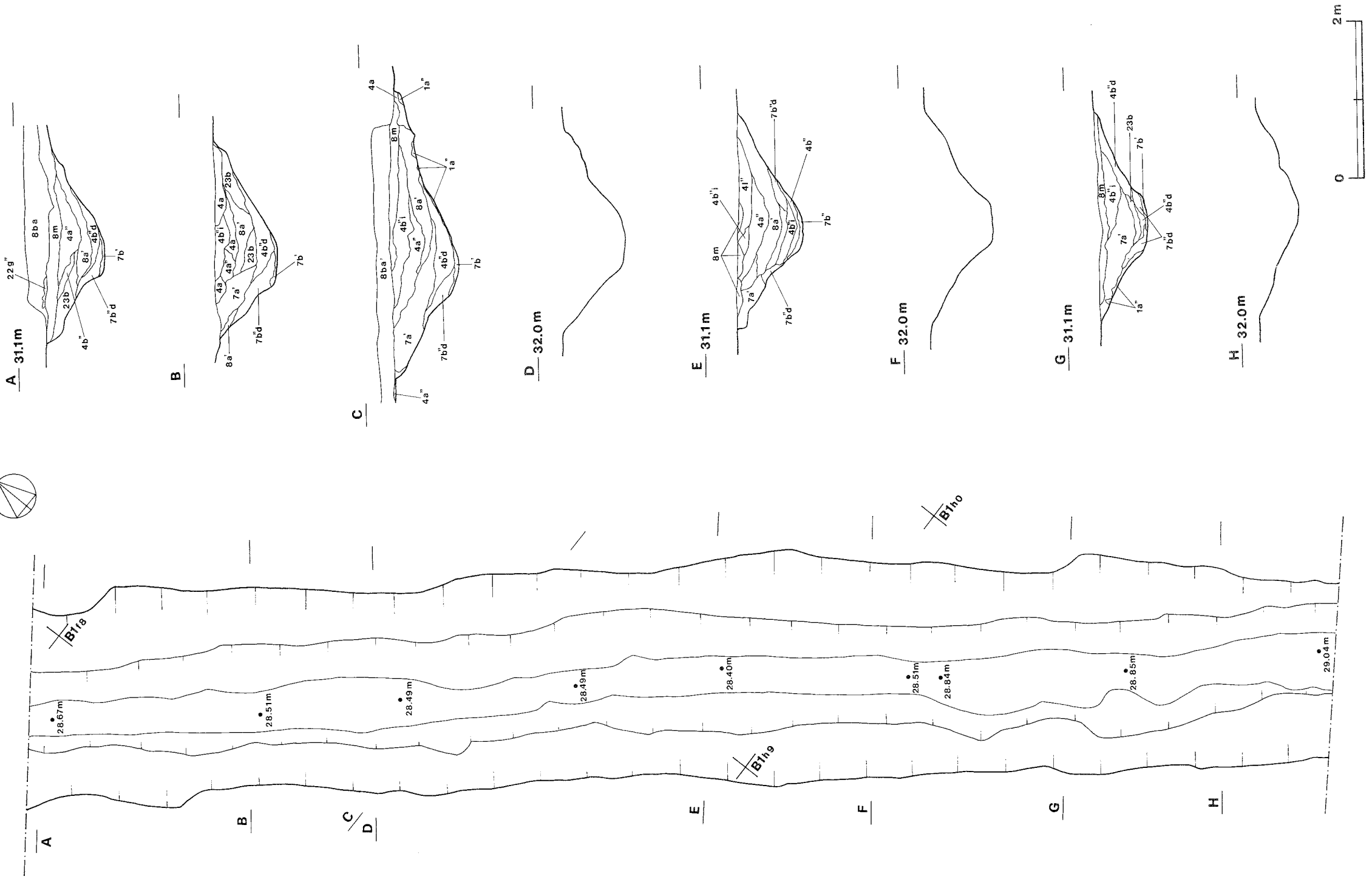
煙管は、火皿の先端部がのこり、雁首、羅宇、吸い口の大部分を欠損している。



第5図 餓鬼塚出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	石質	法量(cm)			重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
2	石鏃	頁岩	2.4	1.6	0.4	0.9	90	グリッド	Q-1

図版番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
3	煙管	1.3	1.0	0.2	1.3	2.3	5	グリッド	M-1



第6图 第1号掘实测图

### 第3節 考 察

本項では、餓鬼塚から検出された堀1条について、遺構の性格として考えられることを述べてみたい。

#### (1) 古墳としての可能性と問題点

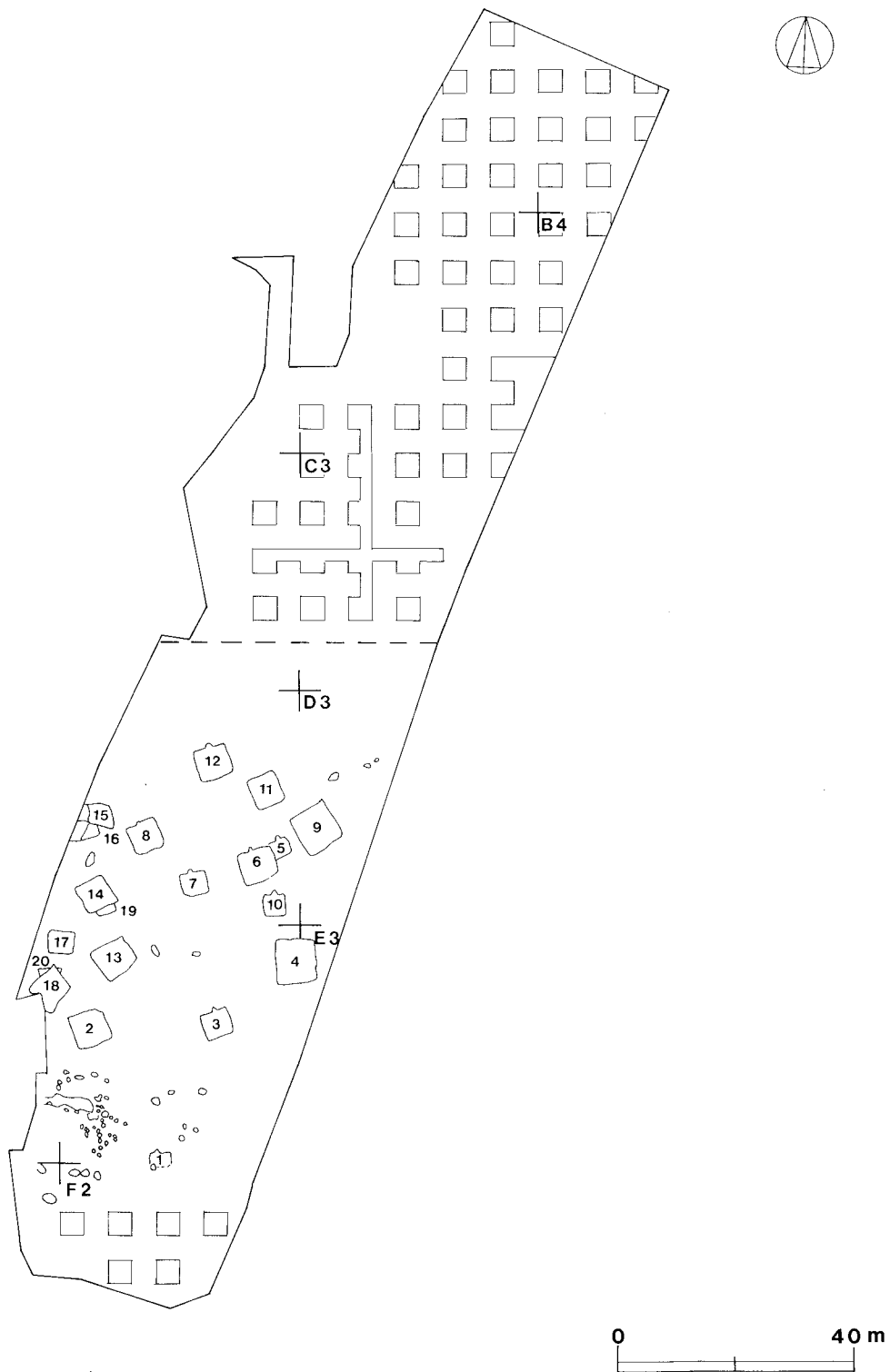
まず古墳としての可能性では、餓鬼塚古墳群に隣接しているが、墳丘は確認されず、主体部、埴輪等の検出をすることはできなかった。この堀を周溝として仮定すると、一辺の長さ16.8m以上で直線的に掘られているため方墳の可能性が考えられるが、墳丘等がないことから、古墳に伴う可能性は薄いものと考えられる。その他、古墳に関係する伝承も聞くことができなかった。

#### (2) 中世の城に伴う堀の可能性と問題点

東の谷を挟んで三階城跡があるため中世の城に伴う堀とも考えられるが、堀の断面形は、箱葉研堀を呈しているものの、規模等では、通常の城に伴う堀とは考えられない。また、周囲に堀や土塁の痕跡や城の伝承も聞くことができなかった。

#### (3) 小 結

このように考えてくると、この堀は、古墳の周溝や中世の城に伴うものと言うよりも、堀の底面のレベルが南から北側に緩やかに傾斜していることから、排水路的性格ではないかと考えられる。しかし、道路幅の部分的な調査であり、遺物も出土しない状況では時期や性格を示すには不明な点が多いため断定はできない。



第7図 沢三木台遺跡全体図

# 第5章 沢三木台遺跡

## 第1節 遺跡の概要

沢三木台遺跡は、鹿島郡銚田町塔ヶ崎415ほかに所在し、鹿島台地の北西端にあたり、銚田町役場からほぼ西側1.6km程の台地縁辺部に位置している。当調査区は、舌状台地縁辺部の標高27～31mで、南北に約200m、東西に約40mにわたる地域であり、面積にして8,802.04㎡である。現況は畑及び山林であり、周辺には土師器片を中心に遺物が散布していた。

今回の調査によって検出された遺構は、古墳時代から奈良時代にかけての竪穴住居跡20軒、土坑15基及びピット群である。竪穴住居跡は、すべて調査区の中央部から南部にかけて、台地の平坦部から緩い南斜面に検出されている。

古墳時代の遺構は、後期の竪穴住居跡が15軒、土坑4基及びピット群が検出されている。それらの中には焼失家屋が、3軒含まれている。

奈良時代の遺構は、竪穴住居跡が5軒、調査区の南部から検出されている。なお、奈良時代とした竪穴住居跡3軒については、遺物の出土量が少ないため、時期を細別することはできなかった。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20)cmで23箱ほど出土している。縄文式土器は、土器片が極少量グリッドから出土している。住居跡や土坑及びピット群からは、土師器が主で甕、坏、甗、高坏等が出土し、須恵器は、甕、坏の破片が出土している。土製品は、球状土錘、管状土錘が出土している。石器では、石鏃や砥石が出土している。

## 第2節 遺構と遺物

### 1 竪穴住居跡

#### 第1号住居跡 (第8図)

**位置** 調査区の南部、E2j<sub>5</sub>区を中心に確認されている。

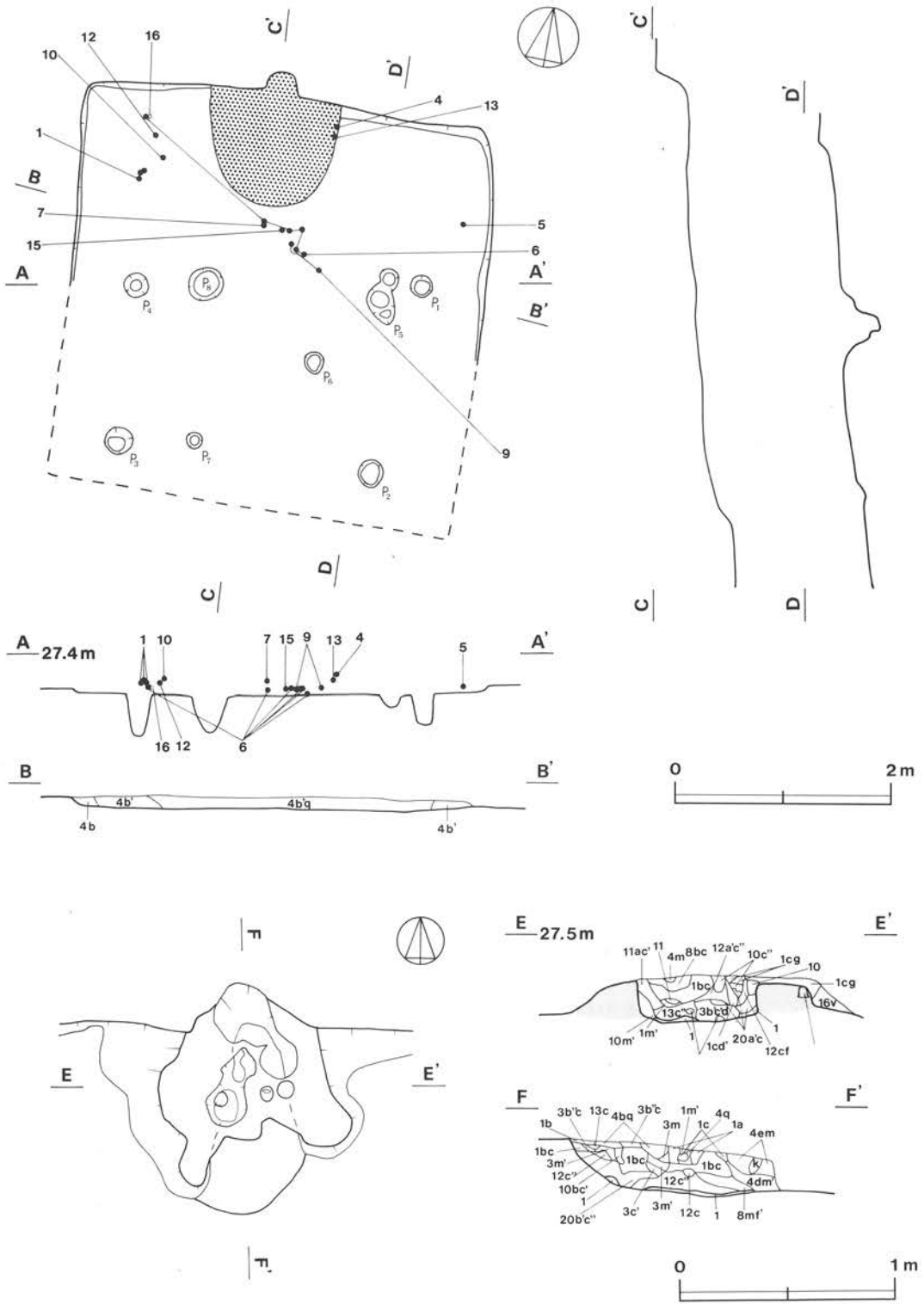
**規模と平面形** 南壁が不明であるが、一辺 [4.0]m程の隅丸方形を呈する住居跡と推定される。

**主軸方向** N-3°-W。

**壁** 壁高5～29cmを測る。遺構確認面が南側へ傾斜しているため、南壁は流失している。東・西壁は一部残存し、北壁は、垂直に近い立ち上がりを示している。

**床** 平坦であり、竈周辺及び床中央部が特に良く踏み固められ堅緻である。

**ピット** 8か所 (P<sub>1</sub>～P<sub>8</sub>) が検出されている。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は主柱穴で、いずれも直径20cm前後の円形を呈し、深さはP<sub>1</sub>～P<sub>2</sub>が深さ40cm前後、P<sub>3</sub>～P<sub>4</sub>が深さ10cm前後を測る。主柱穴は、一辺が3m程の長方形に規則的に配置されている。P<sub>5</sub>～P<sub>8</sub>は、長径16～32cm、短径14～32cm、深さ7～35cm



第8図 第1号住居跡・竈実測図

で、P<sub>7</sub>は、出入口に伴う支柱、または梯子ピットと考えられる。他のピットは、補助柱穴等のピットと思われる。

**竈** 北壁中央部を壁外に20cm程掘り込み、砂質粘土で構築されている。天井部は既に崩落している。規模は、長さ120cm、幅100cmを測る。燃焼部は壁際であり、火床は床面を僅かに掘り窪めた程度で、レンガ状に赤変硬化している。煙道は緩やかに外傾して立ち上がっている。

**覆土** 自然堆積。

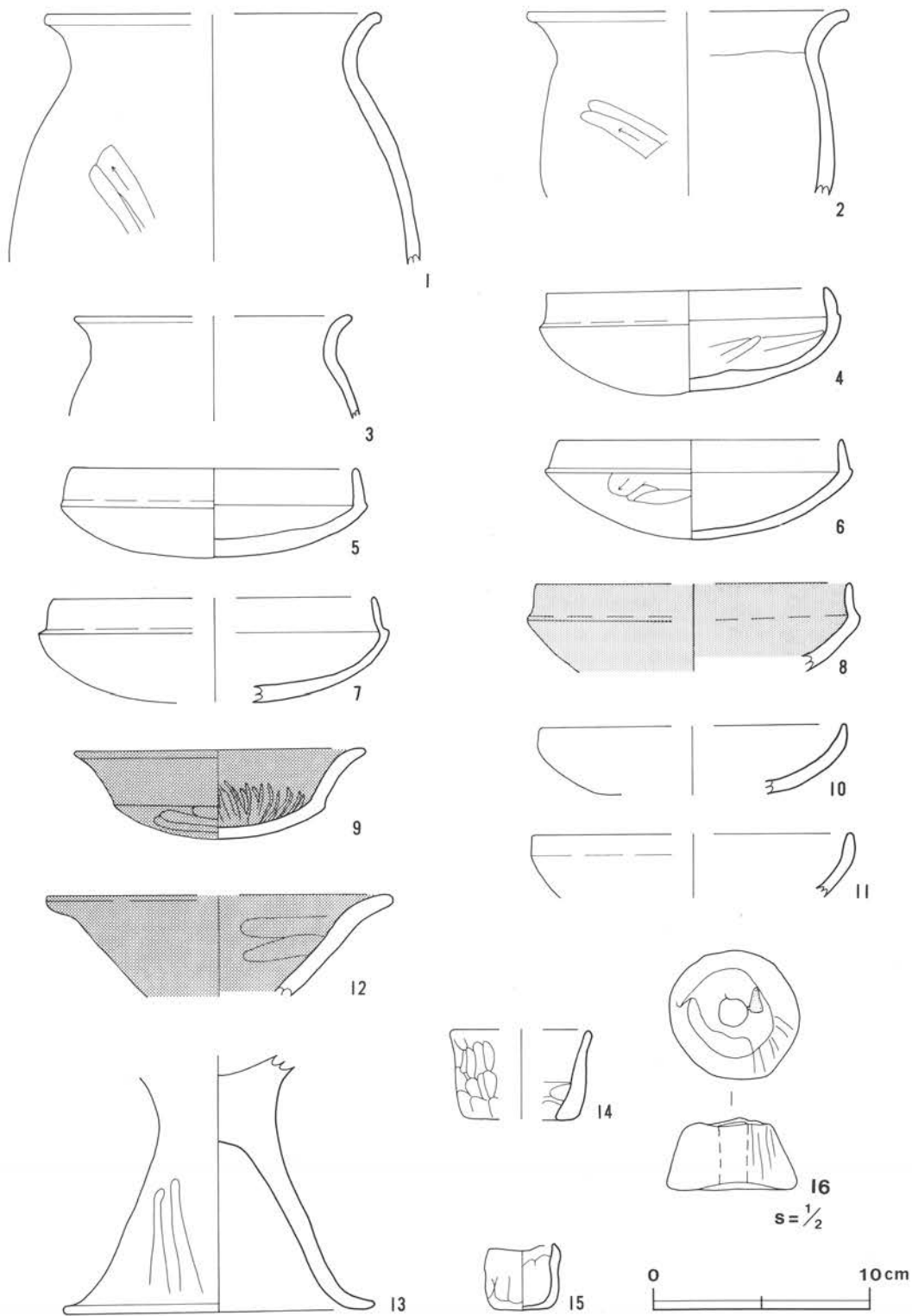
**遺物** 南部を除くほぼ全域から、多量の土師器片が出土している。主な出土遺物は、4の坏、13の高坏の脚部が、竈東側から正位で出土し、13は、出土状態から支脚として使用されたものと思われる。6～7の坏、15のミニチュア土器が中央部覆土中層から正位で、1の甕、10の坏が北西コーナー付近から出土している。

**所見** 本跡は、出土遺物や住居跡の規模、形態等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 1	甕 土師器	A [15.6] B [11.5]	胴下半部欠損。胴上半部は内彎気味に立ち上がる。頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り。	砂粒、長石、パミス 黄橙色 普通	P-1 20% 北西部覆土中層
2	小形甕 土師器	A [14.8] B [ 8.6]	胴下半部欠損。胴中央部から内彎気味に立ち上がる。頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り。	砂粒、雲母 橙色 普通	P-2 20% 覆土中
3	小形甕 土師器	A [13.0] B [ 4.8]	口縁部片。頸部はくびれ、口縁部は外反する。	内・外面剝離が著しく調整不明。	砂粒、雲母、パミス 明赤褐色 普通	P-3 10% 覆土中
4	坏 土師器	A 13.0 B 4.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に丸みのある稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面とも剝離が著しく調整不明。	砂粒、雲母 浅黄橙色 普通	P-5 90% 竈内
5	坏 土師器	A 13.4 B 4.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に丸みのある稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面とも剝離が著しく調整不明。	砂粒、雲母 橙色 普通	P-6 80% 東壁際
6	坏 土師器	A 13.1 B 4.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に丸みのある稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後軽いナデ。内面は暗文状の磨き。	砂粒、スコリア にぶい橙色 普通	P-8 70% 中央部覆土中層
7	坏 土師器	A [14.8] B [ 4.8]	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面とも剝離が著しく調整不明。	砂粒、雲母、長石 黄橙色 普通	P-9 40% 中央部覆土中層
8	坏 土師器	A [14.5] B [ 4.0]	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面暗文状の磨き。内・外面黒色処理。	砂粒、雲母、スコリア 黒褐色 普通	P-10 15% 中央部覆土中層
9	坏 土師器	A 13.3 B 4.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面暗文状の磨き。内・外面赤彩痕。	砂粒、雲母、スコリア 橙色 普通	P-7 60% 中央部覆土下層
10	坏 土師器	A [14.2] B [ 3.1]	底部欠損。体部は内彎気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。	砂粒、雲母 灰褐色 普通	P-12 10% 北西コーナー付近





第9图 第1号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 11	坏 土師器	A[14.8] B[2.9]	体部中央以下欠損。体部は内湾 気味に立ち上がり、そのまま口 縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外 面ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒、バミス 橙色 普通	P-11 10% 覆土中
12	高 土師器	A[18.0] B[4.7]	脚部欠損。坏部はやや外傾して 立ち上がり、口縁部はさらに外 反する。	口縁部内・外面横ナデ。内面軽 いヘラナデ。内・外面赤彩痕が 残る。	砂粒、雲母 明赤褐色 普通	P-14 10% 北西部覆土中層
13	高 土師器	B 10.0 D 14.0 E 7.9	坏部欠損。頸部はラップ状に開 く。	脚部外面ヘラ磨き。	砂粒、細礫、長石 橙色 不良	P-15 50% 電東側
14	ミニチュア 土師器	A[6.4] B 4.2 C[5.0]	平底。体部は外傾して立ち上が る。	体部内・外面指頭圧痕。	砂粒、バミス 橙色 普通	P-16 45% 中央部覆土下層
15	ミニチュア 土師器	A 2.9 B 3.0 C 2.3	平底。体部は直立して立ち上が り、口縁部は内傾する。	体部内・外面指頭圧痕。	砂粒、バミス、長石 浅黄褐色 普通	P-17 100% 中央部覆土中層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
16	紡績車	3.9	3.9	2.2	9.0	34.5	100	北西コーナー	DP-1

## 第2号住居跡（第10図）

**位置** 調査区の南西部，E2e<sub>2</sub>区を中心に確認されている。

**規模と平面形** 長軸6.0m，短軸5.8mの方形を呈する。

**主軸方向** N-22°-W。

**壁** 壁高40～70cmを測り，遺存状態が良く垂直に立ち上がっている。

**壁溝** 上幅4～28cm，深さ10～20cmを測り，壁下を全周している。

**床** ほぼ平坦で，中央部とその付近が堅緻である。

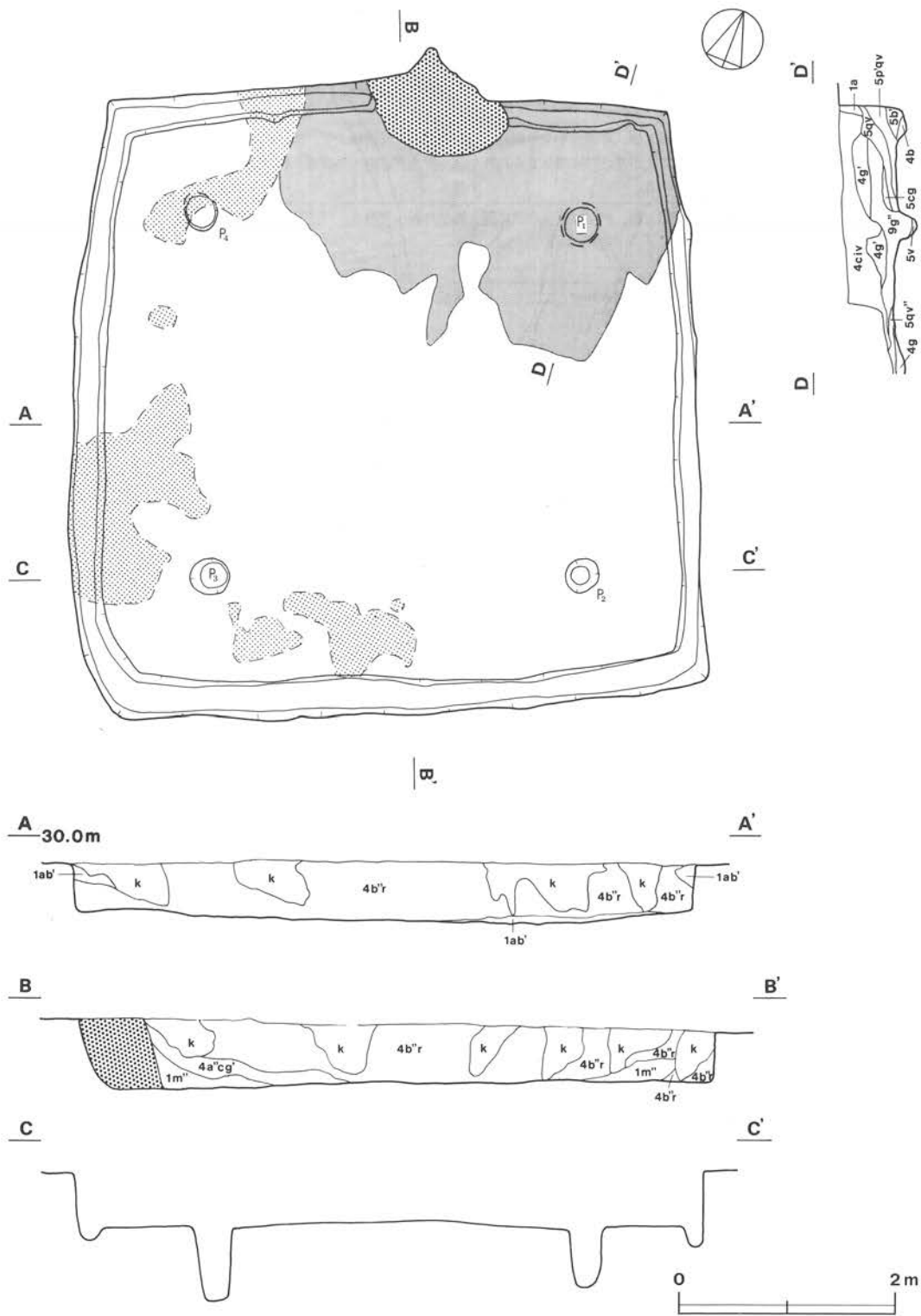
**ピット** 4か所(P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>)が検出されている。いずれも支柱穴で，長径32～42cm，短径32～38cm，深さ55～69cmを測り，柱穴を結んだ線が一辺3.4mの方形に配置されている。

**竈** 北西壁中央部を壁外に36cm程掘り込み，砂質粘土で構築されている。天井部は，既に崩落している。規模は，長さ100cm，幅122cmを測る。燃焼部は壁際にあり，火床は，床面を僅かに掘り窪めた程度でレンガ状に赤変硬化している。煙道は緩やかに外傾して立ち上がっている。

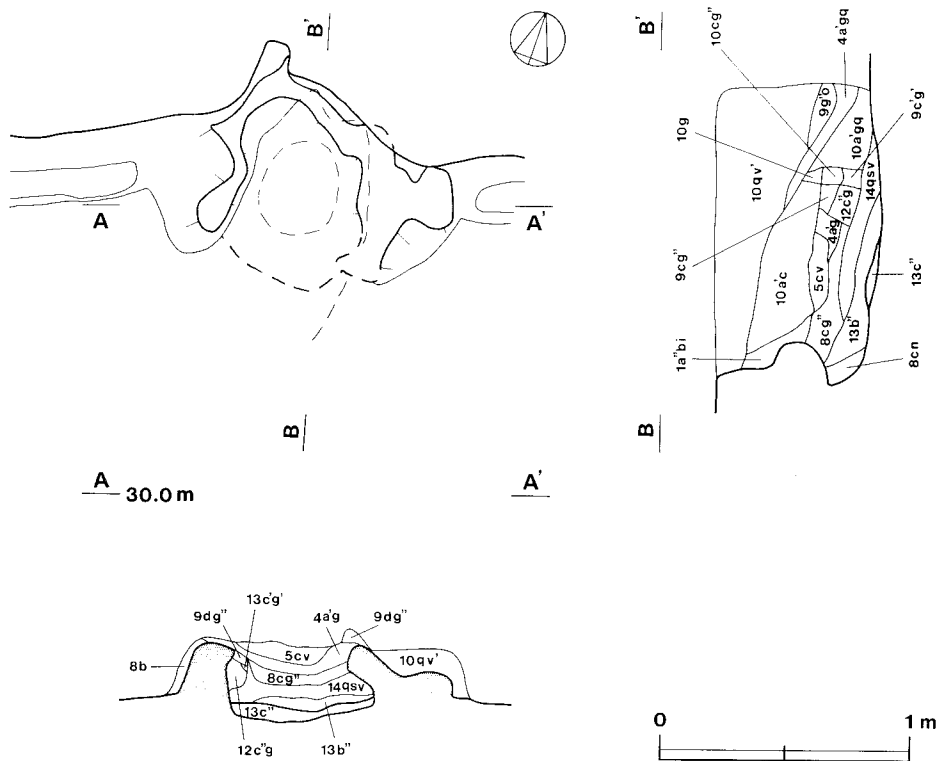
**覆土** 自然堆積。

**遺物** 少量の土師器片が覆土の中・下層から出土している。主な出土遺物は，1の甕，10～12の支脚が竈の東側床面から出土し，5の坏が中央部東側下層から出土している。

また，床面からは焼土や砂が検出されている。焼土は，南西コーナー付近の覆土下層や北西コーナー付近から厚さ2～5cm程で検出されている。砂は，北東コーナー付近から南部にかけて，多量に検出されている。



第10图 第2号住居跡実測図

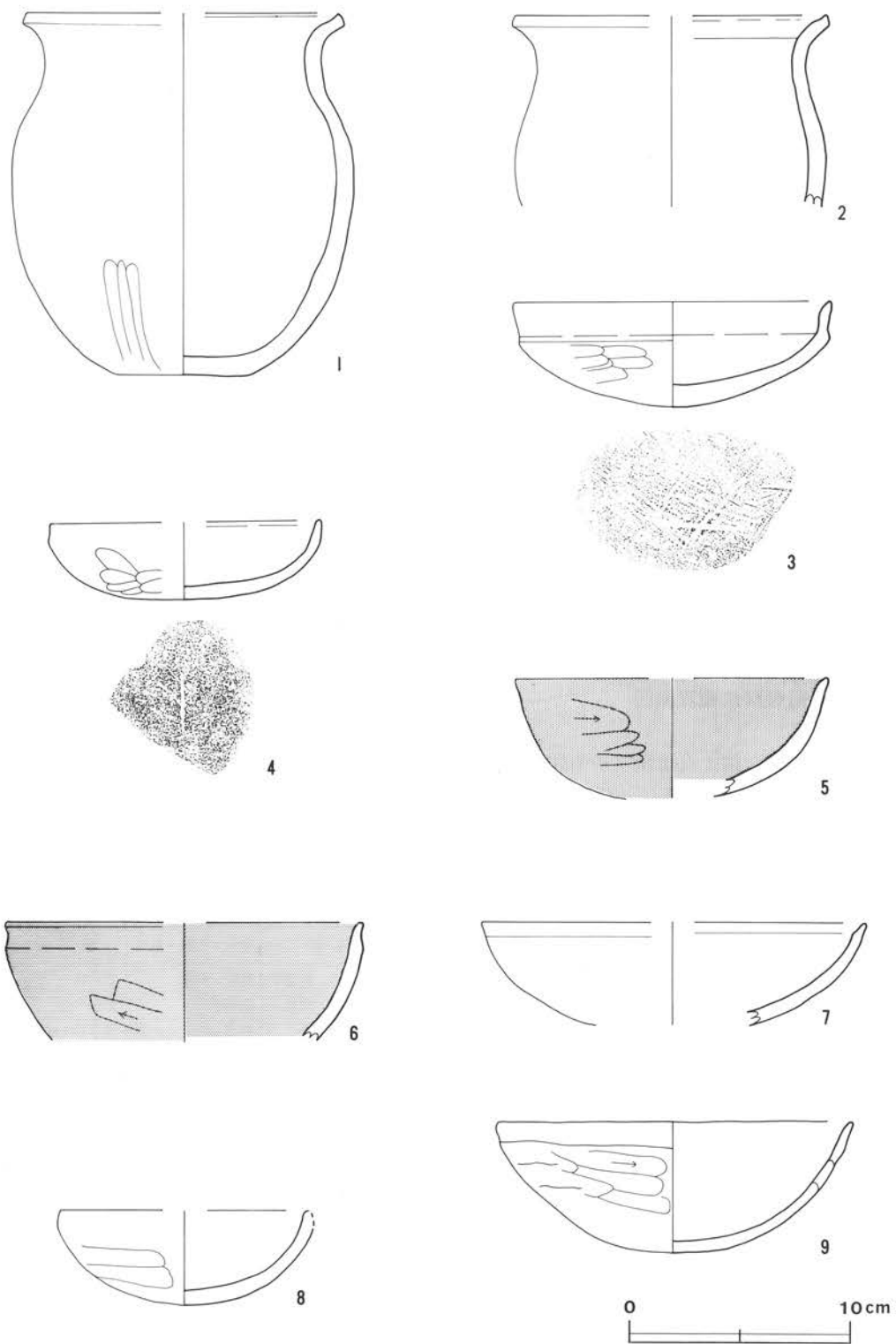


第11図 第2号住居跡竈実測図

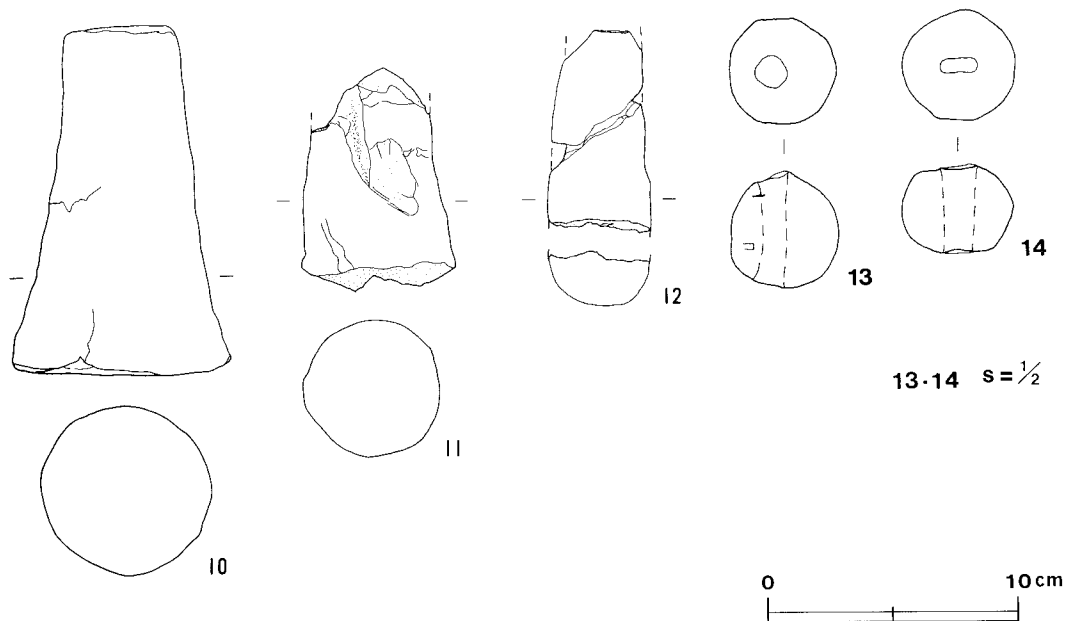
所見 焼土や砂は、第1次堆積（やや住居跡が埋まった時期）後に北側から流れ込んだものと考えられ、第2次堆積をしている。さらにその上には褐色土が第3次の堆積をしている。本跡は、出土遺物や住居跡の規模、形態等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 1	小形甕 土師器	A [14.1] B 16.5 C 6.0	平底。胴部は内彎して立ち上がる。頸部はややくびれ、口縁部は外反し、口縁端面とり。	口縁部内・外面横ナデ。胴部下半部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。内面ヘラナデ。	砂粒、長石 明褐色 普通	P-18 50% 竈東側床面
2	小形甕 土師器	A [14.2] B [ 8.7]	胴中央以下欠損。胴上半から内彎気味に立ち上がる。頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面は、剥離が著しく調整不明。	砂粒、長石 にぶい橙色 普通	P-19 15% 竈西側床面
3	坏 土師器	A 14.4 B 4.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は僅かに直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。底部にヘラ記号。	砂粒、長石、スコリア 明褐色 良	P-21 70% 竈東側床面
4	坏 土師器	A [12.2] B 3.6 C 5.0	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒、雲母 橙色 普通	P-23 20% 底部に疑似木葉痕 中央部覆土中層
5	坏 土師器	A [14.2] B [ 5.3]	底部欠損。体部は、半球形を呈し、内彎しながら外上方に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒、パミス、スコリア 黒色 普通	P-22 30% 中央部覆土下層



第12図 第2号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第13図 第2号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 6	坏 土師器	A [16.3] B [ 5.4]	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒、長石、スコリア 黒褐色 普通	P-24 20% 中央部覆土中層
7	坏 土師器	A [17.5] B [ 4.6]	体部は内彎して立ち上がり、口縁部は僅かに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後軽いナデ。	砂粒、長石、バミス にぶい橙色 普通	P-25 20% 覆土中層
8	坏 土師器	A [11.7] B [ 4.3]	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	体部外面へラ削り後へラナデ。内面剥離が著しく、調整不明。	砂粒、長石 浅黄橙色 普通	P-26 50% 中央部覆土中層
9	鉢 土師器	A 16.0 B 6.0	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面は、へラ削り後へラナデ。輪積痕が残る。	砂粒、バミス、スコリア にぶい橙色 普通	P-27 70% 甕内

図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
10	支脚	14.1	8.7	6.9	—	[773.3]	95	覆土中	DP-7
11	支脚	[ 9.0]	6.2	5.5	—	[254.2]	60	覆土中	DP-8
12	支脚	[ 8.1]	4.0	[ 2.2]	—	[ 63.7]	50	覆土中	DP-9
13	球状土錘	3.1	2.8	2.8	8.0	20.8	100	覆土中	DP-3
14	球状土錘	2.5	3.0	2.9	10.0	18.9	100	覆土中	DP-4

### 第3号住居跡（第14図）

**位置** 調査区の南部，E2f<sub>8</sub>区を中心に確認されている。

**規模と平面形** 長軸5.0m，短軸4.8mの方形を呈している。

**主軸方向** N-8°-W。

**壁** 壁高10～45cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

**床** トレンチャーによる攪乱を受けているが，床面は帯状に残存している。竈から中央部にかけての床面はよく踏み固められている。

**ピット** 2か所（P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>）が検出されたが，いずれも支柱穴の一部で，長径38～55cm，短径32～46cm，深さ48～55cmを測る。他の支柱穴は，トレンチャーによって破壊されて検出できなかった。

**貯蔵穴** 北東コーナー部に確認されている。平面形は楕円形を呈し，規模は，長径64cm，短径46cm，深さ27cmを測り，底面は平坦で，壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

**竈** 北壁中央部を壁外に16cm程掘り込み，砂質粘土で構築されているが，南北及び東西方向のトレンチャーにより大半を破壊され，天井部，煙道部については不明で，袖部が断片的に残存しているにすぎない。規模は残存部から，長さ104cm，幅106cmを有するものと推定される。燃焼部は壁際にあり，火床は床面を僅かに掘り窪めた程度で，レンガ状に赤変硬化している。

**覆土** 全体的にロームブロックを多量に含んでおり，人為堆積と思われる。

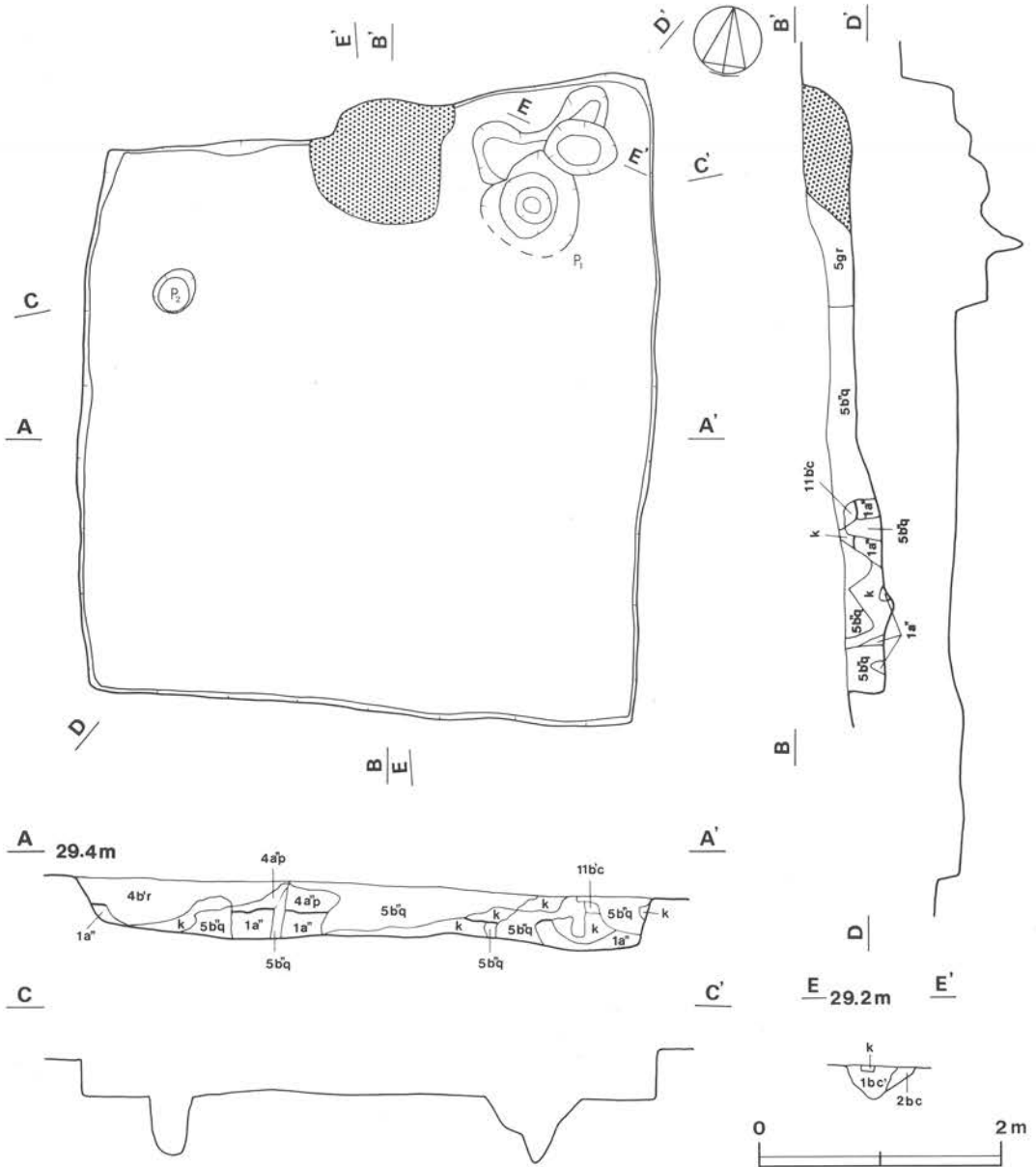
**遺物** 竈周辺から西壁にかけての覆土の中・下層から土師器片を中心とする少量の土器片が出土している。3の甕は竈東側床面などから，5の坏は竈の南側覆土中層から出土し，4の甕，6の坏は，西壁際の床面から出土している。

**所見** 本跡は，出土遺物や住居跡の規模，形態等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 1	甕 土師器	A [16.2] B [4.7]	口縁部片。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒，長石 明赤褐色 普通	P-28 10% 南西部覆土中層
2	甕 土師器	A [15.5] B [3.6]	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒，長石 にぶい橙色 普通	P-29 5% 中央部覆土中層
3	甕 土師器	B [14.3] C [11.2]	胴部以上欠損。平底。胴部は内彎して立ち上がる。	胴部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒，長石，バミス 橙色 普通	P-30 30% 竈東側床面
4	甕 土師器	B [7.1] C [7.9]	平底。胴部は内彎しながら外上方に立ち上がる。	胴部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒，長石，雲母 明赤褐色 普通	P-31 25% 西壁際床面
5	坏 土師器	A [14.2] B [2.9]	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面暗文状のヘラ磨き。	砂粒，雲母 橙色 普通	P-32 20% 竈南側覆土中層

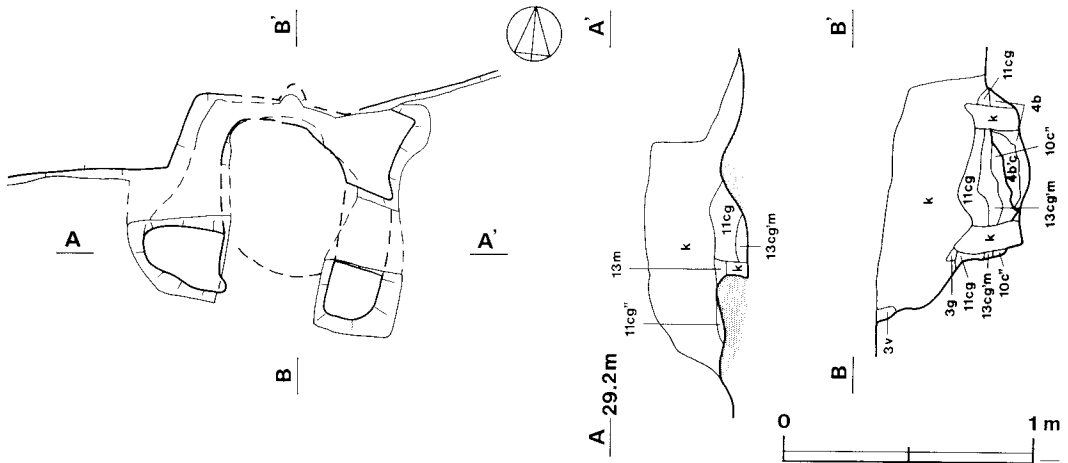
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 6	坏 土 師 器	A [12.0] B 8.5 C [ 6.0]	底部欠損。体部は内灣して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、長石、スコリア 橙色 普通	P-35 40% 西壁際床面
7	ミニチュア 土 師 器	A 6.8 B 3.9 C 5.2	平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面下端に指頭圧痕。	砂粒、長石、雲母 橙色 普通	P-36 45% 覆土中層



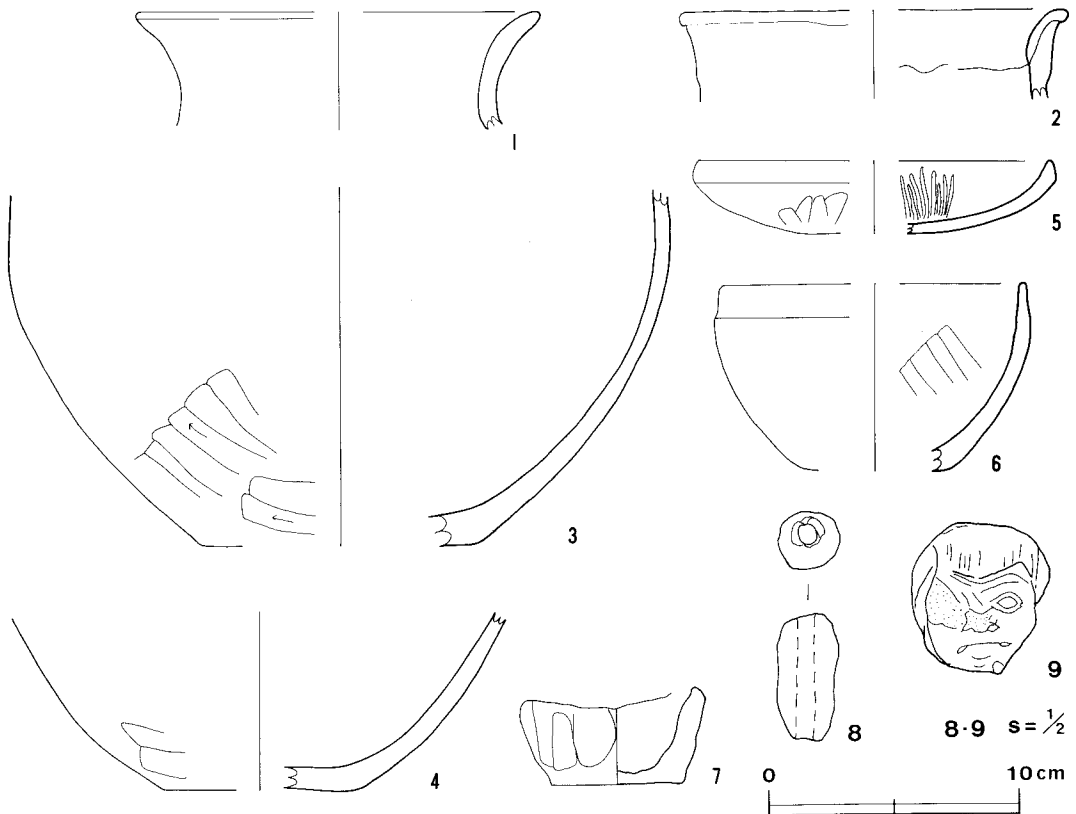
第14図 第3号住居跡実測図



図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第16図 8	管状土錘	3.4	1.6	1.6	0.5	7.5	100	覆土中	DP-10
9	面子	2.0	1.9	—	—	2.1	100	覆土中	DP-11



第15図 第3号住居跡竈実測図



第16図 第3号住居出土遺物実測図

#### 第4号住居跡（第17図）

**位置** 調査区の南部，E2b<sub>0</sub>区を中心に確認されている。

**規模と平面形** 長軸7.3m，短軸7.2mの隅丸方形を呈している。

**主軸方向** N-5°-W。

**壁** 壁高22～57cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

**壁溝** 幅6～28cm，深さ4～16cmを測る。攪乱により南壁下が不明であるが，壁下を全周しているものと推定される。

**床** 大半がトレンチャーによる攪乱を受けているが，帯状に検出されている。ほぼ床面全域から炭化材，焼土が検出されている。

**ピット** 4か所(P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>)が検出されている。いずれも主柱穴で，長径24～46cm，短径26～36cm，深さ67～87cmを測り，柱穴を結んだ線が一辺4mの方形に配置されている。

**竈** 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。トレンチャーによって南北方向に攪乱を受け，袖部が断片的に残存しているにすぎない。規模は，長さ132cm，幅116cmを有すると推定される。火床部，天井部及び煙道部は，不明である。

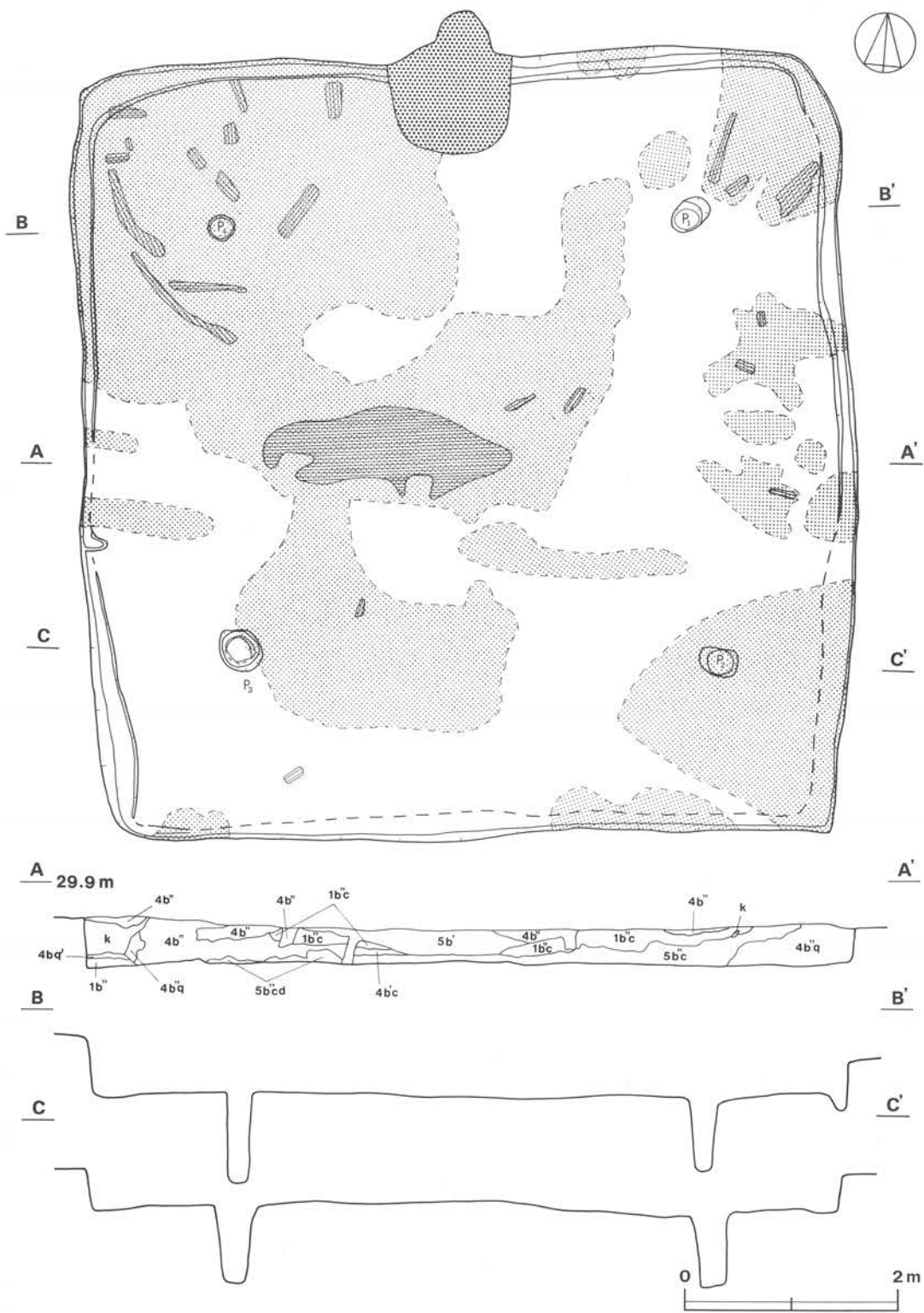
**覆土** 自然堆積。

**遺物** 全体に遺物は少なく，土師器片を中心とする少量の土器片が覆土下層から出土している。6の坏は，北西コーナー付近の床面から，8の鉢は北東コーナーから出土している。

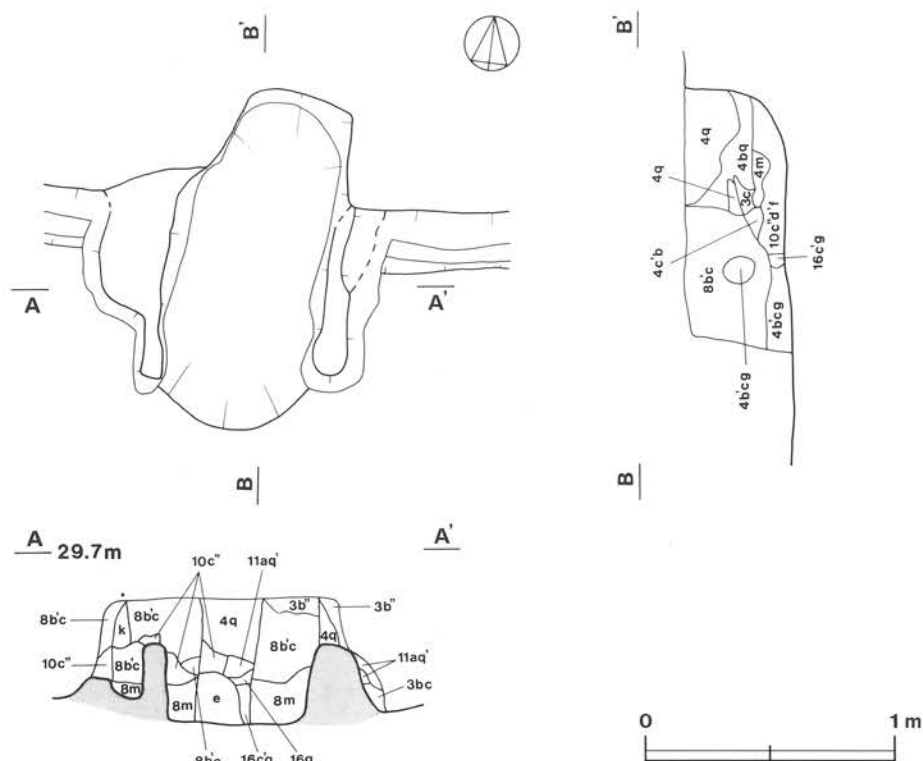
**所見** 壁下及び床面から，多量の焼土，炭化物が検出されており，焼失家屋と考えられる。本跡は，出土遺物や住居跡の規模，形態等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 1	甕 土師器	A [23.0] B [15.3]	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒，長石，雲母にぶい橙色普通	P-37 40% 北東・南西部床面
2	小形甕 土師器	A [13.6] B [12.3]	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面横位のナデ。	砂粒，雲母にぶい赤褐色普通	P-39 20% 竈内
3	甕 土師器	A [24.2] B [12.1]	胴下半部欠損。胴部は内彎して立ち上あがり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面横位のナデ。	砂粒，雲母暗赤褐色普通	P-38 20% 中央部覆土中層
4	坏 土師器	A [12.0] B [4.4]	底部欠損。体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は僅かに外反する。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒，長石，雲母黒褐色普通	P-41 15% 中央部覆土中層
5	坏 土師器	A [11.8] B [4.0]	底部欠損。体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒，雲母，スコリア黒褐色普通	P-42 10% 覆土中層



第17图 第4号住居跡実測図

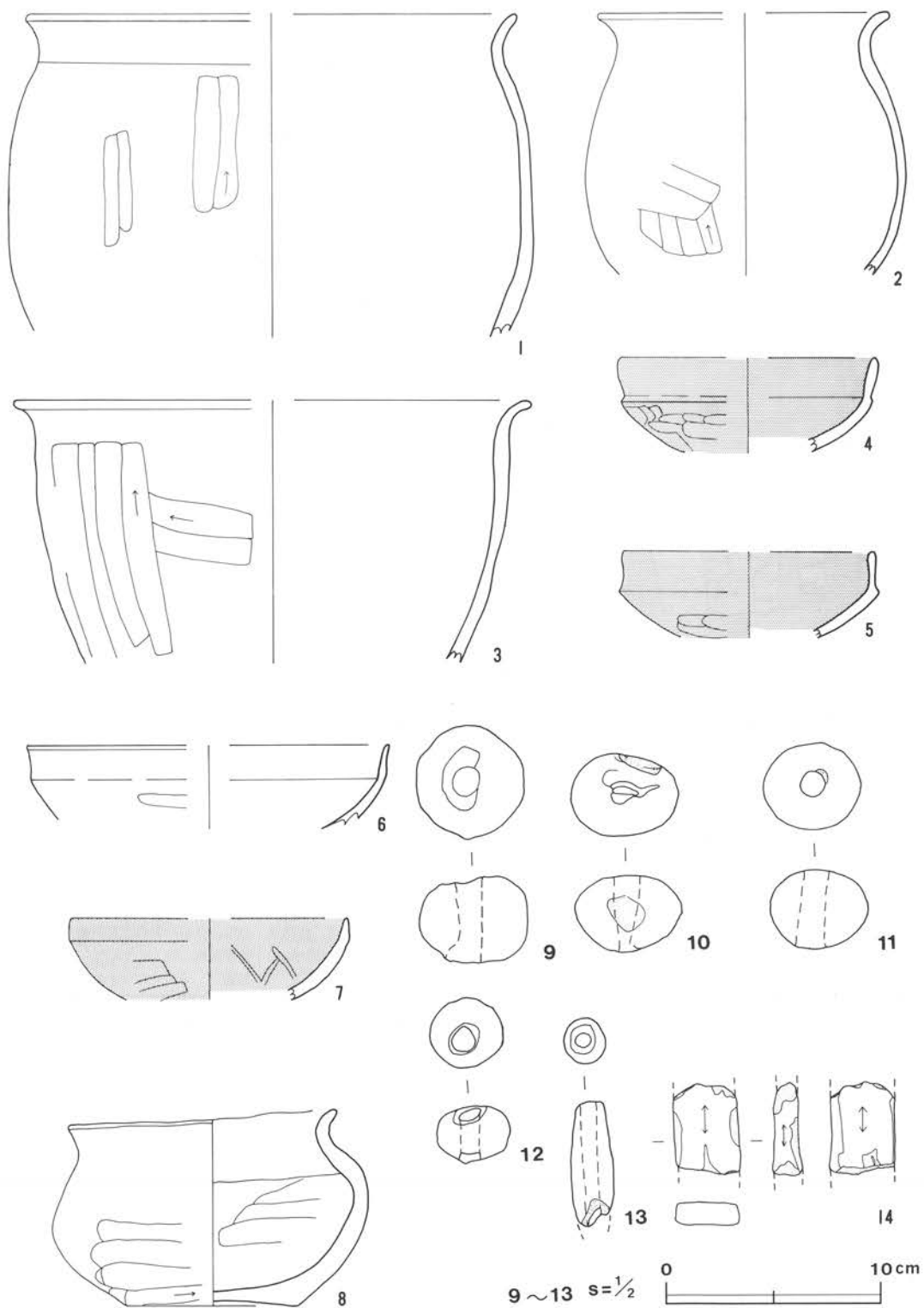


第18図 第4号住居跡竈実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 6	坏 土師器	A [17.0] B [ 3.9]	底部欠損。体部は内彎し、口縁部との境にふい稜をもつ。口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。	砂粒、バミス 橙色 普通	P-43 10% 北西コーナー床面
7	坏 土師器	A [12.8] B [ 3.8]	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒、バミス、雲母 橙色 普通	P-47 10% 中央部覆土中層
8	鉢 土師器	A 12.2 B 9.2 C 7.8	平底。体部は内彎して立ち上がり、頸部でくびれ、口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、長石、雲母 明赤褐色 普通	P-46 55% 北東コーナー付近

図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
9	球状土錘	2.7	3.3	3.5	0.8	27.3	100	覆土中	DP-12
10	球状土錘	2.4	3.3	2.1	0.8	16.1	100	覆土中	DP-13
11	球状土錘	2.5	2.9	2.8	0.8	16.5	100	竈西側床面	DP-14
12	球状土錘	2.2	2.3	2.1	0.7	6.0	100	覆土中	DP-15
13	管状土錘	[3.8]	1.3	1.4	0.5	[ 6.1]	90	覆土下層	DP-16

図版番号	器種	石質	法量(cm)			重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考	
			最大長	最大幅	最大厚					
14	砥	石	安山岩	4.3	3.1	1.3	[25.8]	20	覆土中	Q-1



第19図 第4号住居跡出土遺物実測図

#### 第5号住居跡（第20図）

**位置** 調査区の南側，D2j<sub>9</sub>区を中心に確認されている。

**規模と平面形** 長軸3.5m，短軸3.2mの方形を呈している。

**主軸方向** N-2°-W。

**壁** 壁高7～13cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

**床** 大半がトレンチャーによる攪乱を受けているが，残存する床は，ほぼ平坦である。

**竈** 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。トレンチャーによって大半が破壊され，袖部が断片的に残存しているにすぎない。残存部からは長さ124cm，幅118cmの規模を有するものと推定される。火床は赤変硬化している。煙道部はトレンチャーにより崩壊されており不明である。

**覆土** 自然堆積後全体的に攪乱を受けている。

**遺物** 土師器の細片が極少量出土しているだけである。

**所見** 本跡は，出土遺物も少ないため時期を決定することは困難であるが，住居跡の規模，形態等から奈良時代の住居跡と思われる。

#### 第6号住居跡（第21図）

**位置** 調査区の中央部やや南側の，D2h<sub>9</sub>区を中心に確認されている。

**規模と平面形** 長軸6.1m，短軸5.9mの隅丸方形を呈している。

**主軸方向** N-31°-W。

**壁** 壁高7～25cmを測り，ほぼ外傾して立ち上がっている。

**床** トレンチャーによる攪乱を受けているが，残存する床は中央部でほぼ平坦である。

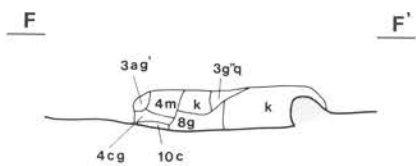
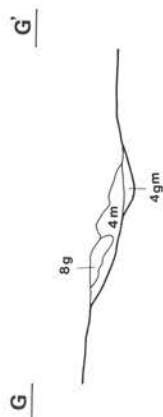
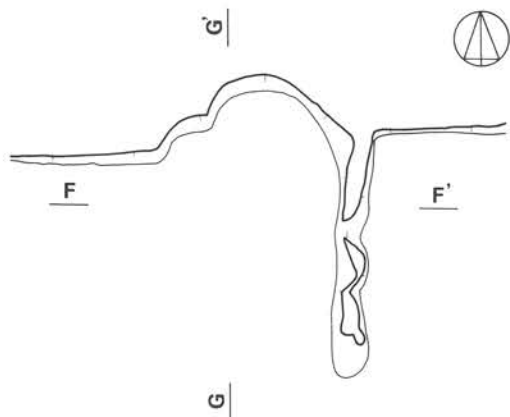
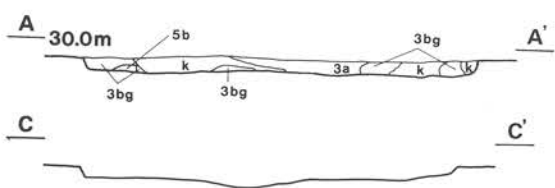
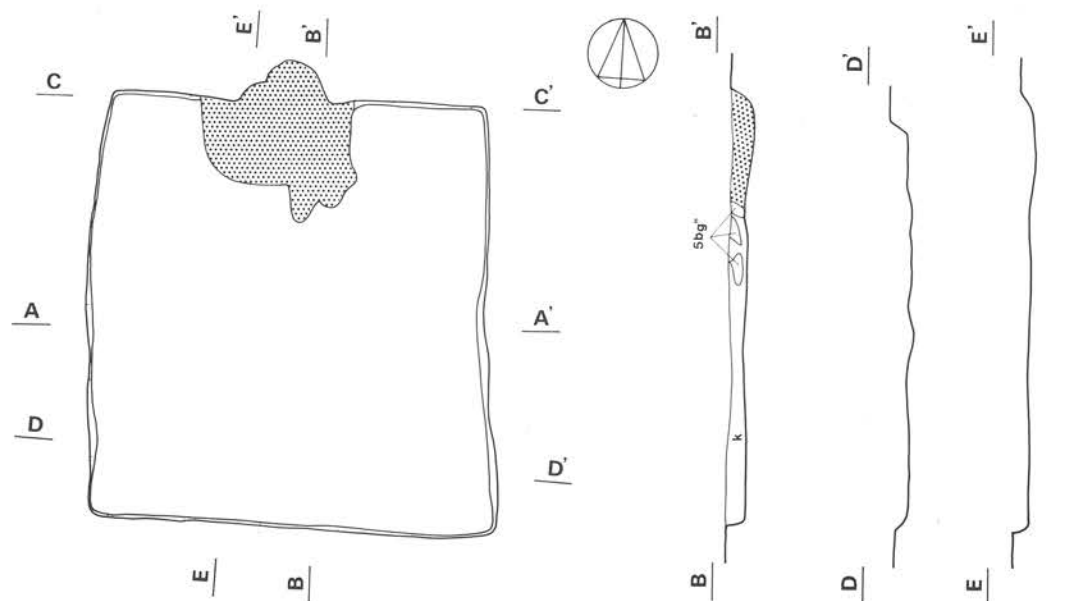
**ピット** 4か所(P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>)が検出されている。いずれも支柱穴で，長径24～50cm，短径22～38cm，深さ32～54cmを測る。柱穴を結んだ線が一辺3.0mの方形状に配置されている。

**竈** 北西壁中央部に砂質粘土で構築されている。トレンチャーによって大半が破壊され，袖部が断片的に残存しているにすぎない。規模は，残存部から，長さ84cm，幅106cmを有すると推定される。火床はレンガ状に焼けている。煙道部については不明である。

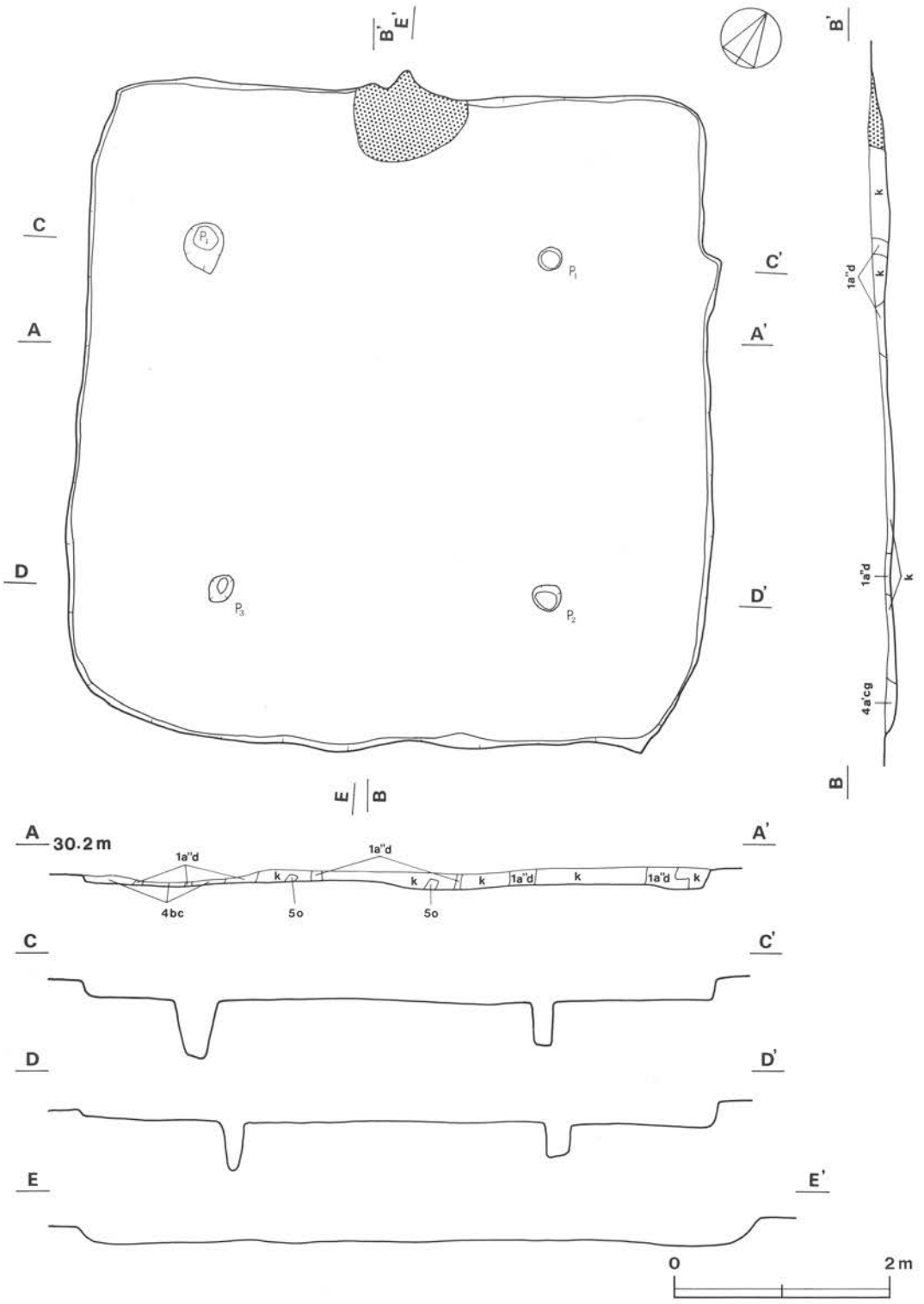
**覆土** 全体的に攪乱を受けているため，不明である。

**遺物** 少量の土師器片が覆土の中・下層から出土している。2の甕は，西コーナー付近の床面から，4のミニチュア土器は，中央部床面から出土している。

**所見** 本跡は，出土遺物や住居跡の規模，形態等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

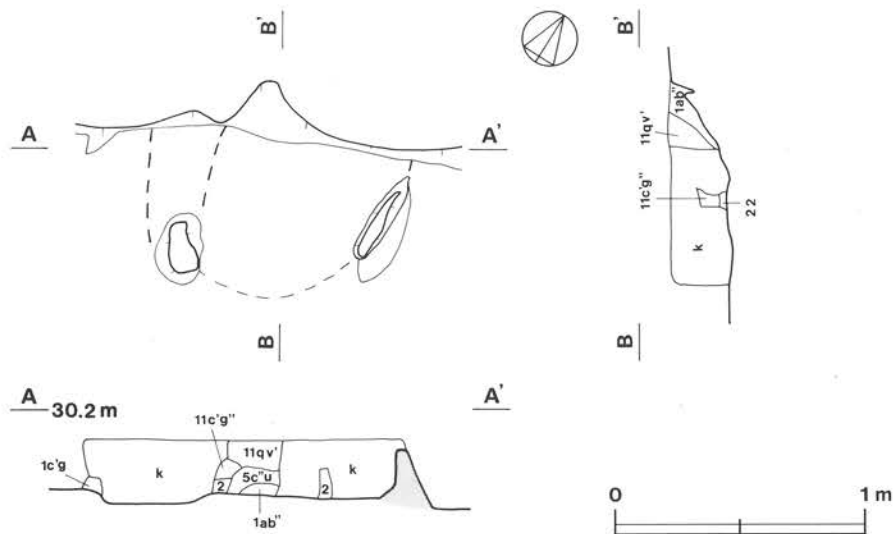


第20図 第5号住居跡・竈実測図

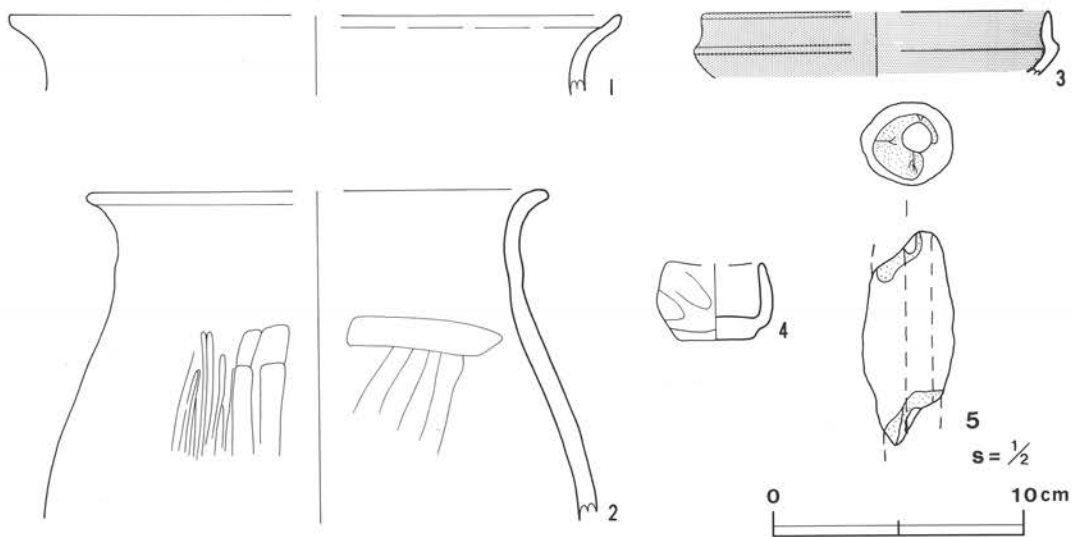


第21图 第6号住居跡実測図





第22図 第6号住居跡竈実測図



第23図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 1	甕 土師器	A[24.6] B[3.3]	口縁部片。頸部はくびれ、口縁部は大きく外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒、バミス にふい橙色 普通	P-49 5% 北西部覆土中層
2	甕 土師器	A[18.5] B[13.2]	胴中央部以下欠損。胴部は内彎し、頸部は僅かにくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラ磨き。胴部内面へラナデ。	砂粒、バミス 赤褐色 普通	P-50 20% 西コーナー床面
3	坏 土師器	A[13.9] B[2.6]	体部下半部欠損。体部は内彎し、口縁部との境に丸味のある稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒、長石、バミス 黒色 普通	P-52 5% 覆土中層

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 4	ミニチュア 土師器	A [ 3.8] B 3.1 C 3.0	平底。胴部は僅かに内彎しながら、口縁部は直立して立ち上がる。	胴部外面指頭圧痕。	砂粒、パミス、雲母にぶい橙色 普通	P-51 70% 中央部床面

図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
5	管状土錘	[5.6]	2.5	2.2	0.8	[22.5]	80	覆土中	DP-18

### 第7号住居跡（第24図）

**位置** 調査区の南部，D2i<sub>6</sub>区を中心に確認されている。

**規模と平面形** 長軸3.3m，短軸3.6mの方形を呈している。

**主軸方向** N-8°-W。

**壁** 北・南壁は部分的に立ち上がりが確認され，壁高14～38cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。東・西壁は，南北に走るトレンチャーと同一方向のため破壊され不明である。

**床** ほぼ平坦と推定される。床面からはトレンチャーによる攪乱を受け帯状に炭化材及び焼土が検出されている。

**ピット** 4か所(P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>)が検出されている。いずれも支柱穴で，長径30～38cm，短径28～36cm，深さ50～80cmを測る。柱穴を結んだ線が一辺2mの方形に配置されている。

**竈** 北壁中央部に，砂質粘土で構築されている。トレンチャーにより大半が破壊され，袖部が断片的に残存しているにすぎない。残存部から長さ74cm，幅75cmの規模を有するものと推定される。火床部と煙道部は，不明である。

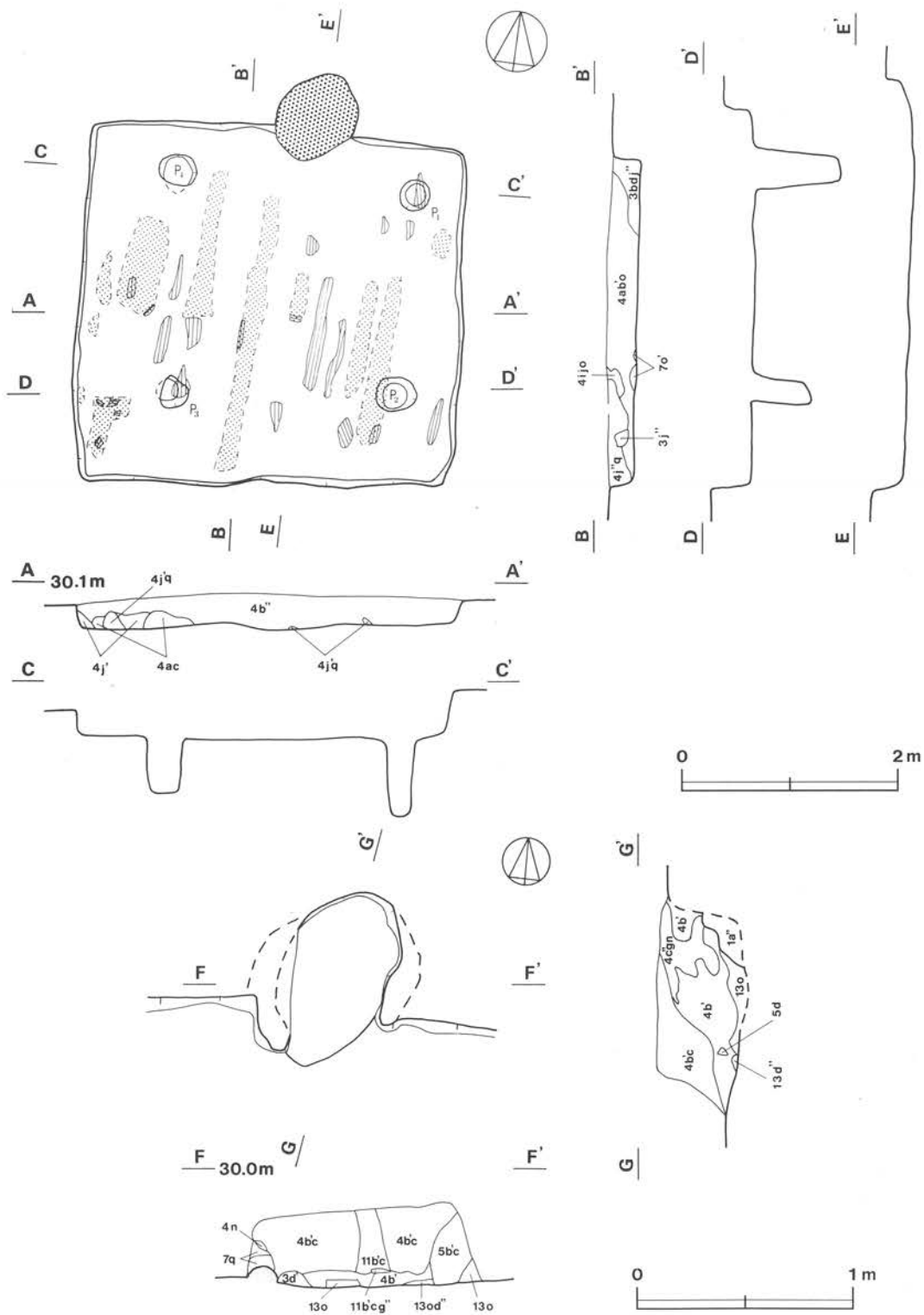
**覆土** 自然堆積。

**遺物** 遺物は全体的に少ない。2の甕は，中央部から東壁よりの覆土中層から出土している。

**所見** 壁際及び床面から，多量の焼土，炭化物が検出されており，焼失家屋と考えられる。本跡は，出土遺物や住居跡の規模，形態等から奈良時代の住居跡と考えられる。

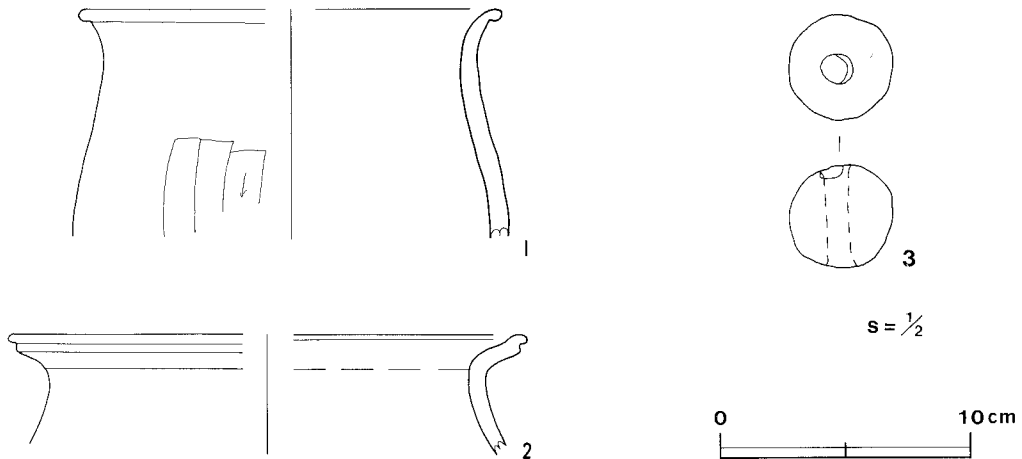
第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第25図 1	甕 土師器	A [17.0] B [ 9.2]	胴中央部以下欠損。胴部は内彎して立ち上がり，頸部はややくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り。	砂粒，雲母，パミス 橙色 普通	P-53 10% 中央部覆土中層
2	甕 土師器	A [20.8] B [ 4.8]	口縁部片。頸部はくびれ，口縁端部に沈線がはいる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒，パミス，スコリア にぶい橙色 普通	P-54 10% 中央部覆土中層



第24图 第7号住居跡・竈実測図

図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第25図 3	球状土錘	2.8	2.7	2.8	0.8	17.3	100	覆土上層	DP-19



第25図 第7号住居跡出土遺物実測図

#### 第8号住居跡 (第26図)

**位置** 調査区の南部，D2g<sub>4</sub>区を中心に確認されている。

**規模と平面形** 長軸5.8m，短軸5.3mの方形を呈している。

**主軸方向** N-22°-W。

**壁** 壁高25~36cmを測り，北壁は外傾し，他の壁は垂直に立ち上がっている。

**床** トレンチャーによる攪乱を受けているが，帯状に残存している床面はほぼ平坦である。北東コーナー付近や竈周辺の床面からは，炭化物，焼土が少量検出されている。

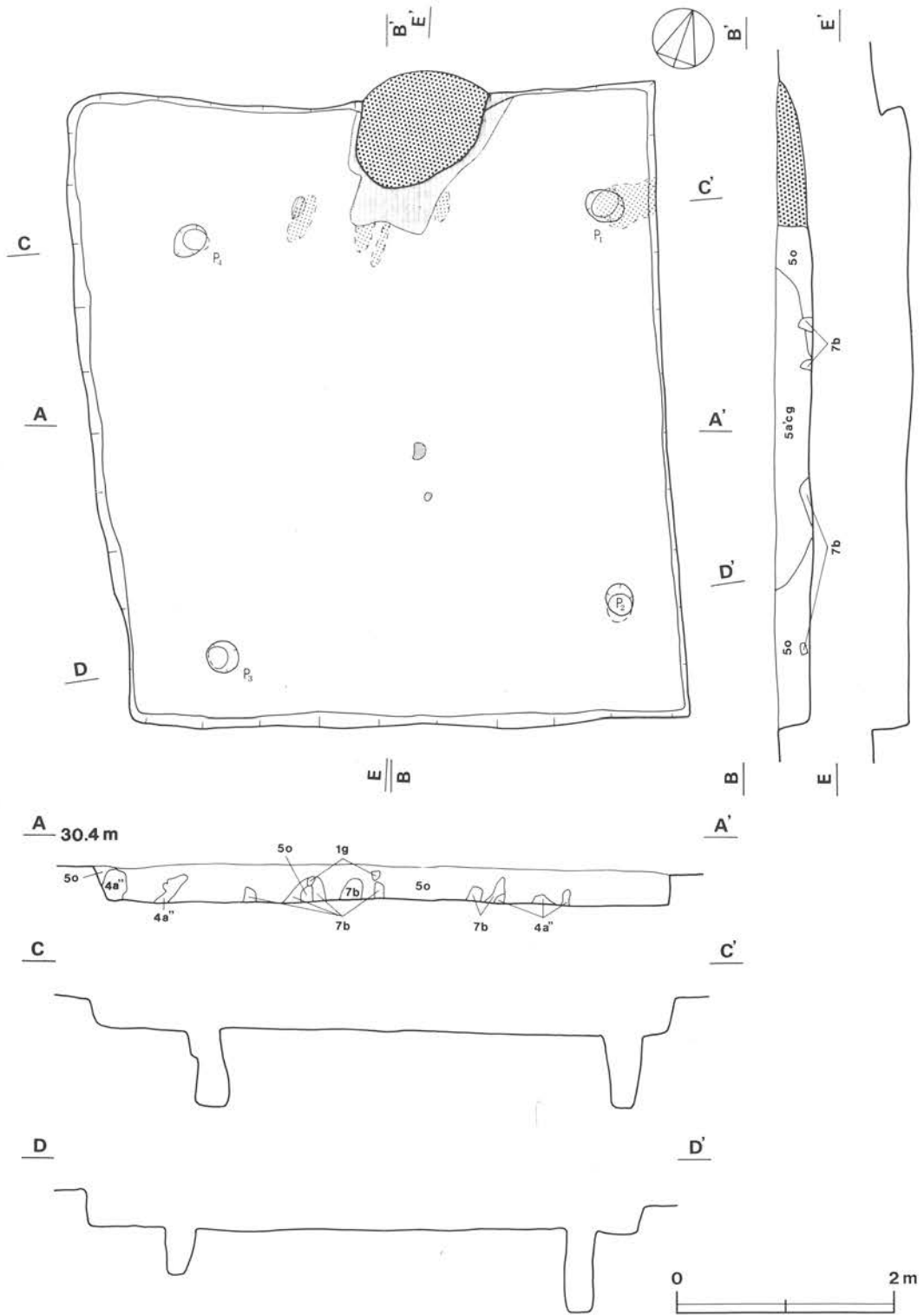
**ピット** 4か所(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)が検出されている。いずれも支柱穴で，長径30~36cm，短径26~30cm，深さ44~76cmを測る。柱穴を結んだ線が一辺4m程の方形状に配置されている。

**竈** 北西壁中央部を壁外に24cm程掘り込み，砂質粘土で構築しているが，トレンチャーにより大半が破壊されている。規模は長さ100cm，幅110cmを有するものと推定される。袖部，煙道部は断片的に残存するが，火床は不明である。

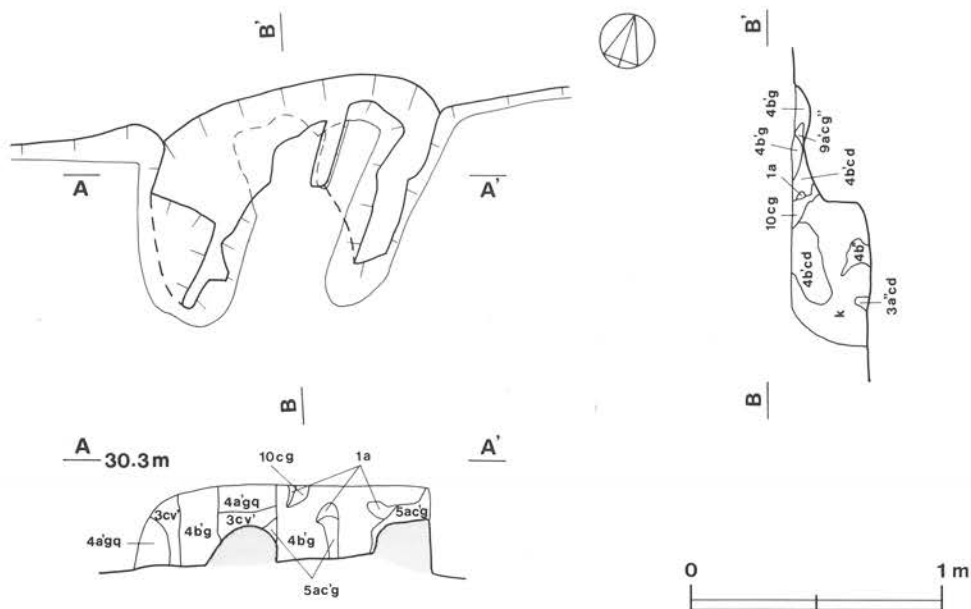
**覆土** 自然堆積後攪乱を受けている。

**遺物** 遺物は，全体的に少ない。5の坏，7の高坏は中央部からやや南側の覆土中層から出土している。

**所見** 本跡は，出土遺物や住居跡の規模，形態等から古墳時代の住居跡と考えられる。



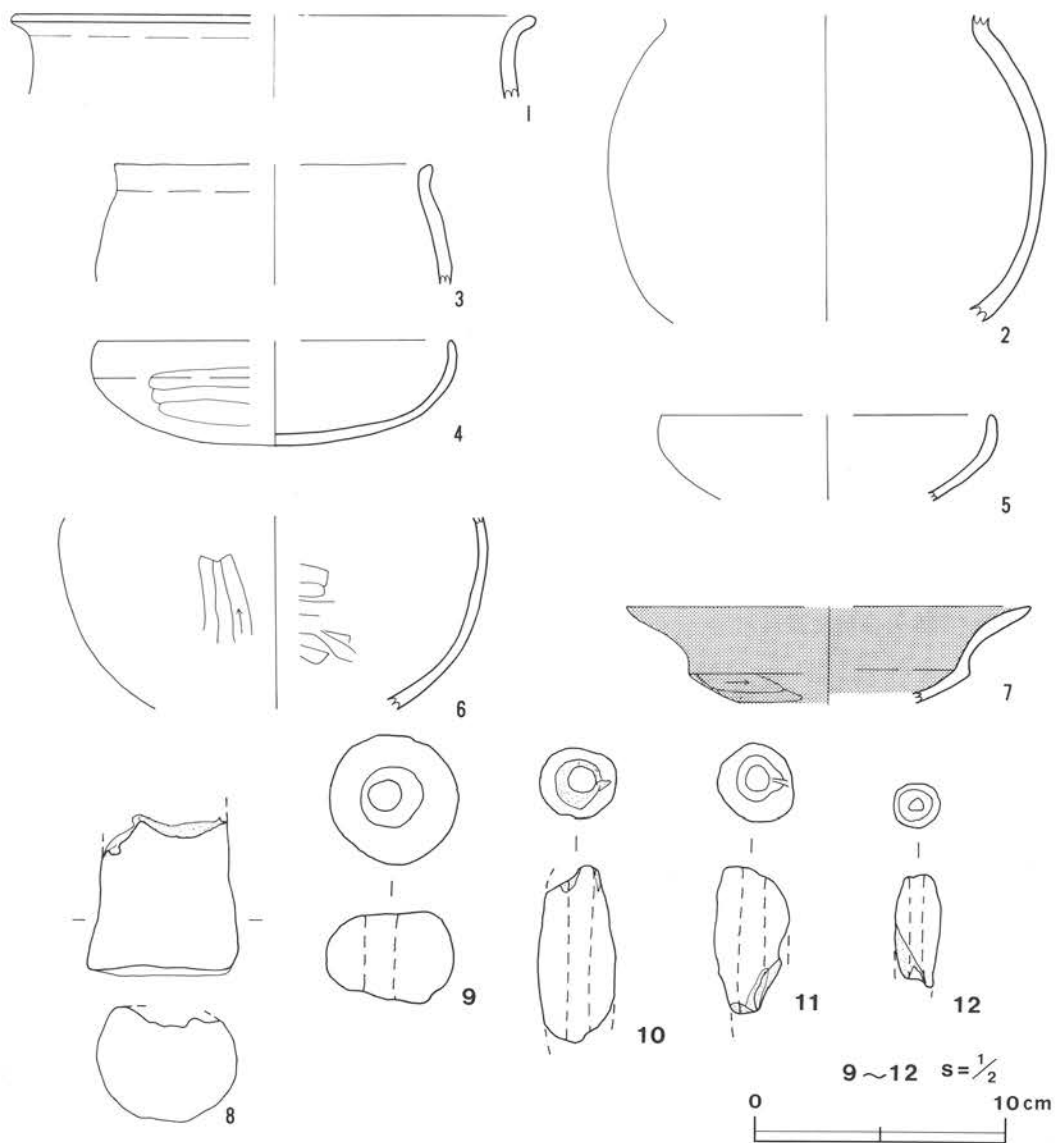
第26图 第8号住居跡実測図



第27図 第8号住居跡竈実測図

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第28図 1	甕 土師器	A [21.0] B [ 3.3]	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒, バミス, スコリア にぶい橙色 普通	P-61 5% 覆土中
2	甕 土師器	B [12.2]	胴部片。胴部は内彎して立ち上がり, 胴中央で最大径をもつ。	胴部内・外面剥離が著しく, 調整不明。	砂粒, 雲母, バミス 暗赤褐色 普通	P-60 15% 北西部覆土中層
3	小形甕 土師器	A [12.6] B [ 4.8]	口縁部片。胴部は内彎し, 口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒, 雲母 暗赤褐色 普通	P-63 5% 覆土中
4	坏 土師器	A [14.1] B 4.2 C 6.0	平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面放射状のヘラ磨き。	砂粒, バミス, スコリア にぶい橙色 普通	P-64 50% 覆土中
5	坏 土師器	A [13.3] B [ 3.4]	底部欠損。体部は内彎し, 口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒, バミス 橙色 普通	P-65 20% 中央部覆土中層
6	鉢 土師器	B [15.4]	口縁部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がる。	胴部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒, 長石, バミス にぶい橙色 普通	P-59 25% 中央部覆土中層
7	高坏 土師器	A [16.3] B [ 3.9]	口縁部片。坏体部は内彎し, 口縁部との境に稜をもつ。口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面横位のヘラ磨き。内・外面赤彩痕。	砂粒, バミス, 雲母 橙色 普通	P-67 10% 中央部覆土中層



第28図 第8号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第28図 8	支脚	[6.3]	6.2	[4.6]	—	[160.8]	30	竈内	DP-25
9	球状土錘	2.5	3.4	3.4	0.8	27.8	100	覆土中	DP-21
10	管状土錘	[4.7]	2.0	1.9	0.7	[15.7]	90	覆土中	DP-22
11	管状土錘	[3.9]	2.0	2.1	0.6	[12.9]	70	中央床面	DP-23
12	管状土錘	[3.1]	1.2	1.2	0.4	[3.6]	60	覆土中層	DP-24

第9号住居跡（第29図）

位置 調査区の中央部，D3f<sub>1</sub>区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.7m，短軸7.0mの方形を呈している。

主軸方向 N-36°-W。

壁 壁高24～38cmを測る。ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 トレンチャーによる攪乱を受けているが，残存する床は，ほぼ平坦である。

ピット 4か所(P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>)が検出されている。いずれも支柱穴である。長径20～40cm，短径12～30cm，深さ7～57cmを測る。柱穴を結んだ線が1辺4mの方形状に配置されている。

竈 北西壁中央部を壁外に32cm程掘り込み，砂質粘土で構築されている。トレンチャーにより大半を破壊され，袖部が断片的に残存しているにすぎない。規模は長さ128cm，幅152cmを有すると推定される。

覆土 全体に攪乱を受けているため，堆積状況は不明。

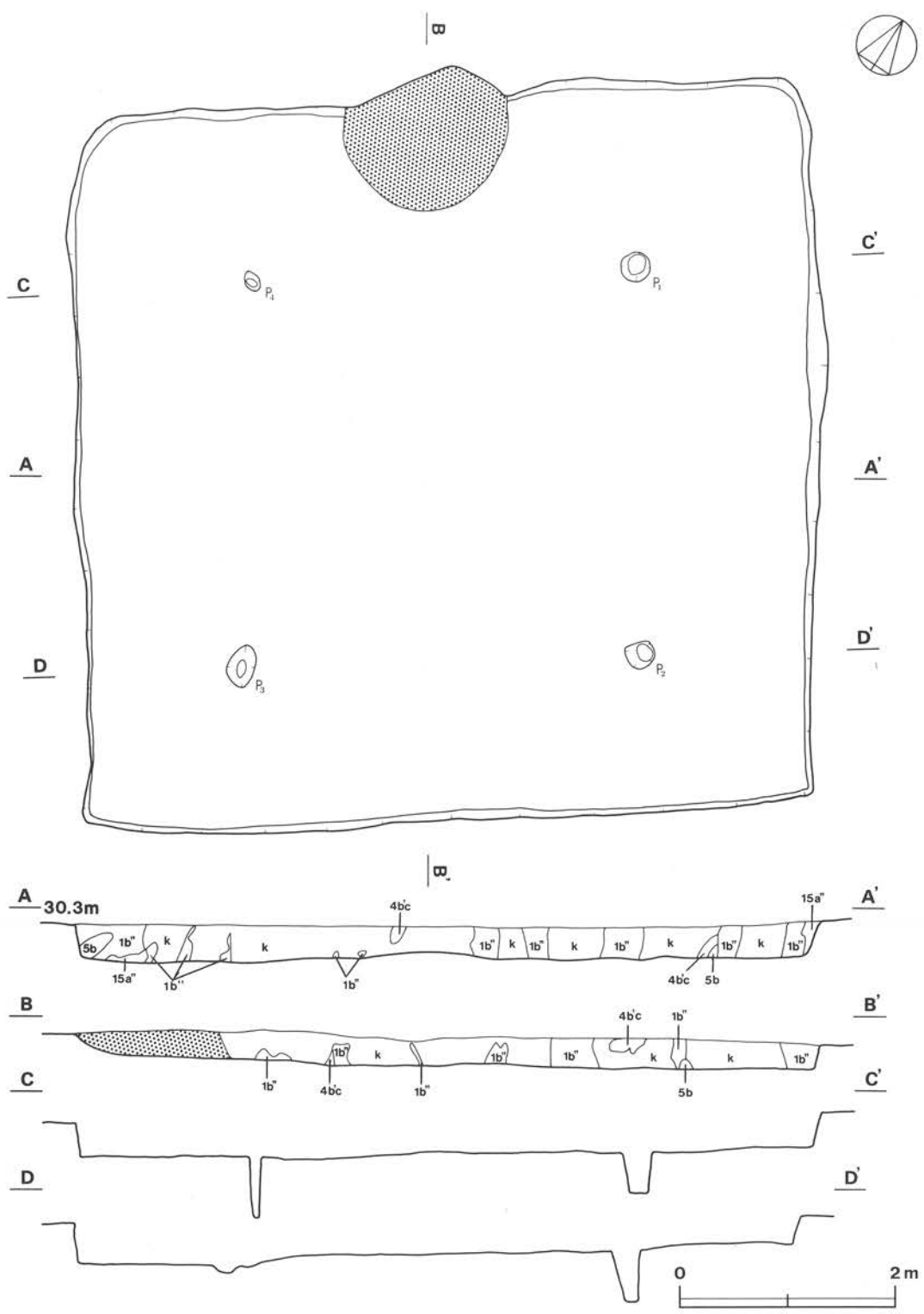
遺物 竈周辺や北コーナー付近から少量出土している。2の甕，4の坏は，竈西側覆土下層から出土し，1の壺はつぶれた状態で東コーナー覆土中層から，7・8の坏は，北東コーナー部床面から出土している。

所見 本跡は，出土遺物や住居跡の規模，形態等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

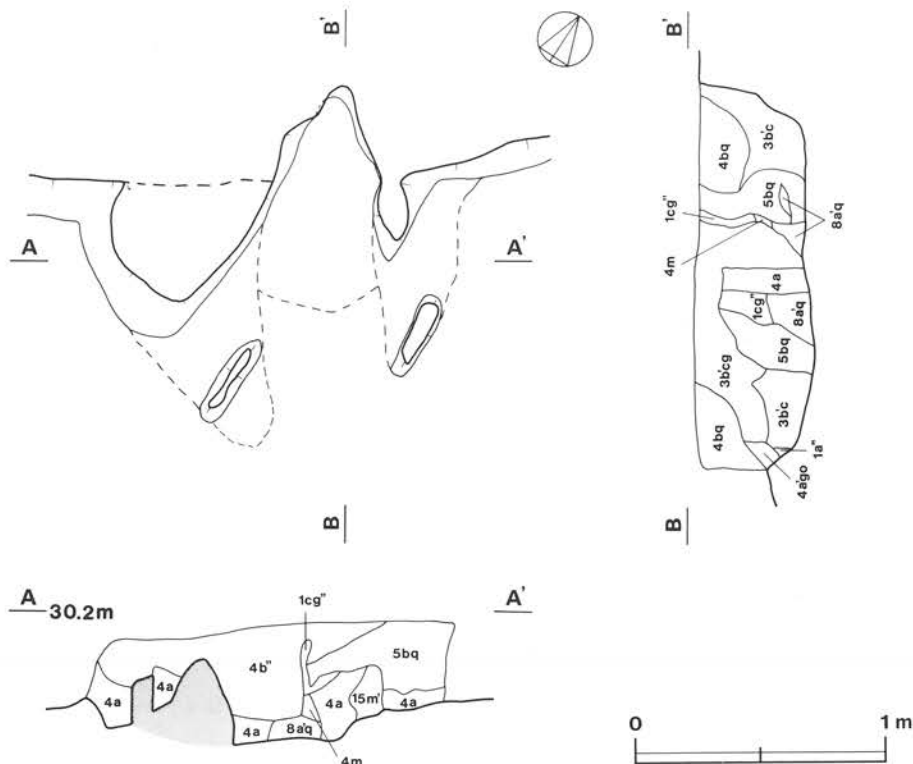
第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第31図 1	壺 土師器	A [17.0] B [12.8]	胴中央部以下欠損。胴部は内彎して立ち上がる。頸部はくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒，雲母，長石 明赤褐色 普通	P-69 20% 北東部覆土中層
2	甕 土師器	A [19.6] B [16.7]	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がる。頸部はくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒，長石，雲母 赤褐色 普通	P-68 35% 竈西側覆土下層
3	甕 土師器	A [15.4] B [ 5.8]	口縁部片。頸部はくの字状にくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒，長石，バミス にぶい赤褐色 普通	P-70 10% 中央部覆土中層
4	坏 土師器	A [11.2] B [ 3.9]	底部欠損。体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は僅かに内傾する。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒，長石，雲母 赤褐色 不良	P-74 50% 竈西側覆土下層
5	坏 土師器	A [11.5] B [ 3.6]	底部欠損。体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒，雲母 にぶい橙色 普通	P-75 5% 覆土中層
6	坏 土師器	A [15.4] B [ 2.9]	底部欠損。体部は外傾して，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒，バミス，長石 黒褐色 普通	P-73 10% 竈西側覆土中層
7	坏 土師器	A 15.2 B 4.4 C 6.5	平底。体部は内彎して立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒，バミス，雲母 黒褐色 普通	P-71 60% 北東コーナー床面





第29图 第9号住居跡実測图

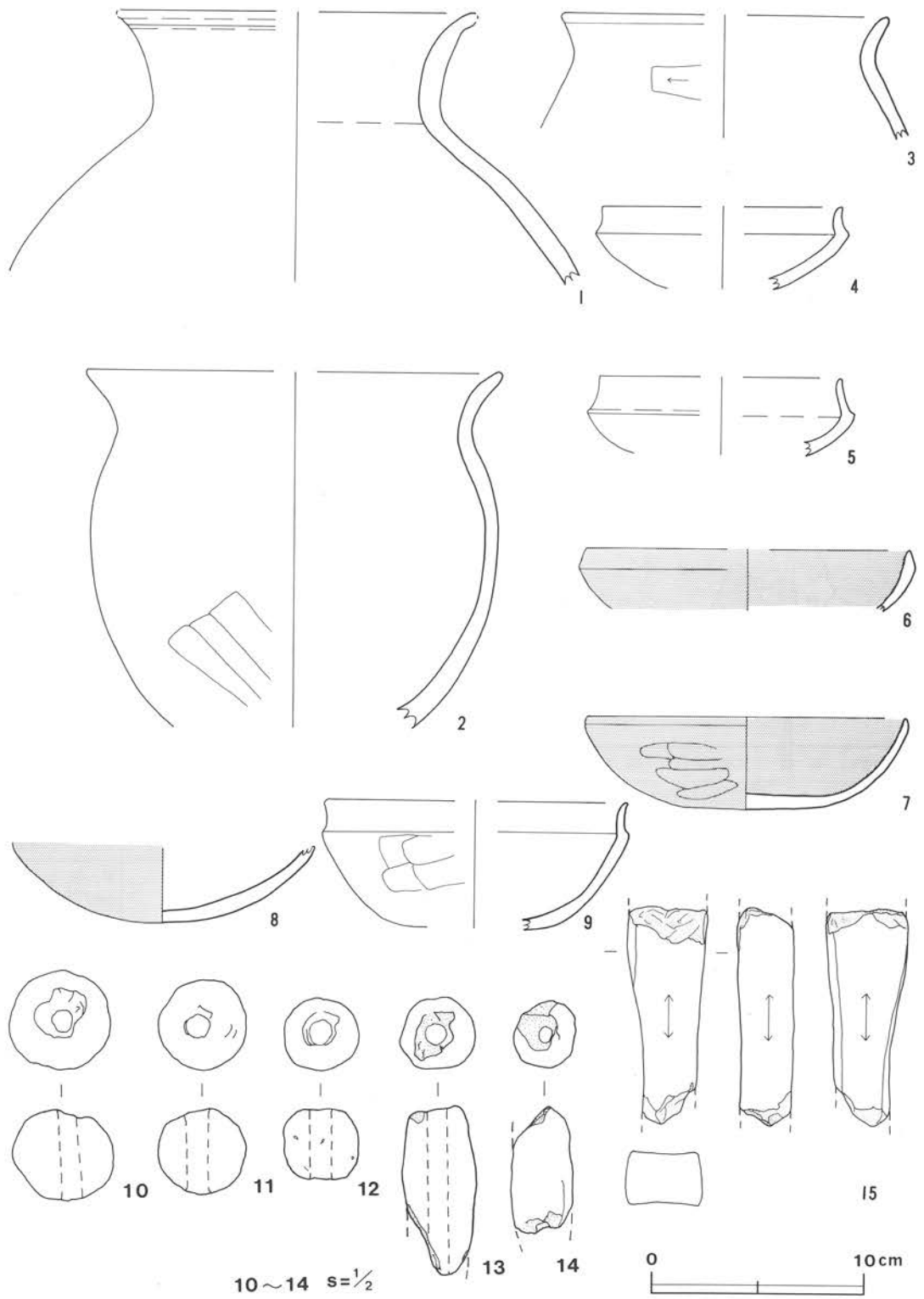


第30図 第9号住居跡竈実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第31図 8	坏 土師器	B[ 3.7]	口縁部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面へラ削り後へラナデ。体部外面黒色処理。	砂粒，雲母 黒褐色 普通	P-72 25% 北東コーナー床面
9	埴 土師器	A[14.4] B[ 5.9]	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に丸みのある稜をもつ。短く外反。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒，バミス にふい黄橙色 普通	P-76 30% 覆土中層

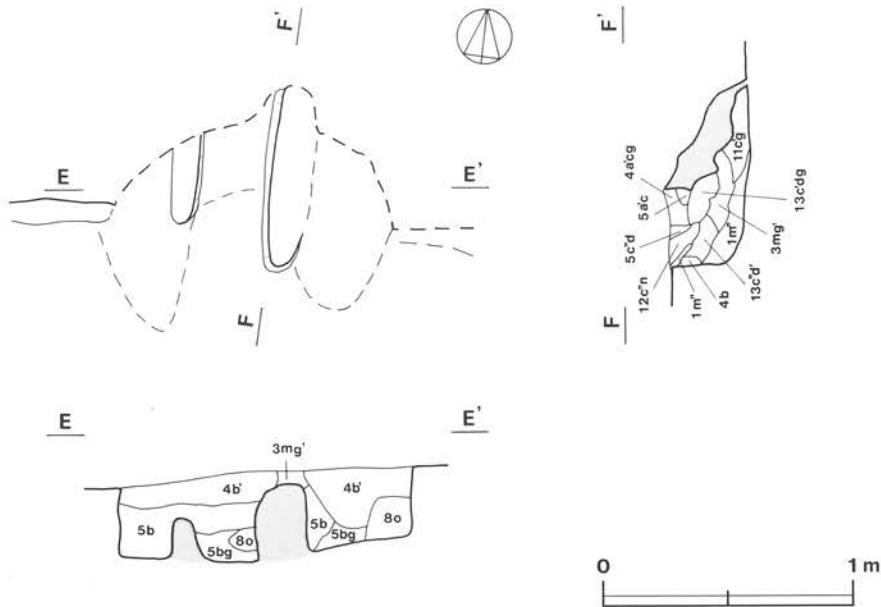
図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
10	球状土錘	2.9	3.2	3.1	0.7	24.9	100	覆土上層 DP-26	
11	球状土錘	2.7	2.7	2.9	0.8	19.8	100	覆土上層 DP-27	
12	球状土錘	2.2	2.4	2.2	0.8	11.1	100	覆土中 DP-28	
13	管状土錘	[5.3]	2.4	2.3	0.7	[22.1]	70	覆土上層 DP-30	
14	管状土錘	[4.0]	2.0	2.1	4.0	[13.5]	70	覆土中 DP-31	

図版番号	器種	石質	法量(cm)			重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
15	砥	石砂岩	[10.3]	3.8	2.7	[148.6]	80	覆土中 Q-3	



第31图 第9号住居跡出土遺物実測図





第33図 第10号住居跡竈実測図

#### 第11号住居跡（第34図）

**位置** 調査区の南部，D2e<sub>9</sub>区を中心に確認されている。

**規模と平面形** 長軸5.0m，短軸4.8mの隅丸方形を呈している。

**主軸方向** N-19°-W。

**壁** 壁高34～38cmを測り，垂直に近い状態で立ち上がっている。

**床** 床面は，全体的にトレンチャーにより攪乱を受けているが，残存部は，堅緻である。残存する帯状の床面からは，炭化材，焼土が出土している。

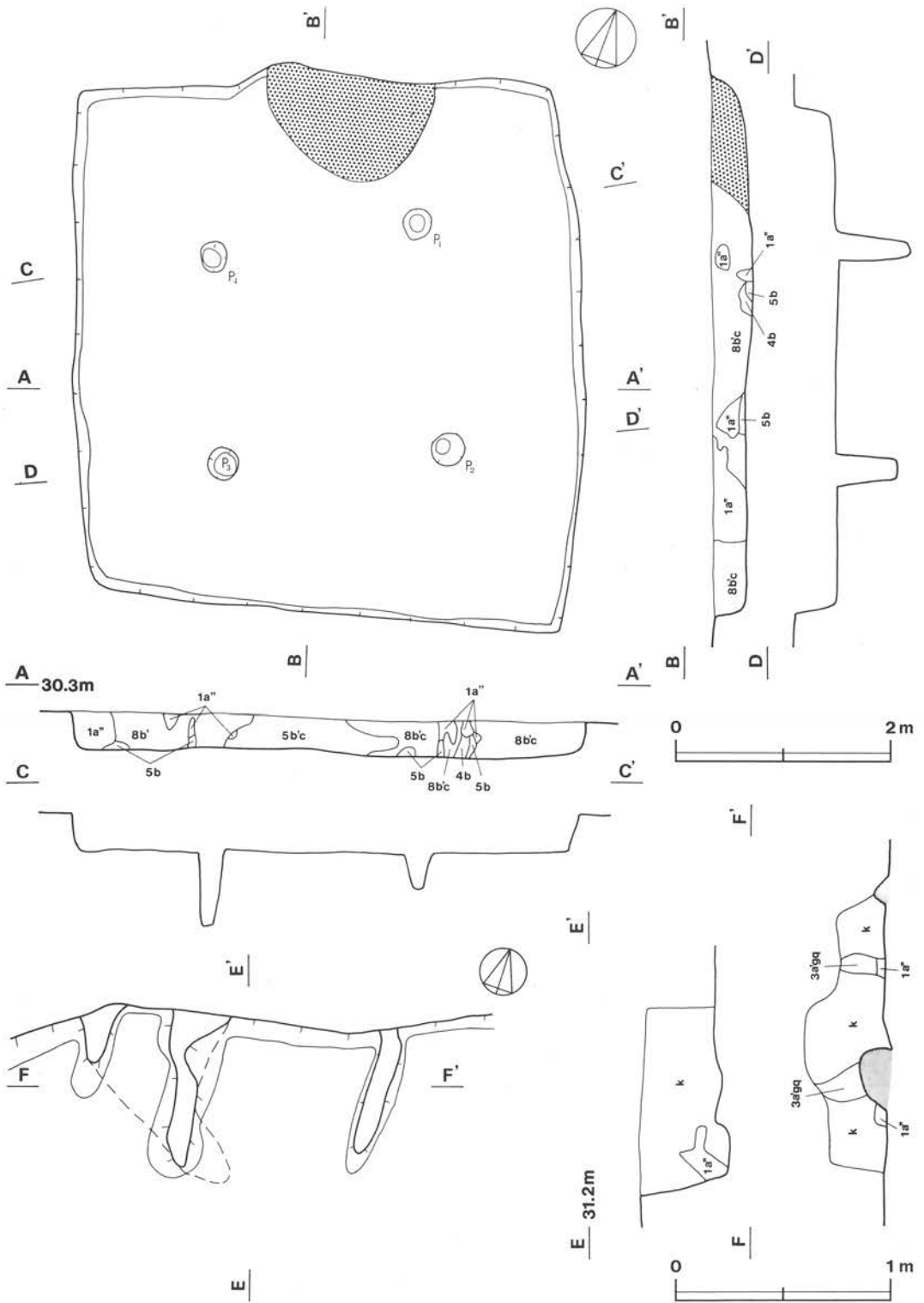
**ピット** 4か所(P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>)が検出されている。いずれも支柱穴である。長径28～32cm，短径24～32cm，深さ35～70cmを測る。柱穴を結んだ線が一辺2mの方形状に配置される。

**竈** 北壁中央部を壁外に10cm程掘り込み，砂質粘土で構築されている。トレンチャーによって大半が破壊され，袖部が断片的に残存しているにすぎない。規模は，長さ96cm，幅155cmを有するものと推定される。火床部，煙道部は不明である。

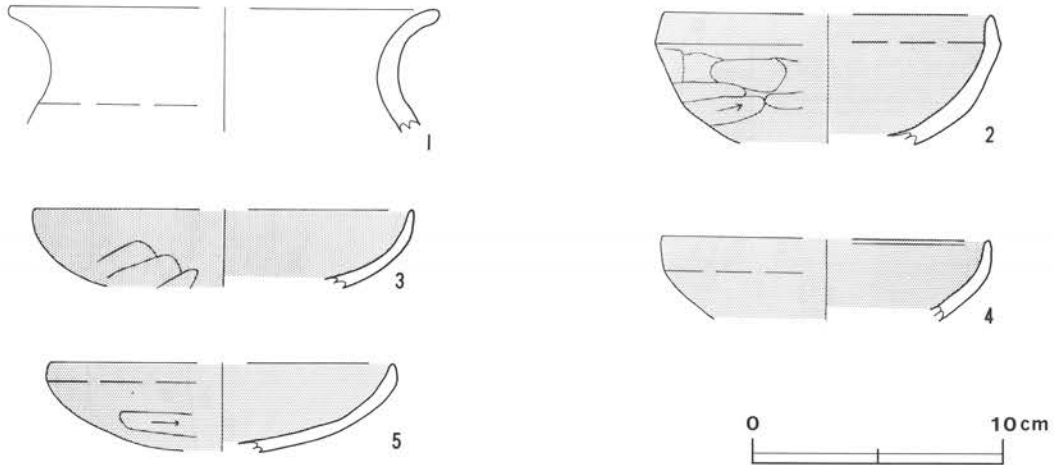
**覆土** ロームブロックを全体的に含んでおり人為堆積と思われる。

**遺物** 遺物は全体的に極少量の土師器片が出土している。3・4の坏は中央部床面からつぶれた状態で，5の坏は南西コーナー付近の床面から正位の状態出土している。

**所見** 壁下及び床面からは，少量の焼土，炭化物が検出されており，焼失家屋と考えられる。本跡は，出土遺物や住居跡の規模，形態等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。



第34图 第11号住居跡・竈実測図



第35図 第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第35図 1	甕 土師器	A [17.0] B [4.7]	口縁部片。頸部はくびれ、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒、バミス、長石にふい黄褐色 普通	P-78 10% 南西部覆土中層
2	坏 土師器	A [13.4] B [5.2]	底部欠損。体部は内彎し、口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へら削り後へら磨き。内・外面黒色処理。	砂粒、バミス、雲母 橙色 普通	P-81 15% 南西部覆土中層
3	坏 土師器	A [15.0] B [3.1]	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へら削り後へらナデ。内・外面黒色処理。	砂粒、バミス 黒褐色 普通	P-79 40% 中央部床面
4	坏 土師器	A [13.2] B [3.3]	底部欠損。体部は僅かに内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒、雲母 黒褐色 普通	P-82 10% 中央部床面
5	坏 土師器	A [13.9] B [3.6]	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へら削り後へらナデ。内・外面黒色処理。	砂粒、バミス、雲母 黒色 普通	P-80 35% 南西コーナー床面

第12号住居跡 (第36図)

位置 調査区の南部、D2d<sub>7</sub>区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.2m、短軸4.9mの隅丸方形を呈している。

主軸方向 N-10°-W。

壁 壁高は、20~44cmを測り、壁は、外傾及び垂直に近い状態で立ち上がっている。

床 全体がトレンチャーによる攪乱を受けているが、残存する床は、平坦で堅緻である。

ピット 4か所(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)が検出されている。いずれも支柱穴で、長径30~33cm、短径28~32cm、深さ43~60cmを測り、柱穴を結んだ線が一辺3mの方形状に配置されている。

**竈** 北壁中央部を壁外に20cm程掘り込み、砂質粘土で構築されている。規模は、長さ96cm、幅95cmを有するものと推定される。トレンチャーにより大半が破壊され、袖部が断片的に残存しているにすぎない。火床部、煙道部は不明である。

**覆土** 全体的に攪乱を受けているため、堆積状況は不明である。

**遺物** 少量の土師器片が出土している。主な遺物は、8の坏が竈内から出土し、5の坏は西壁際床面から出土している。

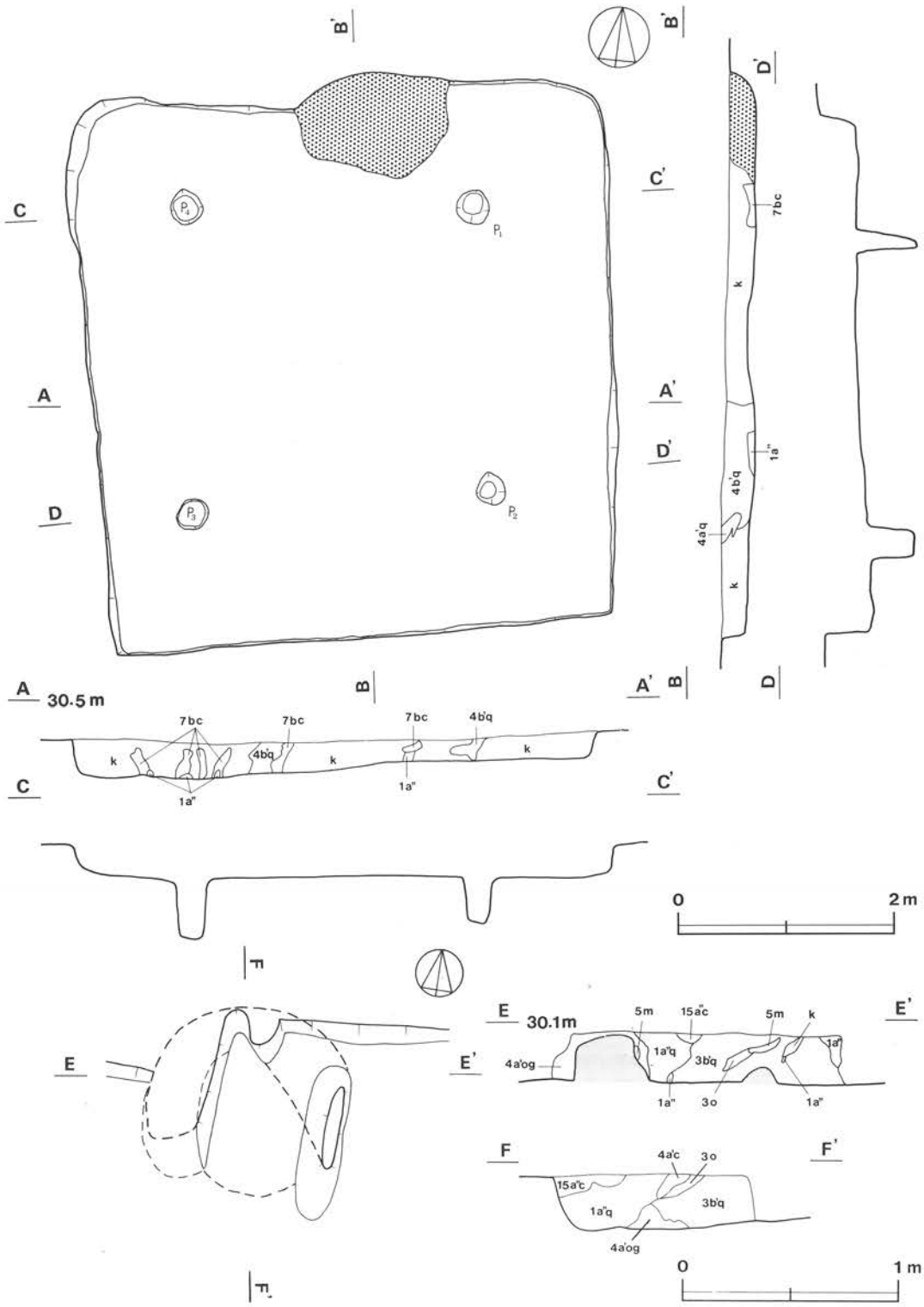
**所見** 本跡は、出土遺物や住居跡の規模、形態等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第12号住居跡出土遺物観察表

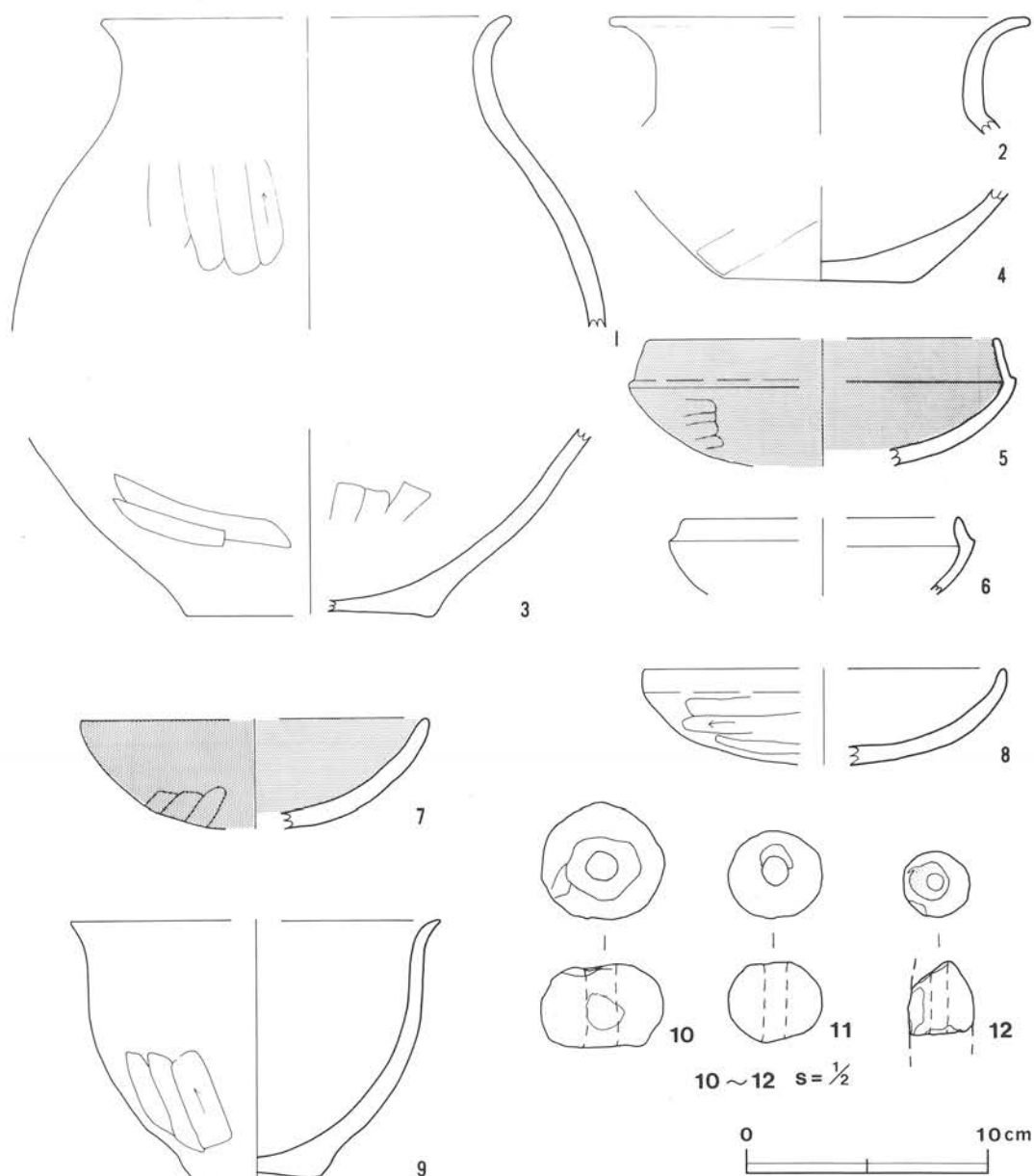
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第37図 1	甕 土師器	A[16.6] B[12.9]	胴下半部欠損。頸部はくびれ、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部は、内・外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒、長石、バミス 明赤褐色 普通	P-84 25% 南西コーナー覆土
2	甕 土師器	A[17.6] B[4.9]	口縁部片。口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒、バミス、雲母 にふい橙色 普通	P-86 5% 覆土中層
3	甕 土師器	B[7.3] C[10.4]	底部片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	胴部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒、バミス、長石 明褐色 普通	P-90 10% 中央部覆土中層
4	甕 土師器	B[3.9] C 8.0	底部片。平底。胴部は僅かに内彎して立ち上がる。	胴下端部ヘラ削り後ヘラ磨き。	砂粒、雲母、礫 黒色 普通	P-87 15% 中央部覆土中層
5	坏 土師器	A[14.5] B[5.3]	底部欠損。体部は内彎し、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内外面黒色処理。	砂粒、バミス、スコリア 黒褐色 普通	P-92 25% 西壁際床面
6	坏 土師器	A[11.4] B[3.2]	底部欠損。体部は内彎し、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。	砂粒、バミス 暗赤褐色 普通	P-95 10% 覆土中層
7	坏 土師器	A[14.4] B[4.5]	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部ヘラ削り後ヘラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒、スコリア 黒褐色 普通	P-93 40% 覆土中層
8	坏 土師器	A[15.0] B[4.0]	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒、バミス、雲母 灰褐色 普通	P-91 40% 竈内
9	埴 土師器	A[15.3] B 10.7 C[5.3]	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒、バミス、長石 にふい赤褐色 普通	P-85 35% 覆土中層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
10	球状土錘	2.3	3.4	3.2	8.5	25	100	覆土上層	DP-32
11	球状土錘	2.2	2.6	2.4	7	12.7	100	覆土上層	DP-33
12	管状土錘	[2.1]	1.9	1.9	4.5	[6.2]	35	覆土中層	DP-34





第36图 第12号住居跡・竈実測図



第37図 第12号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡 (第38図)

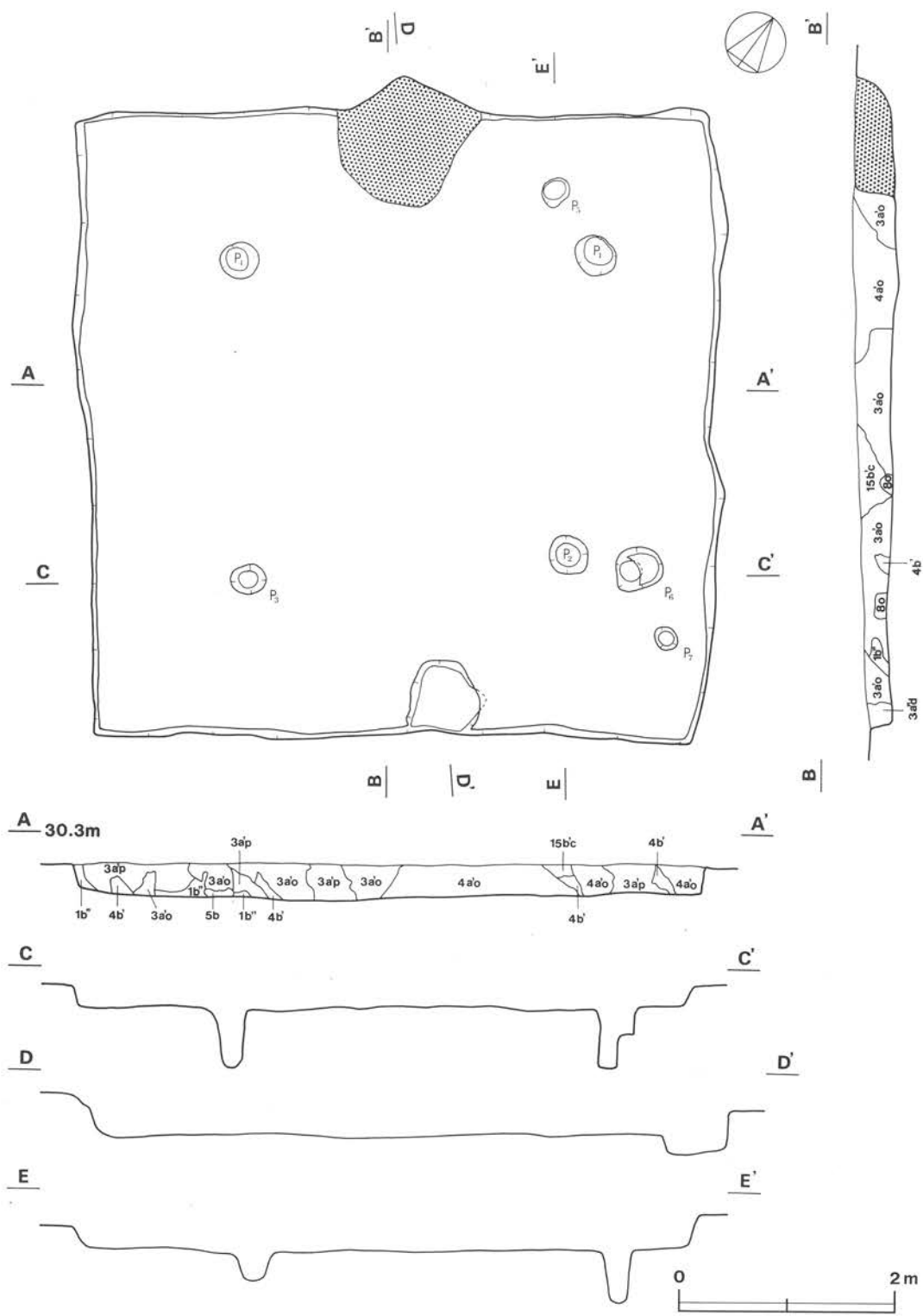
位置 調査区の南部, E2<sub>b</sub>区を中心に確認されている。

規模と平面形 一辺5.8mの方形を呈している。

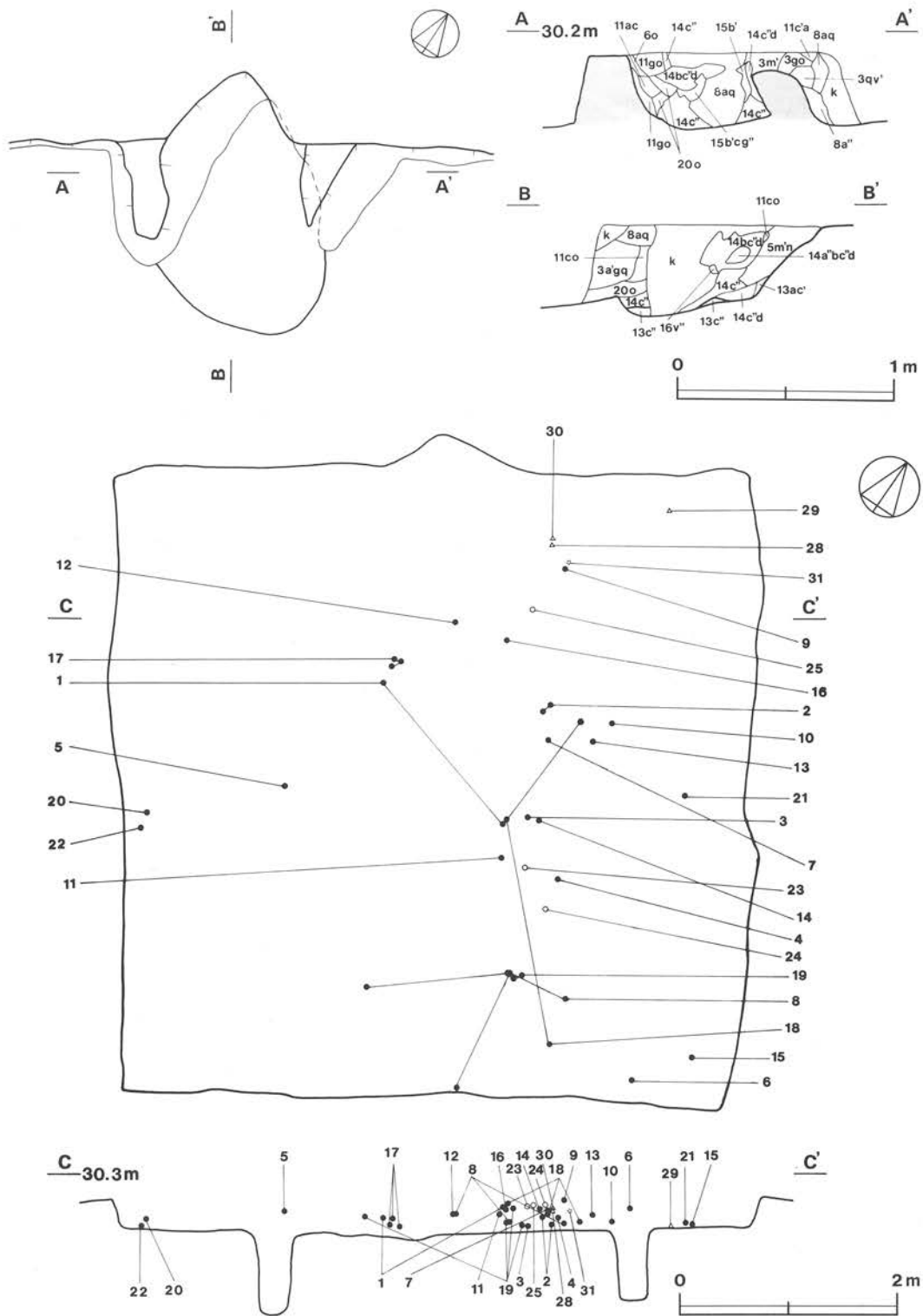
主軸方向 N-38°-W。

壁 壁高18~35cmを測り, 外傾して立ち上がっている。

床 全体的にトレンチャーによる攪乱を受けているが, 残存部は, 堅緻で平坦である。



第38图 第13号住居跡実測図



第39図 第13号住居跡竈実測図，遺物出土位置図

ピット 7か所(P<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>)が検出されている。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が支柱穴で、長径32~40cm、短径27~36cm、深さ25~74cmを測る。柱穴を結んだ線が一辺3mの方形状に配置されている。P<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>は、長径23~45cm、短径18~45cm、深さ50~53cmを測り、補助柱穴と思われる。

貯蔵穴 南東壁中央部付近に確認されている。規模は、長径66cm、短径64cm、深さ26cmを測り、底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈 北壁中央部を、壁外に32cm程掘り込み、砂質粘土で構築されている。規模は、長さ120cm、幅132cmを有するものと推定される。トレンチャーによって大半が破壊され、袖部が断片的に残存しているにすぎない。火床部、煙道部は不明である。

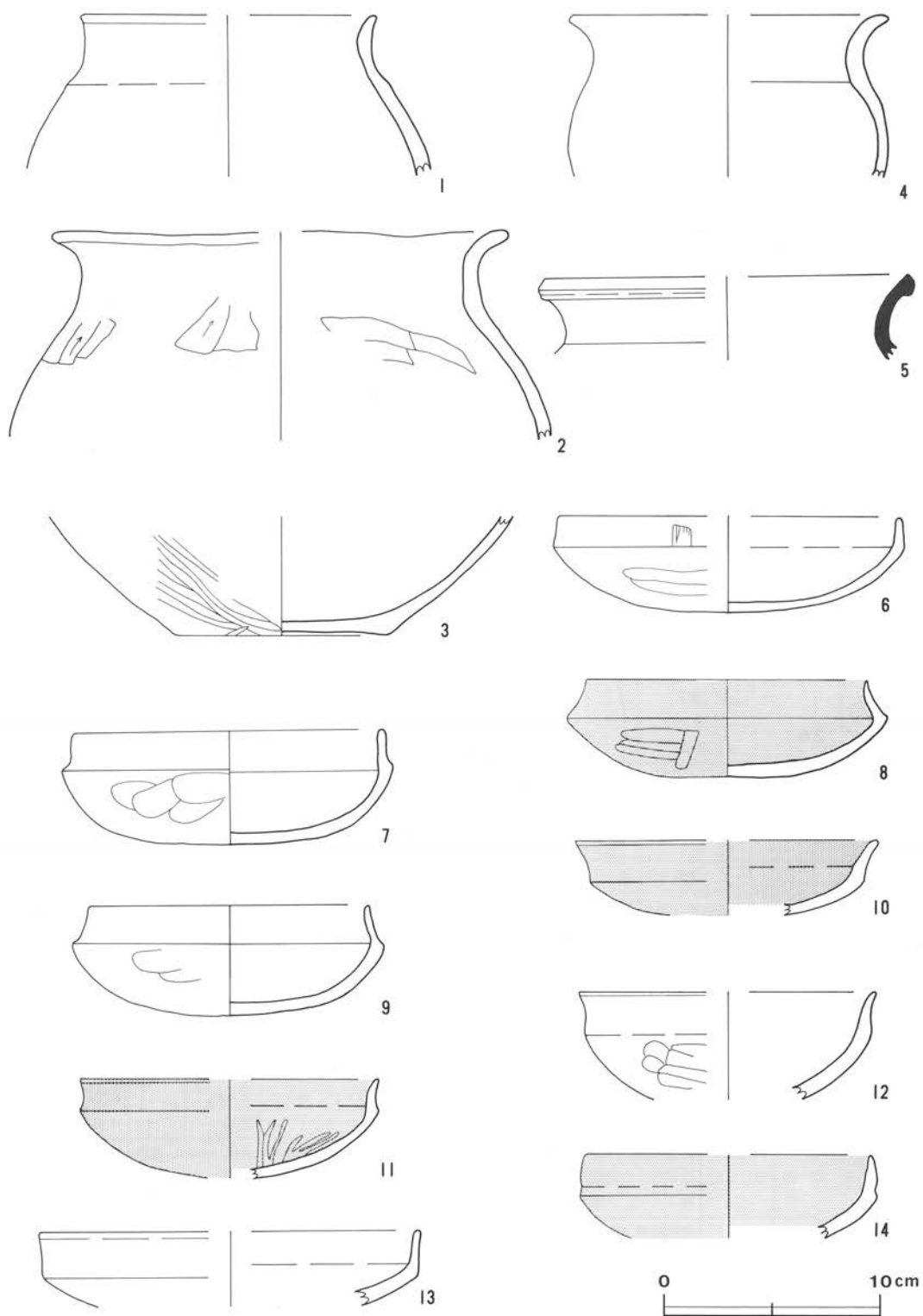
覆土 全体にロームブロックを多量に含んでおり、人為堆積と思われる。

遺物 全域にわたって、多量の土師器片や須恵器片が覆土の中・下層から出土している。3の甕は、中央部覆土下層から出土し、22のミニチュア土器は西壁直下床面から、5の須恵器の甕は、中央部付近の覆土中層から出土している。

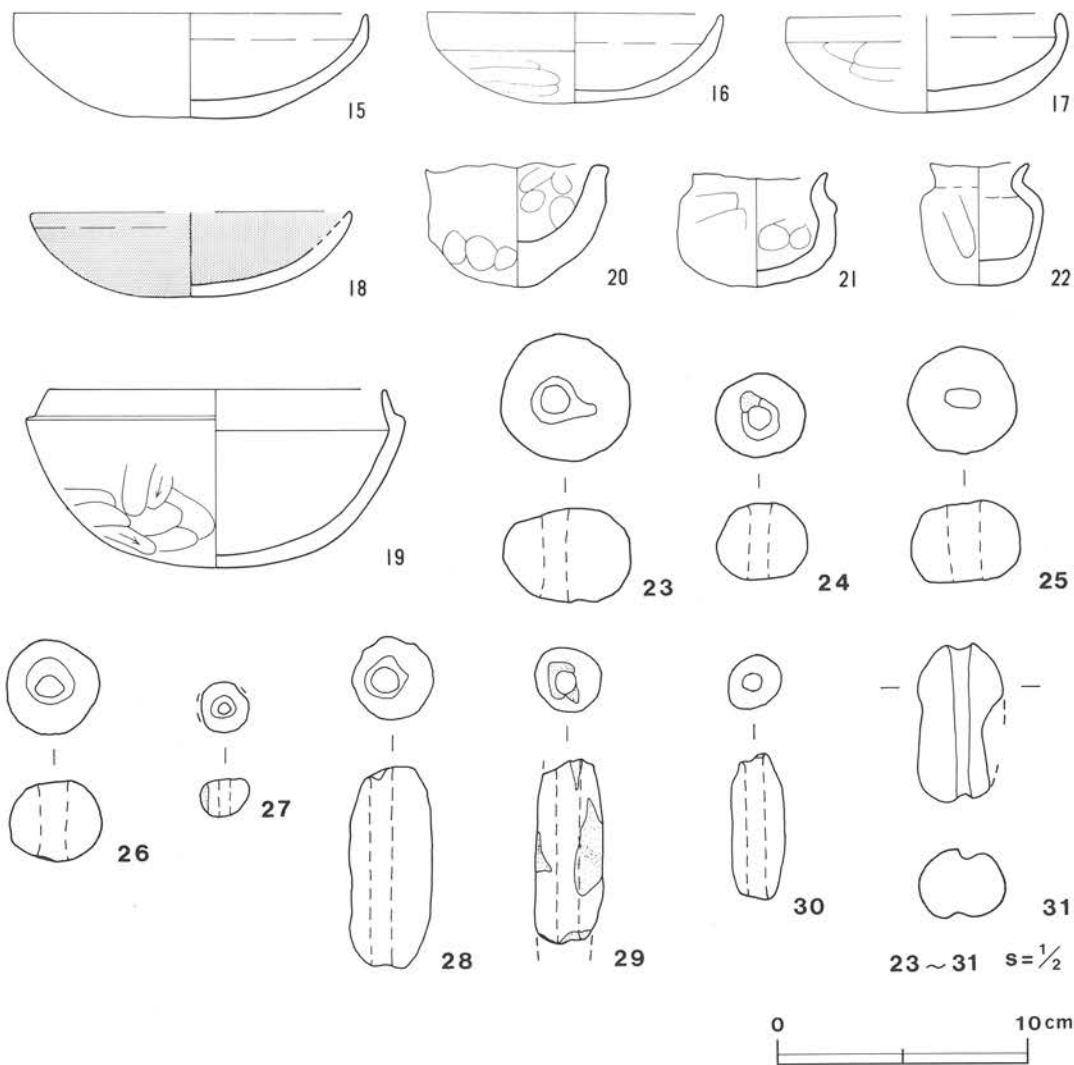
所見 本跡は、出土遺物や住居跡の規模、形態等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 1	壺 土師器	A[13.8] B[7.5]	胴中央部以下欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒、バミス、長石 橙色 普通	P-97 10% 中央部覆土中層
2	甕 土師器	A[21.2] B[9.5]	胴中央部以下欠損。胴部は内彎し、頸部はくびれ、口縁部は大きく外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒、バミス 明赤褐色 普通	P-96 10% 中央部覆土下層
3	甕 土師器	B[5.5] C[10.0]	底部片。平底。胴部は内彎して立ち上がる。	胴部下端ヘラ削り後ヘラ磨き。	砂粒、バミス、スコリア 黒色 普通	P-99 15% 中央部覆土
4	小形甕 土師器	A[14.7] B[7.5]	胴下半部以下欠損。胴部は内彎し、頸部はくびれ、口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒、バミス、スコリア 橙色 普通	P-98 5% 中央部覆土下層
5	甕 須恵器	A[17.0] B[3.9]	口縁部片。有段口縁。口縁部は外反する。	巻き上げ、ナデ。	砂粒、バミス、長石 黄灰色 普通	P-118 5% 中央部覆土中層
6	坏 土師器	A[15.8] B 4.5	丸底。体部は内彎し、口縁部との境にふい稜をもち、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。口縁部外面にヘラ痕。	砂粒、バミス 橙色 普通	P-100 75% 南壁際覆土中層
7	坏 土師器	A 14.4 B 5.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に丸みのある稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒、バミス 橙色 普通	P-101 75% 中央部覆土中層
8	坏 土師器	A 13.0 B 4.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒、バミス、スコリア ふい橙色 普通	P-102 90% 南壁際覆土中層
9	坏 土師器	A 13.0 B 5.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒、バミス、スコリア 橙色 良	P-103 75% 電東側覆土中層



第40图 第13号住居跡出土遺物実測図(1)



第41図 第13号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 10	坏 土師器	A[14.0] B[3.5]	底部欠損。体部は内彎し、口縁部との境にふい稜をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒、長石、雲母 黒褐色 普通	P-105 60% 中央部覆土下層
11	坏 土師器	A[13.7] B[4.6]	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境にふい稜をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。体部内面ヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒、バミス、長石 黒褐色 普通	P-108 40% 中央部覆土中層
12	坏 土師器	A[13.8] B[5.0]	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒、雲母、バミス 橙色 普通	P-109 30% 中央部覆土中層
13	坏 土師器	A[17.6] B[3.0]	底部欠損。体部は内彎し、口縁部との境にふい稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒、長石、雲母 橙色 良	P-111 10% 中央部覆土中層

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 14	坏 土師器	A [13.4] B [ 3.9]	底部欠損。体部は内彎し、口縁部との境に丸みのある稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒、雲母、バミス 黒色 普通	P-112 10% 中央部覆土中層
第41図 15	坏 土師器	A 13.9 B 4.2 C 5.3	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒、バミス、長石 にぶい橙色 普通	P-104 80% 南東コーナー床面
16	坏 土師器	A 11.9 B 3.1 C 4.5	平底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒、バミス、長石 明赤褐色 普通	P-106 90% 中央部覆土中層
17	坏 土師器	A [11.0] B 3.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒、バミス、長石 明赤褐色 普通	P-107 60% 中央部覆土中層
18	坏 土師器	A [12.8] B 3.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。体部内・外面黒色処理。	砂粒、バミス 黒色 普通	P-113 50% 中央部覆土中層
19	鉢 土師器	A 13.3 B 7.1	丸底。体部は内彎し、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は内傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒、バミス、雲母 にぶい橙色 普通	P-114 65% 中央南側覆土中層
20	ミニチュア 土師器	A 7.3 B 4.9	丸底。胴部は僅かに内彎し、口縁部はほぼ直立して立ち上がる。	口縁部内・外面指頭圧痕。	砂粒、長石 明赤褐色 普通	P-115 100% 西壁際中央床面
21	ミニチュア 土師器	A 5.4 B 4.6	丸底。体部は内彎し、口縁部はほぼ外反して立ち上がる。	口縁部内面指頭圧痕。胴部外面あらいヘラ削り。	砂粒、長石、バミス 橙色 普通	P-116 100% 東壁際中央床面
22	ミニチュア 土師器	A 4.0 B 5.0 C 2.6	平底。胴部は、僅かに内彎している。頸部はくびれ、口縁部は外反して立ち上がる。	胴部外面指頭圧痕。	砂粒、長石、バミス 橙色 普通	P-117 100% 西壁際直下床面

図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
23	球状土錘	2.5	3.4	3.4	7	27.4	100	覆土上層	DP-35
24	球状土錘	2.1	2.4	2.2	6	[10.0]	95	覆土上層	DP-36
25	球状土錘	2.2	2.9	2.9	9.0	17.7	100	竈前方	DP-37
26	球状土錘	2.1	2.5	2.5	8.0	12.9	100	覆土中	DP-38
27	球状土錘	1.0	[1.3]	1.3	3.0	[ 1.5]	90	覆土中	DP-41
28	管状土錘	5.3	2.2	2.2	7.0	[25.1]	95	竈内	DP-43
29	管状土錘	[4.8]	1.8	1.7	6.0	[13.6]	95	中央床面	DP-44
30	管状土錘	3.9	0.9	1.5	5.0	[ 7.0]	95	竈内	DP-45
31	土錘	4.3	[1.8]	1.8	—	[14.1]	80	竈東側	DP-46



第14号住居跡 (第42図)

位置 調査区の南部，D2i<sub>2</sub>区を中心に確認されている。

重複関係 第19号住居跡と重複している。第19号住居跡は，本跡の上に貼り床をして構築されている。

規模と平面形 長軸5.7m，短軸5.2mの方形を呈している。

主軸方向 N-27°-W。

壁 壁高18~35cmを測り，垂直及び外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部や竈の前面は踏み固められて堅緻である。

ピット 4か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>) が検出されている。いずれも支柱穴で，長径36~54cm，短径34~48cm，深さ60~77cmを測る。柱穴を結んだ線が一辺3m前後の方形に配置されている。

貯蔵穴 南コーナーに設置されている。平面形は楕円形を呈し，規模は長径84cm，短径106cm，深さ40cmを測る。底面は皿状で，壁は，垂直及び外傾して立ち上がっている。

竈 北西壁中央部を壁外に56cm程掘り込み，砂質粘土で構築されている。規模は，長さ135cm，幅110cmを測る。火床は，壁際にあり，床面とほぼ同レベルで，レンガ状に赤変硬化している。煙道は緩やかに立ち上がっている。

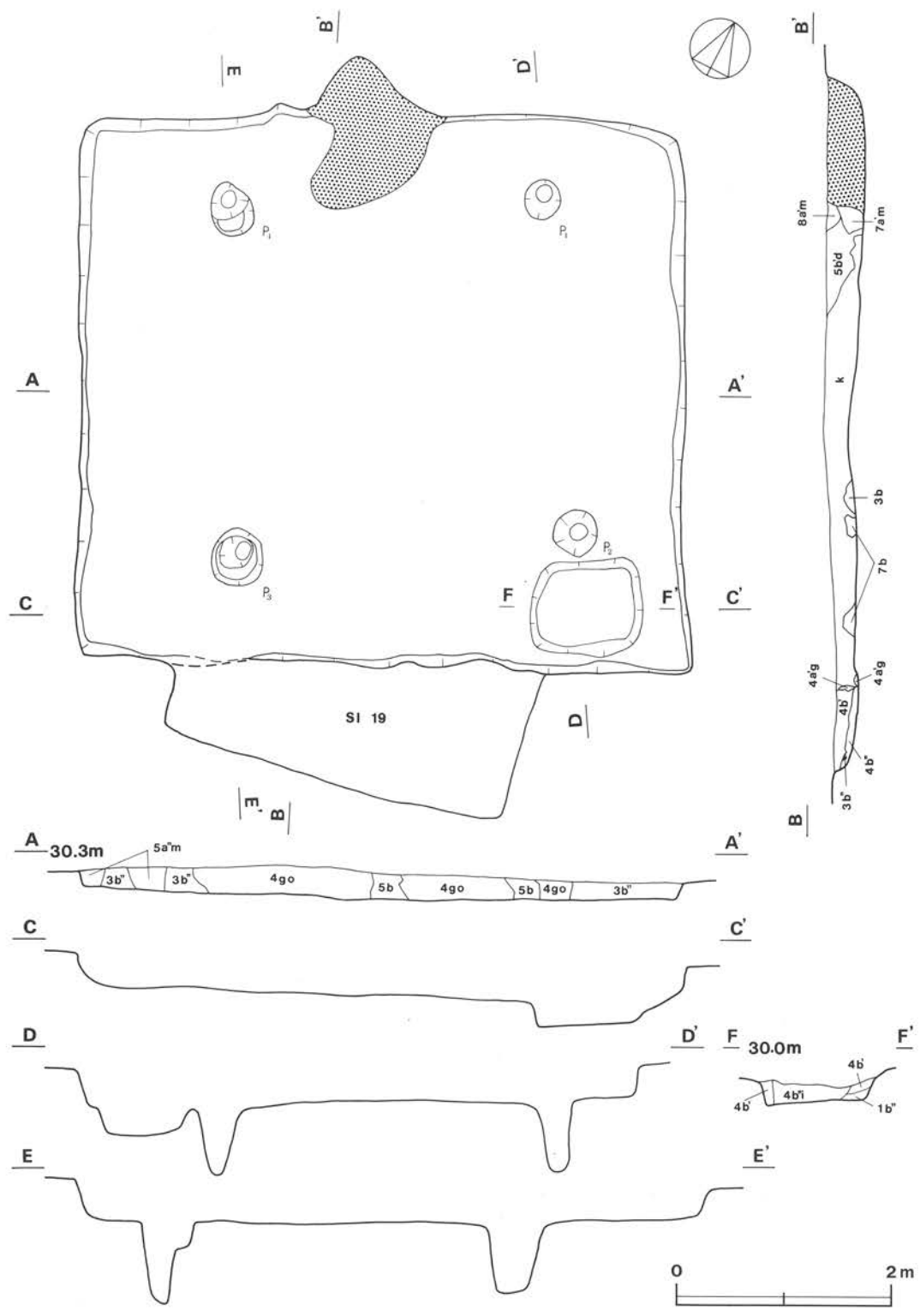
覆土 自然堆積後攪乱を受けている。

遺物 南西壁付近を除く全域から多量の土師器片が主に出土している。7の坏，14の高坏及び12の鉢は，竈内から出土し，14の高坏は，逆位で出土し，出土状態から支脚として使用されたものと思われる。2・4・6・8の坏は東コーナーの貯蔵穴内から出土している。

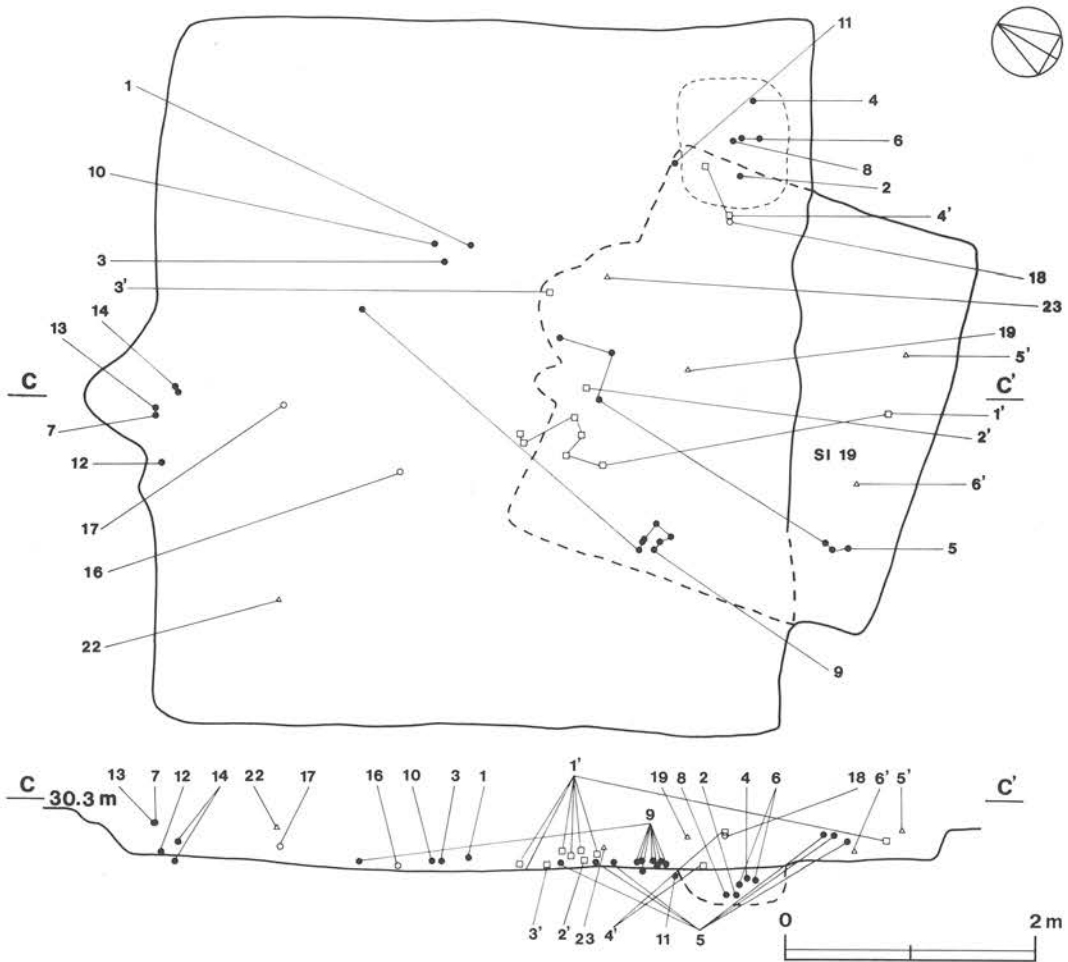
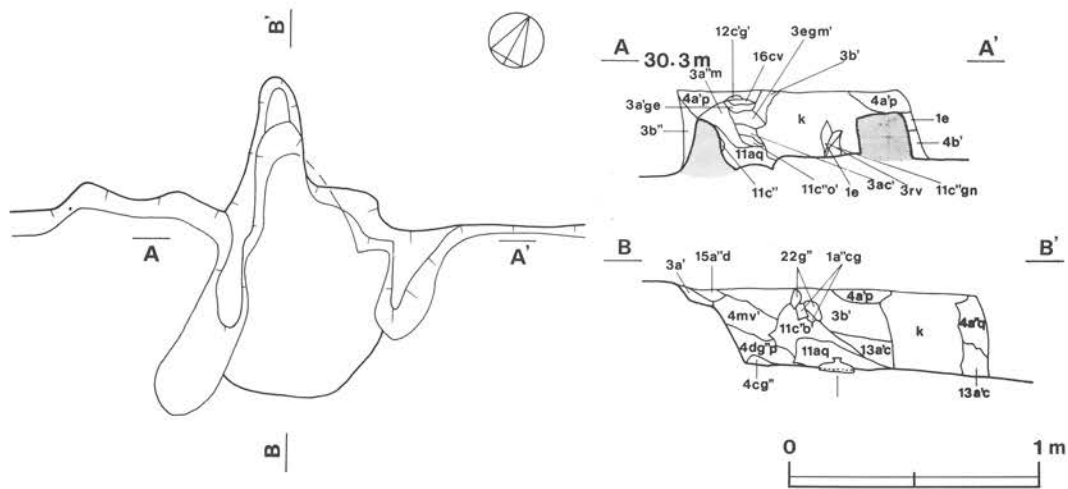
所見 本跡は，出土遺物や住居跡の規模，形態等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 1	甕 土師器	A[17.0] B[9.5]	胴中央部以下欠損。胴部は内彎し，頸部はくびれ，口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒，バミス 明赤褐色 普通	P-120 10% 中央部覆土下層
2	甕 土師器	A[17.2] B[4.7]	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒，バミス，スコリア 橙色 普通	P-122 5% 貯蔵穴内
3	甕 土師器	A[17.4] B[6.3]	口縁部片。頸部はほぼ直立し，口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒，長石，雲母 明赤褐色 普通	P-123 10% 中央部床面
4	甕 土師器	A 25.9 B 25.0 C 7.2	無底式。胴部は内彎して立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒，バミス，長石 橙色 普通	P-133 80% 貯蔵穴内
5	甕 土師器	B[14.5] C[13.2]	無底式。胴部は外上方に立ち上がる。	胴外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒，バミス，長石 橙色 普通	P-167 25% 中央部床面



第42图 第14号住居跡実測図

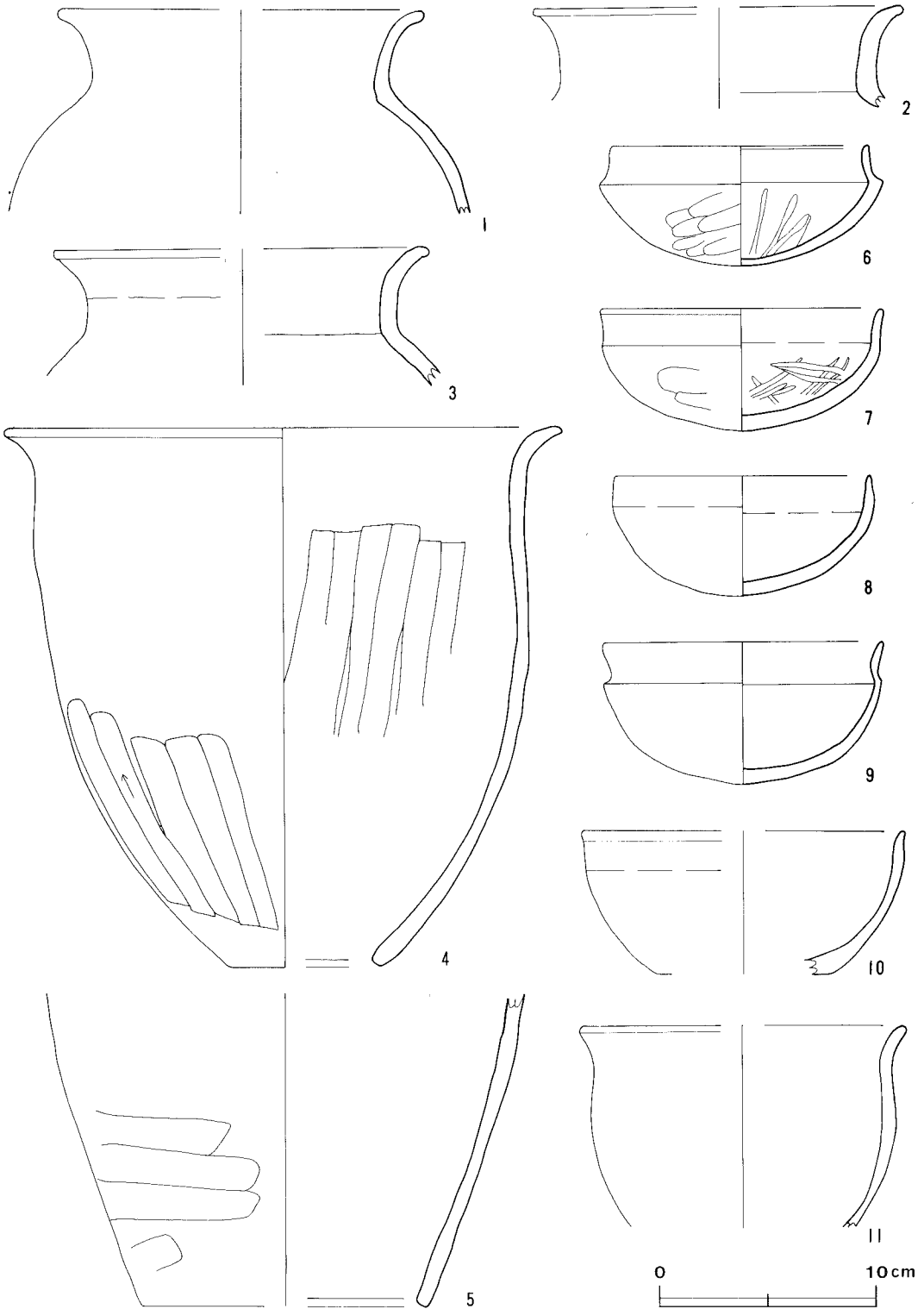


第43图 第14号住居跡竈実測図，第14・19号住居跡遺物出土位置図

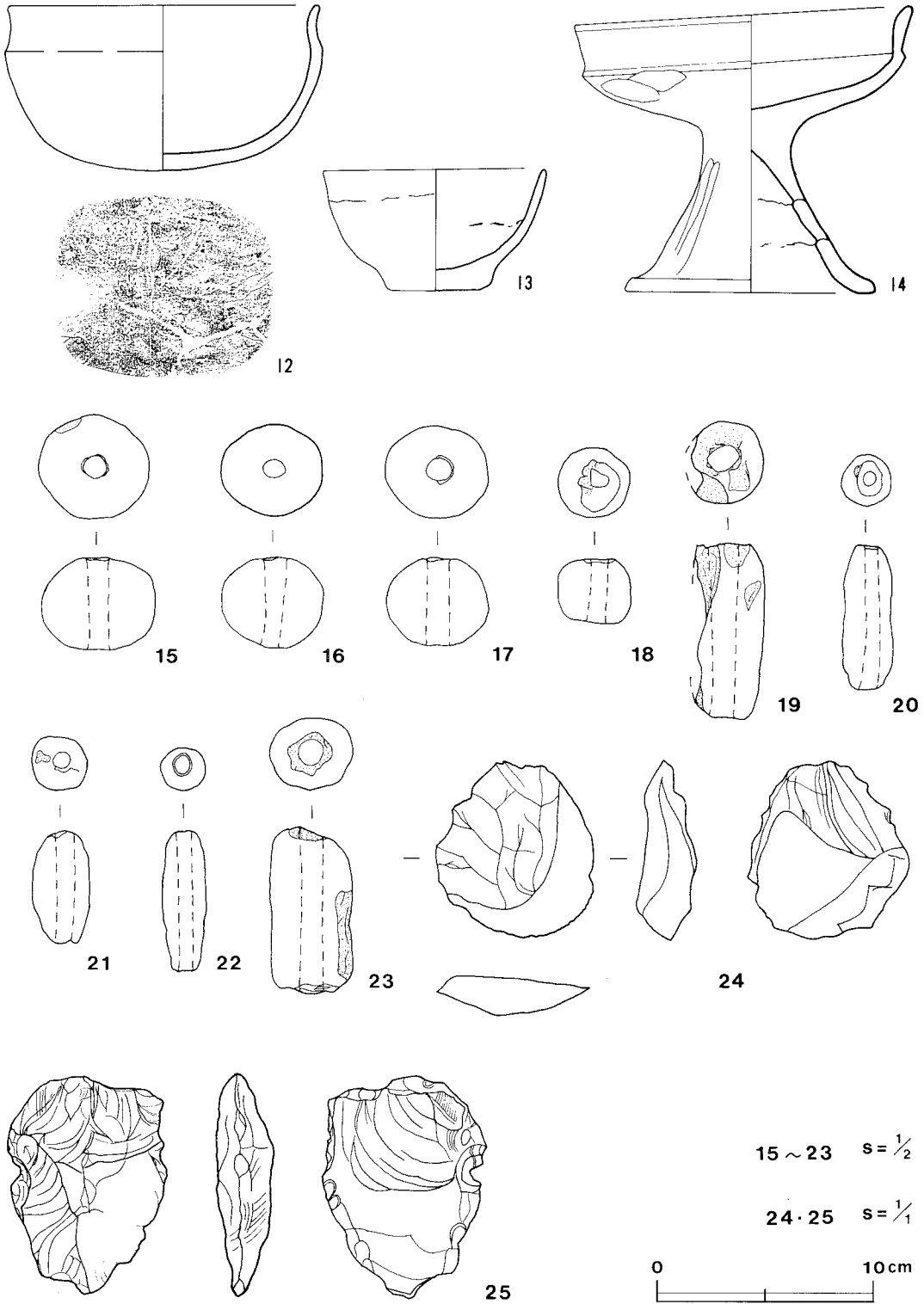
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 6	坏 土師器	A 11.8 B 5.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面放射状のへら磨き。	砂粒, パミス, 雲母 明赤褐色 普通	P-125 98% 貯蔵穴内
7	坏 土師器	A 13.1 B 5.6	丸底。体部は内彎し、口縁部との境にぶい稜をもつ。口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面異方向のへら磨き。	砂粒, パミス, 雲母 橙色 普通	P-124 100% 竈内
8	坏 土師器	A 11.8 B 5.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部へラ削り後へラナデ。	砂粒, パミス, 長石 明赤褐色 普通	P-126 100% 貯蔵穴内
9	坏 土師器	A 13.0 B 6.6	丸底。体部は内彎し、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。	砂粒, パミス, 長石 明赤褐色 普通	P-129 80% 中央部床面
10	坏 土師器	A [13.0] B 6.6 C [ 8.2]	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。	砂粒, パミス 橙褐色 普通	P-130 30% 中央部床面
11	鉢 土師器	A [15.2] B [ 9.4]	底部欠損。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。	砂粒, パミス 明赤褐色 普通	P-131 20% 東コーナー床面
第45図 12	鉢 土師器	A 14.3 B 7.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境にぶい稜をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。底部外面に木炭痕。	砂粒, パミス, 長石 赤色 普通	P-128 70% 竈内
13	鉢 土師器	A 10.4 B 5.7 C 4.9	平底。体部は内彎し、口縁部は外上方に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。体部外面に輪積痕が残る。	砂粒, パミス ぶい橙褐色 普通	P-132 80% 竈内
14	高坏 土師器	A 15.7 B 13.3 D 11.6 E 6.6	裾部はラッパ状に開き、体部は内彎して立ち上がり口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラケズリ。脚部外面へら磨き。脚部内面に輪積痕。	砂粒, 雲母, 長石 暗赤褐色 普通	P-127 100% 竈内

図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
15	球状土錘	2.8	3.4	3.2	7.5	[30.9]	95	覆土中	DP-47
16	球状土錘	2.8	3.1	2.9	7.5	22.9	100	中央床面	DP-48
17	球状土錘	2.7	3.2	2.8	7.5	24.3	100	竈前方	DP-49
18	球状土錘	2.1	2.3	2.2	6.0	[10.8]	95	覆土中	DP-50
19	管状土錘	5.5	[2.2]	2.5	9.5	[28.2]	50	中央部	DP-51
20	管状土錘	4.5	1.5	1.6	5.0	[10.4]	90	覆土中	DP-52
21	管状土錘	3.5	1.8	1.7	5.5	[10.0]	95	覆土中	DP-53
22	管状土錘	4.3	1.4	1.3	6.0	5.7	100	覆土中	DP-54
23	管状土錘	5.1	2.6	2.2	8.0	[31.3]	90	竈内	DP-55

図版番号	器種	石質	法量(cm)			重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
24	剥片	頁岩	2.7	2.4	0.9	4.3	90	覆土中	Q-5
25	剥片	黒曜石	3.3	2.4	0.9	5.2	95	覆土中	Q-6



第44图 第14号住居跡出土遺物実測図(1)



第45图 第14号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

## 第15号住居跡（第46図）

**位置** 調査区の南部，D2f<sub>2</sub>区を中心に確認されている。

**重複関係** 第16号住居跡と重複している。本跡が第16号住居跡を掘り込んでおり，本跡のほうが新しい。

**規模と平面形** 西側が調査区外に延びているため不明であるが，本来は，長軸 [4.0]m，短軸 [5.0]m程の長方形を呈する住居跡と推定される。

**主軸方向** N-8°-W。

**壁** 壁高30~50cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

**壁溝** 西壁下及び東壁下の北側半分程が攪乱され不明であるが，他は周回している。上幅16~42cm，深さ6~14cmを測る。

**床** 壁際を除きほぼ平坦で，特に中央部が踏み固められて堅緻である。

**ピット** 4か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>) が検出されている。いずれも支柱穴で，長径52~78cm，短径35~62cm，深さ32~57cmを測る。柱穴を結んだ線が一辺3mの方形に配置されている。

**竈** 北壁中央部を壁外に12cm程掘り込み，砂質粘土で構築されているが，天井部は，崩落している。規模は，長さ92cm，幅116cmを測る。トレンチャーの攪乱を受けているが，遺構の掘り込みが深いため遺存状態は良い。火床は床面を僅かに掘り窪めた程度で，赤変硬化している。煙道部は，緩やかに外傾して立ち上がっている。

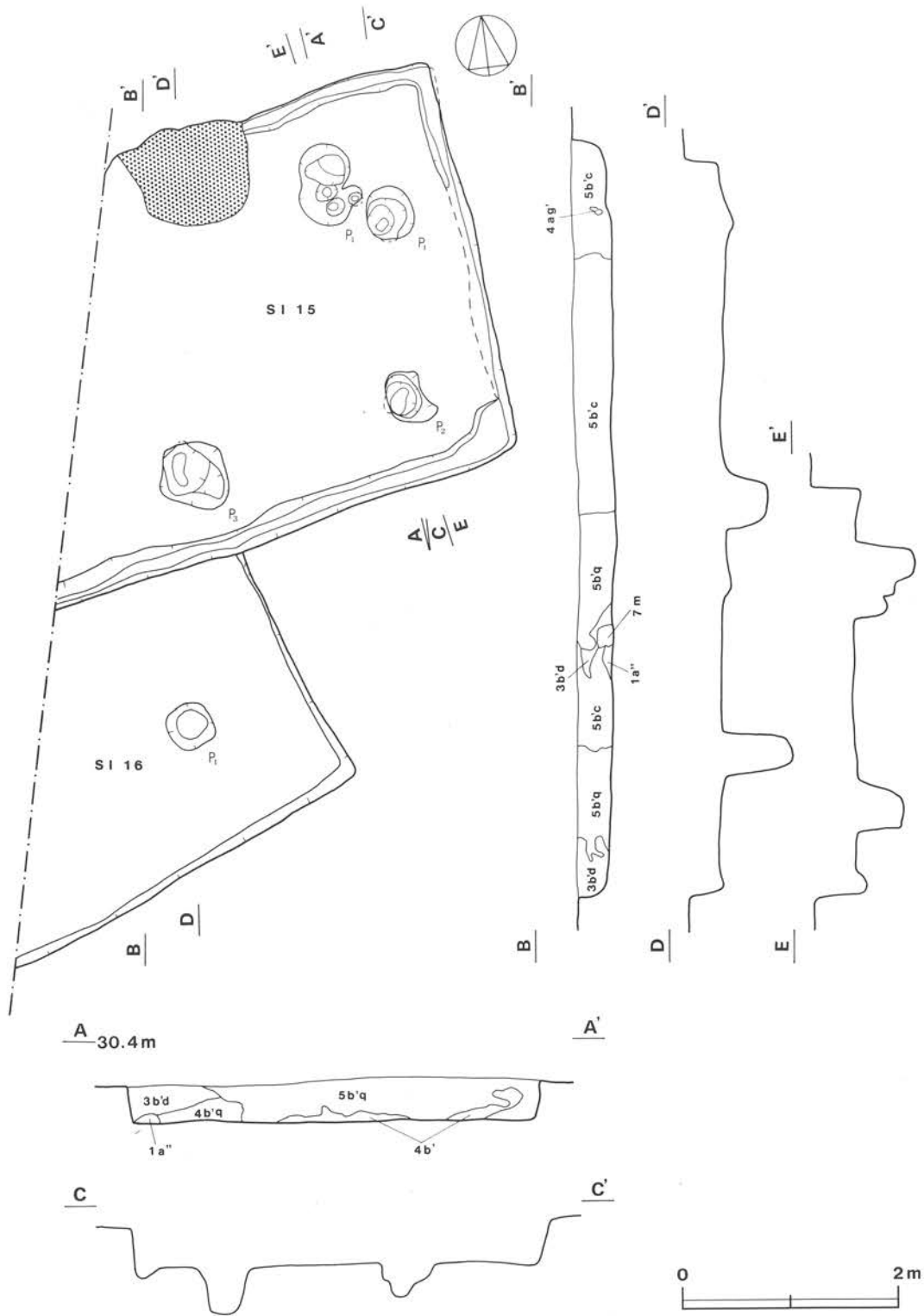
**覆土** 自然堆積。

**遺物** 竈周辺の覆土下層から，少量の土師器片が出土している。3の坏が竈内から出土している。

**所見** 本跡は，出土遺物や住居跡の規模，形態等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第15号住居跡出土遺物観察表

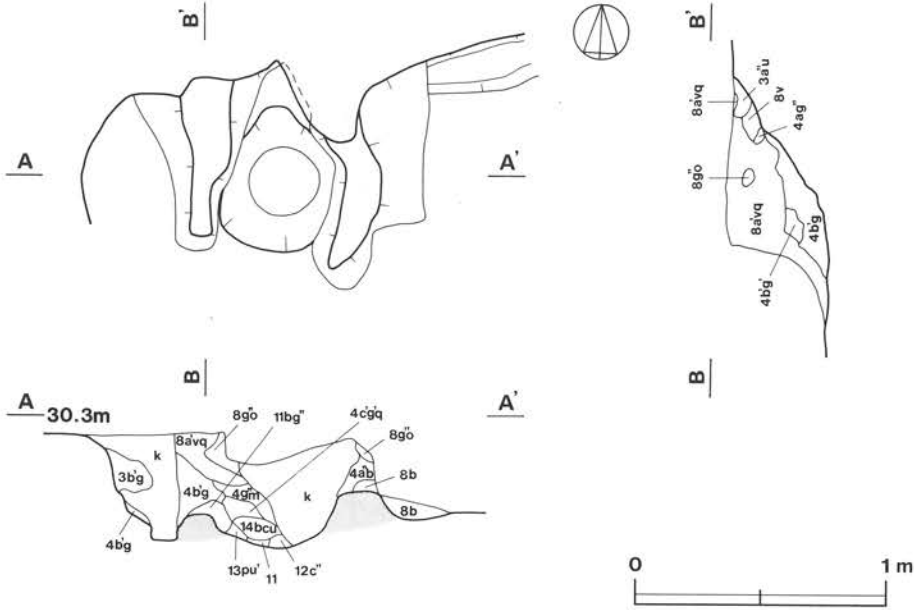
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第48図 1	甕 土師器	A [21.9] B [ 3.4]	口縁部片。口縁部は大きく外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒，バミス，長石 明赤褐色 普通	P-134 5% 中央部覆土中層
2	坏 土師器	A [14.5] B [ 4.3]	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面黒色処理。	砂粒，長石，バミス 橙色 普通	P-137 20% 覆土中
3	坏 土師器	A [13.2] B [ 4.3]	底部欠損。体部は僅かに内彎しながら，そのまま口縁部に至る。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒，長石，バミス 明赤褐色 普通	P-138 15% 竈内
4	鉢 土師器	A [13.2] B [ 4.4]	体部中央以下欠損。体部は内彎し，口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒，長石，バミス にぶい橙色 普通	P-135 5% 覆土中



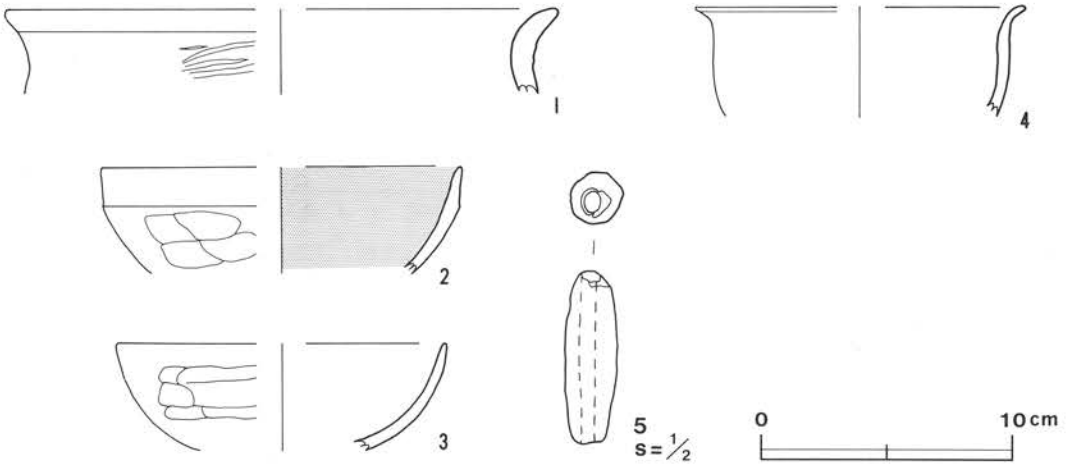
第46图 第15·16号住居迹实测图



図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第48図 5	管状土錘	4.6	1.4	1.4	4.0	[6.5]	90	覆土中	DP-56



第47図 第15号住居跡竈実測図



第48図 第15号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡 (第46図)

位置 調査区の南部, D2f<sub>2</sub>区を中心に確認されている。

重複関係 第15号住居跡と重複している。第15号住居跡が本跡を掘り込んでいるので, 本跡のほ

うが古い。

**規模と平面形** 東・南壁の一部が検出され、他は、調査区外になっているため、本来は、一辺が [5.0]m程の方形を呈する住居跡と推定される。

**壁** 壁高 4～32cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

**床** 平坦で堅緻である。

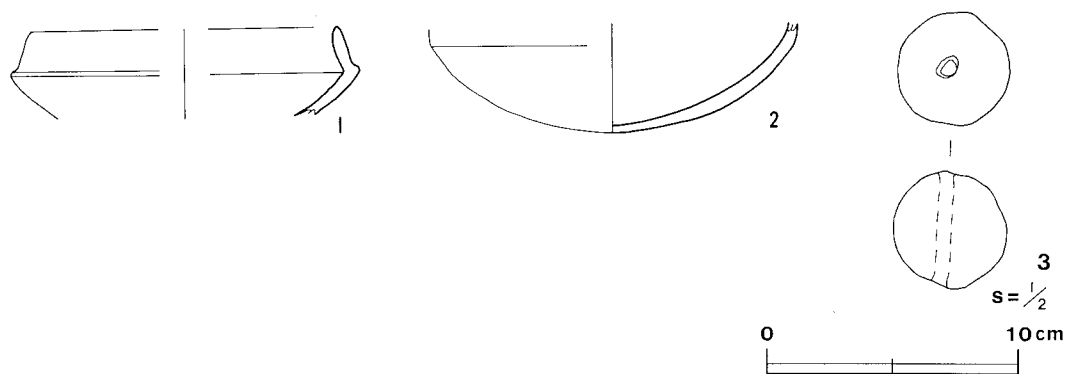
**ピット** 1か所 (P<sub>1</sub>) が検出され、支柱穴であると考えられる。長径46cm, 短径46cm, 深さ64cmを測る。その他のピットについては調査区外に存在するものと推定される。

**竈** 調査区外に存在するものと推定される。

**覆土** 全体的にロームブロックを含んでおり、人為堆積と思われる。

**遺物** 遺物は土師器片で少ない。2の坏は、南西壁床面から出土している。

**所見** 本跡は、出土遺物や住居跡の規模、形態等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。



第49図 第16号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第49図 1	坏 土師器	A [12.4] B [3.6]	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面剥離が著しく、調整不明。	砂粒, パミス, 雲母 明赤褐色 普通	P-140 20% 中央部覆土下層
2	坏 土師器	B [4.3]	口縁部欠損。丸底。体部は、内彎気味に立ち上がる。	体部外面はヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒, パミス, スコリア 赤褐色 普通	P-141 20% 南西壁床面

図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
3	球状土錘	3.1	3.1	3.0	4.0	12.2	100	覆土中	DP-57

第17号住居跡（第50図）

位置 調査区の南部，E1a<sub>0</sub>区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.1m，短軸4.8mのやや隅丸長方形を呈している。

主軸方向 N-3°-W。

壁 壁高50～65cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅20～32cm，深さ4～10cmを測り，壁下を全周している。

床 平坦で，中央部及び竈前面が特によく踏み固められている。

ピット 4か所(P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>)が検出されている。いずれも支柱穴で，長径60～100cm，短径56～80cm，深さ60～75cmを測る。柱穴を結んだ線が一辺2.6mの方形状に配置されている。

竈 北西壁中央部やや東寄りを，壁外に34cm程掘り込み，砂質粘土で構築されている。規模は，長さ112cm，幅100cmを測る。火床は，床面を10cmほど掘り窪められて，レンガ状に赤変硬化している。天井部はすでに崩落している。

覆土 自然堆積。

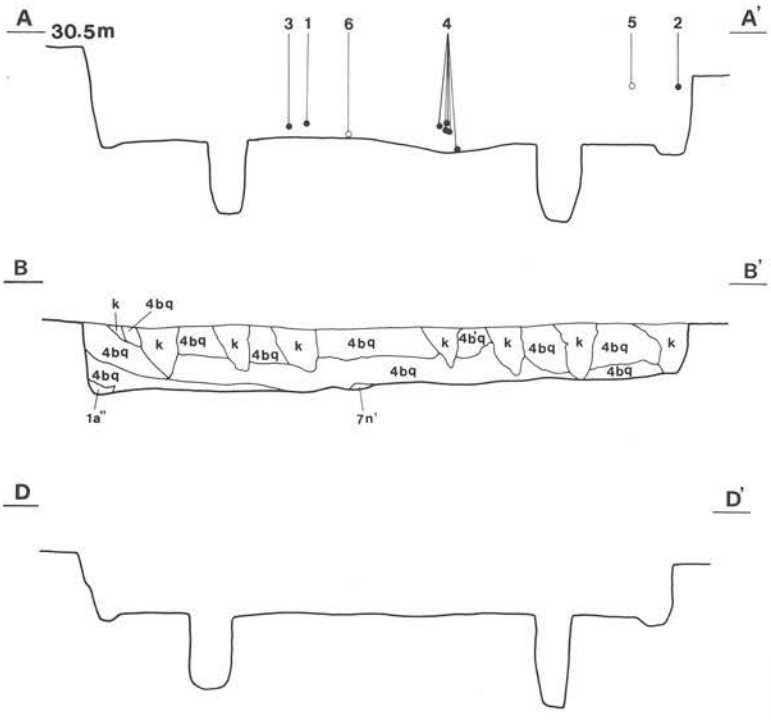
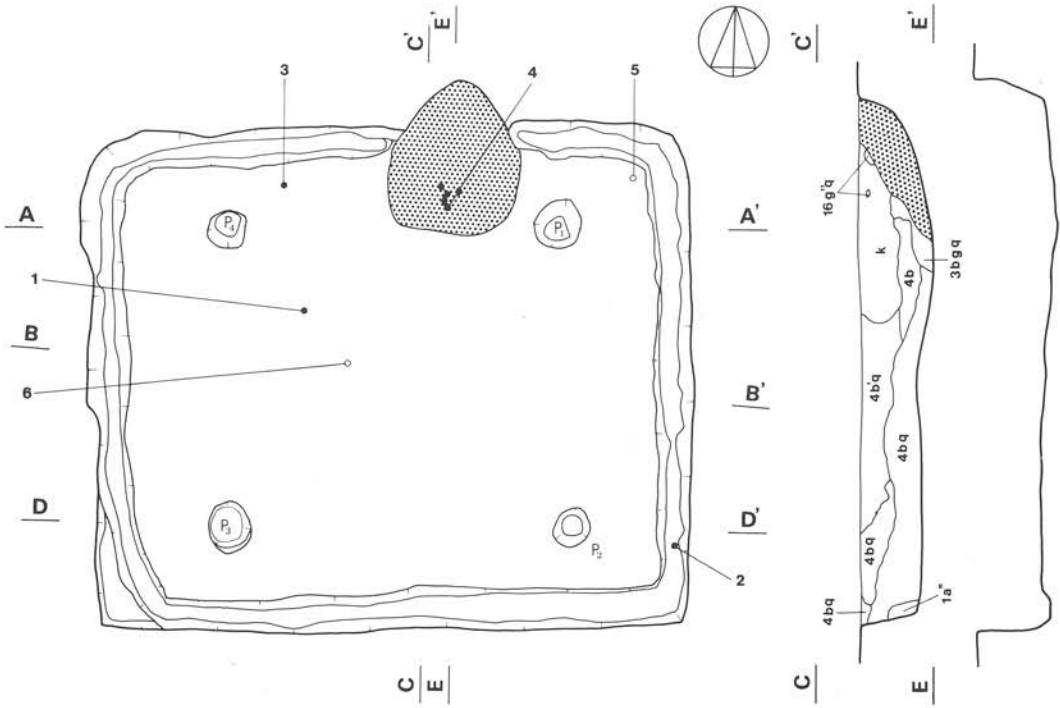
遺物 全域から少量の土師器片が覆土全層から出土している。4の鉢は，竈内からつぶれた状態で出土し，3の高台付坏が竈西側覆土下層から出土している。

所見 本跡は，出土遺物や住居跡の規模，形態等から奈良時代の住居跡と考えられる。

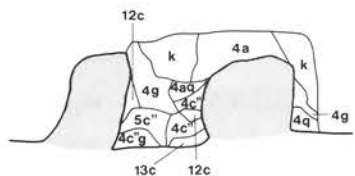
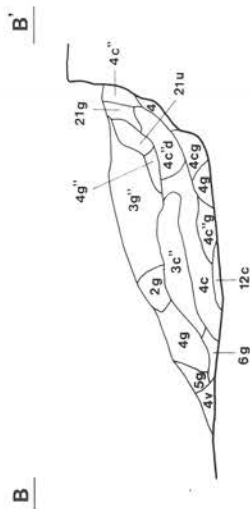
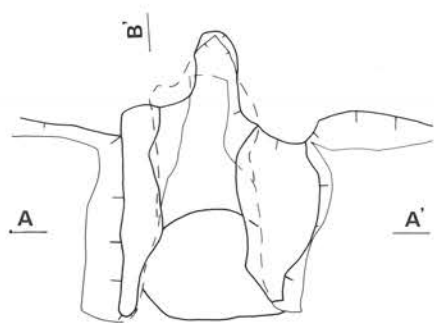
第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第52図 1	土師器	A[17.2] B[6.8]	口縁部片。頸部はくびれ，口縁部は大きく外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒，バミス 橙色 普通	P-142 5% 中央部覆土下層
2	土師器	A[11.7] B[2.5]	底部欠損。体部は内彎し，口縁部との境に丸みのある稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒，長石，バミス にぶい橙色 普通	P-145 15% 東壁覆土上層
3	高台付坏 須恵器	A[15.4] B[3.9]	底部欠損。体部は内彎しながら，外上方に立ち上がる。	貼り付け高台。水挽き成形。	砂粒，長石，バミス 灰白色 普通	P-147 15% 竈西側床面
4	土師器	A 18.0 B 6.7 C[6.2]	平底。体部は，内彎して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面剝離が著しく，調整不明。	砂粒，長石，バミス 明赤褐色 普通	P-146 20% 竈内

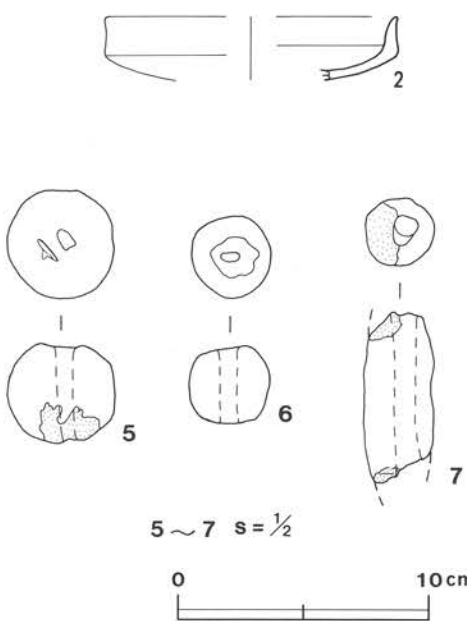
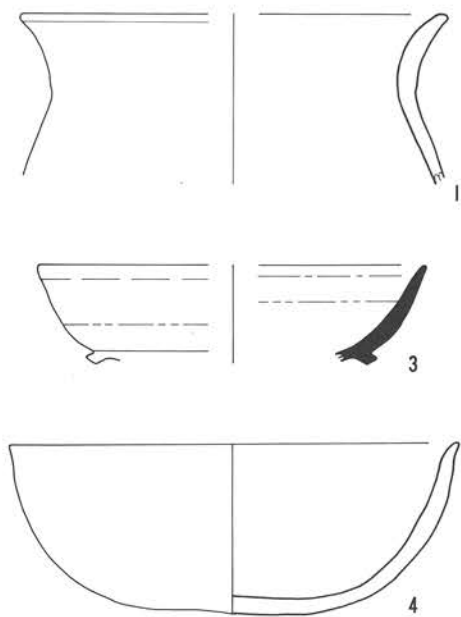
図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
5	球状土錘	2.7	2.9	2.9	4.0	[21.9]	95	覆土上層	DP-58
6	球状土錘	2.1	2.2	2.2	5.0	8.8	100	中央床面	DP-59
7	管状土錘	[4.5]	1.9	1.8	6.5	[14.1]	85	覆土中	DP-60



第50图 第17号住居跡実测图



第51图 第17号住居跡竈実測図



第52图 第17号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡（第53・54図）

位置 調査区の南部，E1c<sub>0</sub>区を中心に確認されている。

重複関係 第20号住居跡と重複している。本跡は，第20号住居跡を掘り込んでいるため，本跡の方が新しい。

規模と平面形 南西壁が調査区外のため不明であるが，一辺が[5.0]m程の隅丸方形を呈するものと推定される。

主軸方向 N-40°-W。

壁 壁高24～51cmを測り，ほぼ垂直及び外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，特に中央部や竈前面が踏み固められている。

ピット 4か所(P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>)が検出されている。いずれも主柱穴で，長径60～100cm，短径56～80cm，深さ64～79cmを測る。柱穴を結んだ線が一辺3m程の方形に配置されている。

竈 北壁中央部を壁外に30cm程掘り込み，砂質粘土で構築されているが，天井部は，崩落している。規模は，長さ105cm，幅110cmを測る。燃焼部は壁際にあり，火床は，床面とほぼ同レベルで，赤変硬化している。煙道部は，焚口部から緩やかに外傾して立ち上がっている。

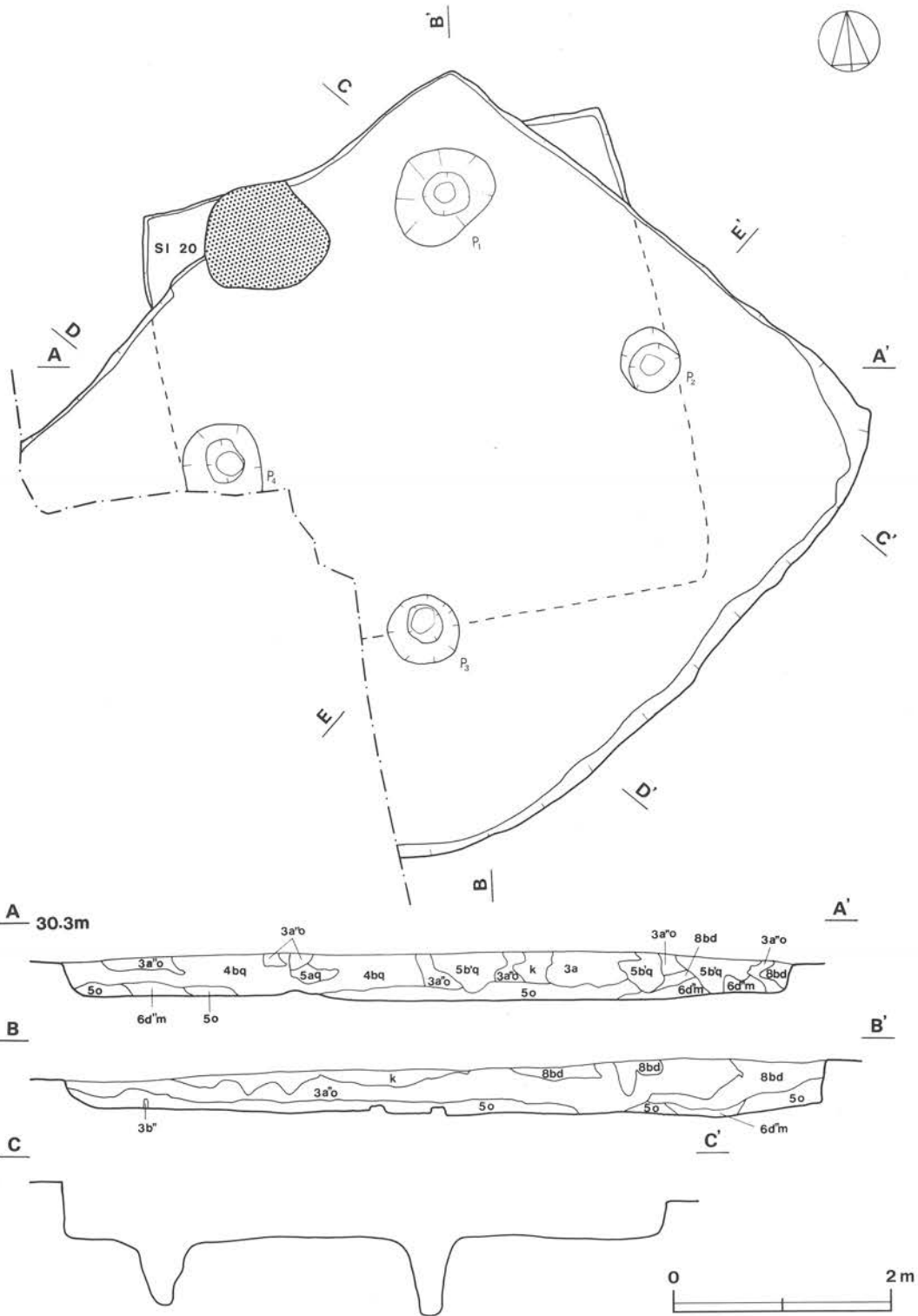
覆土 自然堆積。

遺物 北西壁付近を除く全域から土師器片を中心とする多量の土器片が覆土の中・下層から出土している。5・10の坏及び14の高坏などは竈内から出土している。14の高坏は，逆位の状態で出土し，支脚に使用したと思われる。8の坏は正位，9の坏は逆位で中央部覆土中層から出土している。

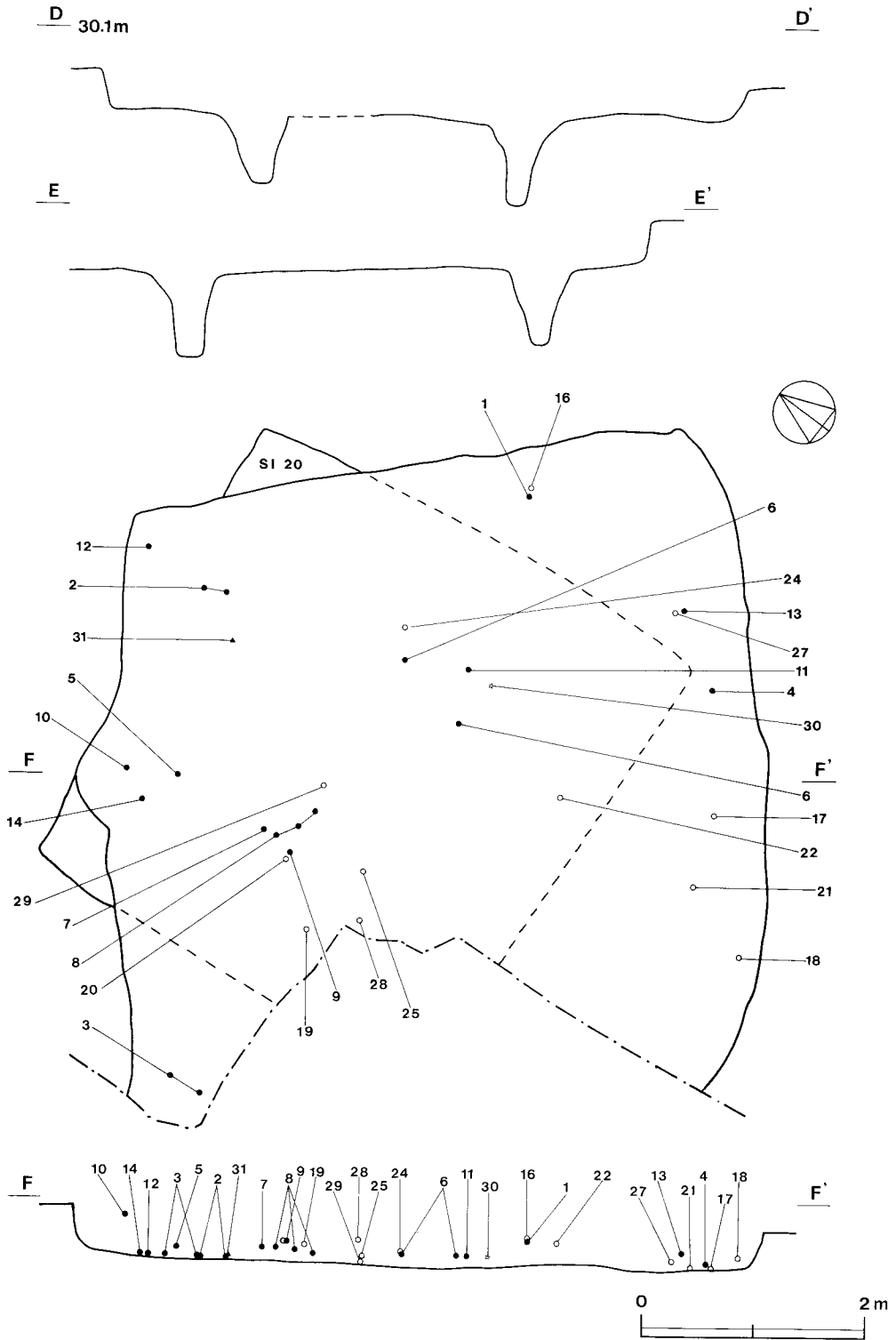
所見 本跡は，出土遺物や住居跡の規模，形態等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 1	甕 土師器	A [20.0] B [ 6.5]	口縁部片。頸部はくびれ，口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒，雲母，長石 橙色 普通	P-150 5% 東コーナー覆土
2	甕 土師器	B [ 5.3] C [ 8.0]	底部片。平底。胴部は内彎して立ち上がる。	胴部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒，バミス，雲母 明褐色 普通	P-152 15% 北コーナー床面
3	甕 土師器	A 26.6 B 24.8 C [ 7.2]	無底式。胴部は内彎し，口縁部は短く外反している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒，バミス，長石 橙色 普通	P-163 99% 西コーナー床面
4	甕 土師器	A [21.7] B [ 9.7]	胴部中央以下欠損。胴部は直立し，口縁部は短く外反する。口唇部は外上方に丸くおさめる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒，バミス，長石 橙色 普通	P-149 5% 南東際中央床面
5	坏 土師器	A 11.9 B 5.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部下端ヘラ削り後ヘラ磨き。	砂粒，バミス，スコリア 明褐色 普通	P-153 90% 竈内

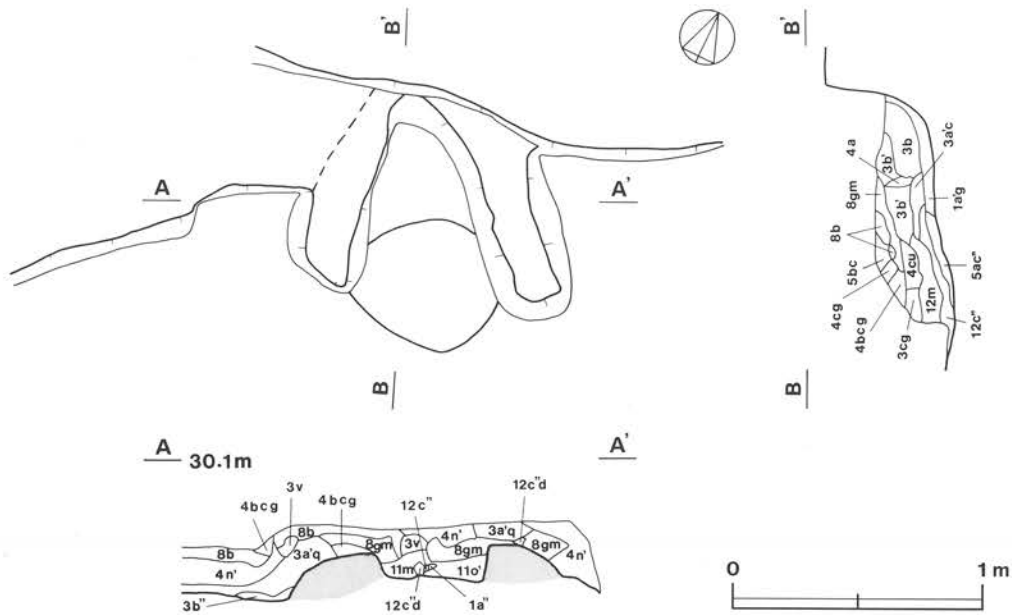


第53图 第18・20号住居跡実測图



第54图 第18・20号住居跡実測図，遺物出土位置図





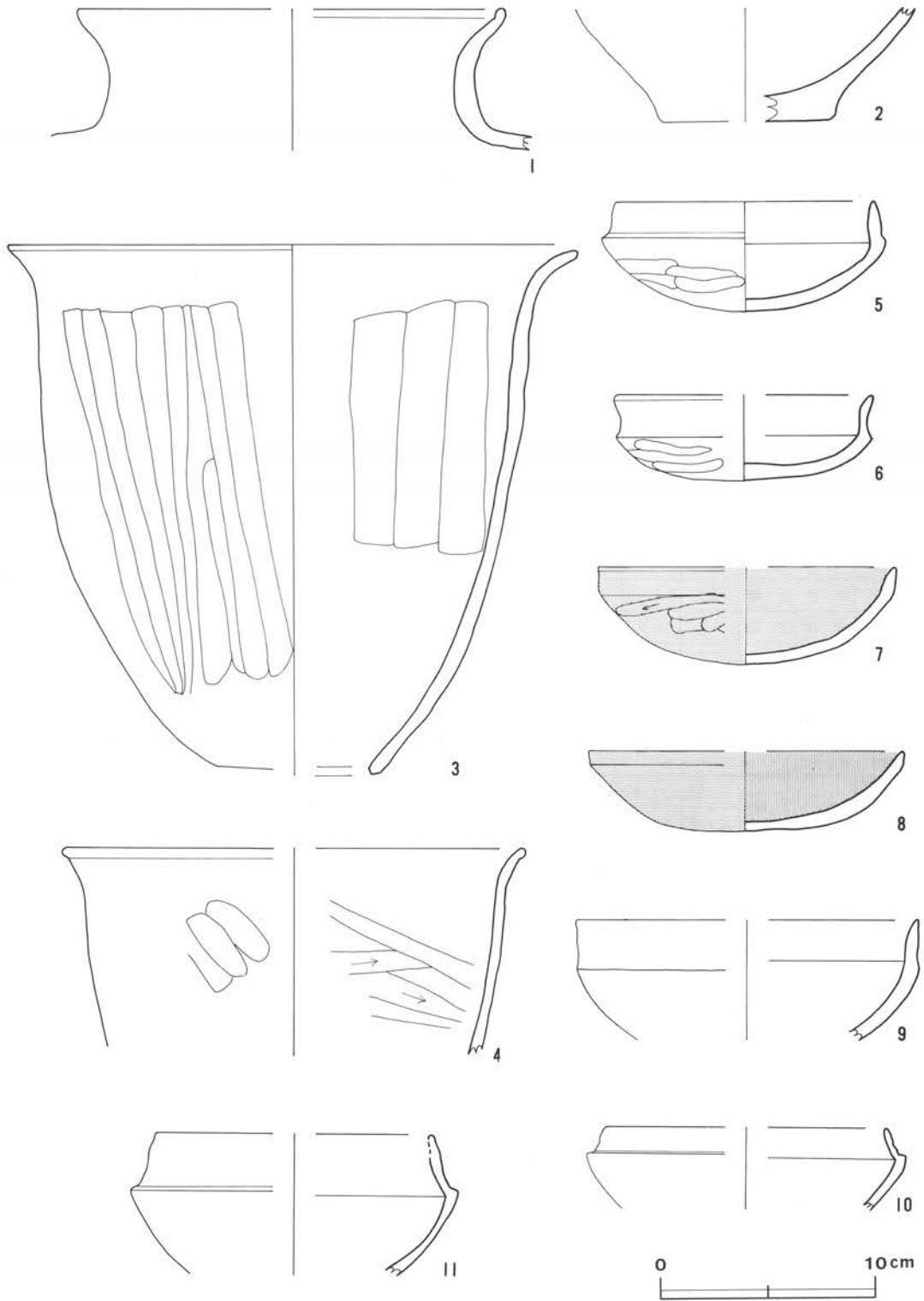
第55図 第18号住居跡竈実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 6	坏 土師器	A [12.0] B 4.0 C [ 5.0]	平底。体部は内彎し、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。口縁部外面にへラ痕。	砂粒, バミス 橙色 普通	P-155 10% 中央部覆土中層
7	坏 土師器	A [13.8] B 4.5	丸底。体部は内彎し、口縁部との境にふい稜をもつ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部へラ削り後へラナデ。内面へラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒, バミス 黒褐色 普通	P-156 35% 中央部覆土中層
8	坏 土師器	A [14.7] B 3.7 C [ 6.0]	平底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒, バミス 黒色 普通	P-157 80% 中央部覆土中層
9	坏 土師器	A [16.0] B [ 5.6]	底部欠損。体部は内彎し、口縁部との境にふい稜をもつ。口縁部は直立している。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。	砂粒, バミス, スコリア 橙色 良	P-160 25% 中央部覆土中層
10	坏 土師器	A [13.2] B [ 3.8]	底部欠損。体部は内彎し、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。	砂粒, バミス, 長石 明赤褐色 普通	P-154 20% 竈内
第57図 11	坏 土師器	A [13.0] B [ 6.6]	底部欠損。体部は内彎し、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は内傾している。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。	砂粒, バミス 橙色 普通	P-161 25% 中央部覆土中層
12	鉢 土師器	A [21.4] B 14.2 C [ 9.0]	平底。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくびれ、口縁部は、外反している。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面へラ削り後へラナデ。底部に木葉痕。	砂粒, バミス, 長石 にふい褐色 普通	P-162 50% 北コーナー床面
13	鉢 土師器	A 11.7 B 6.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面へラ削り後ナデ。輪積痕が残る。	砂粒, 雲母, バミス 橙色 普通	P-159 30% 南東壁際覆土中層

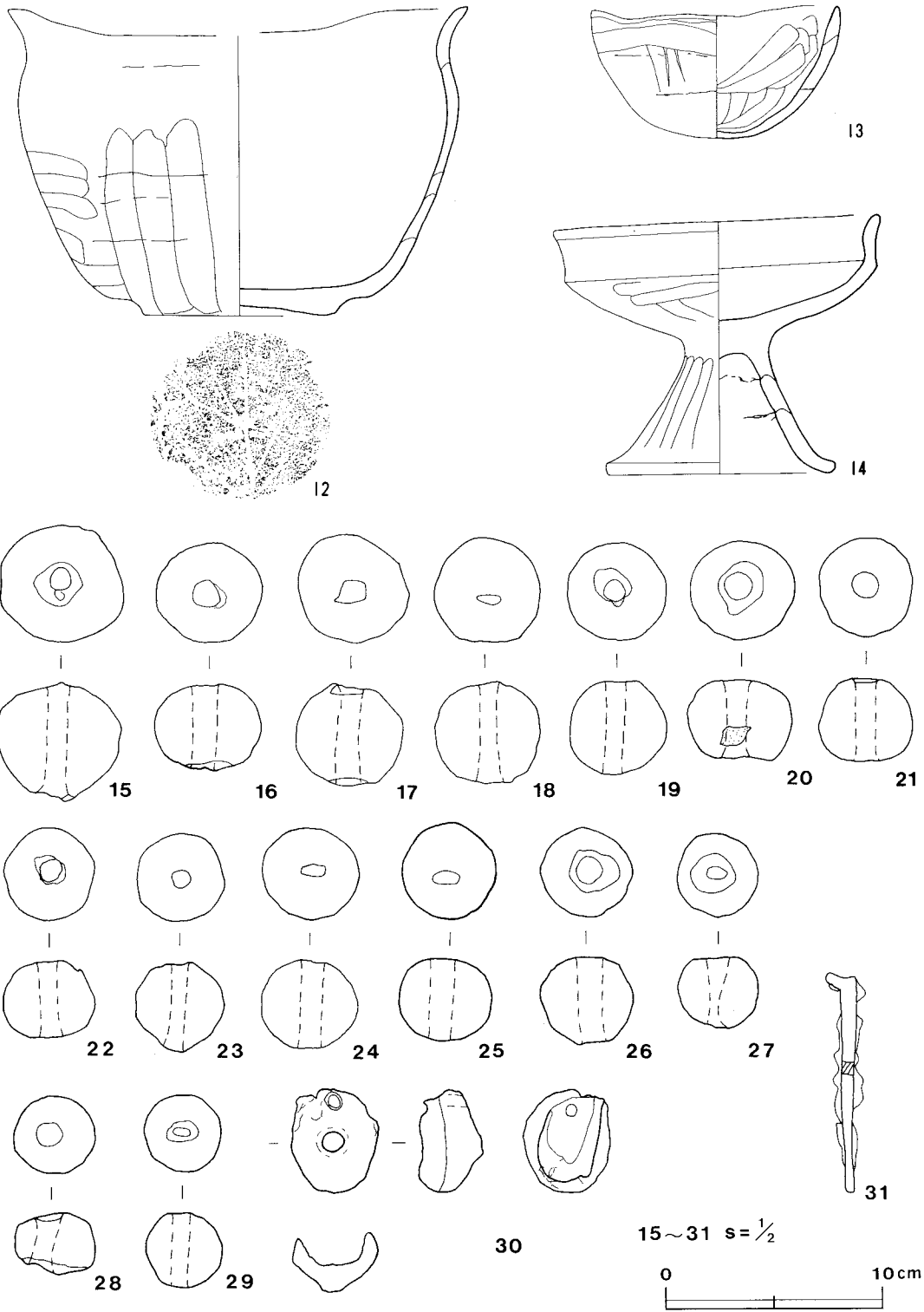
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図 14	高 坏 土 師 器	A 15.1 B 12.1 D 10.5 E 6.5	坏部は内埴気味に立ち上がり、 口縁部との境にふい稜をもつ。 脚部は、ラップ状に開き、裾端 部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。坏底部 ヘラ削り後ヘラナデ。脚部外面 ヘラ磨き。輪積痕が残る。	砂粒，長石，雲母 橙色 普通	P-158 100% 窠内

図版番号	器種	法 量(cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
15	球 状 土 錘	3.6	3.8	3.5	6.0	39.3	100	覆 土 中	DP-61
16	球 状 土 錘	2.6	3.2	3.1	8.0	23.0	100	北東壁際覆土	DP-62
17	球 状 土 錘	3.1	3.4	3.3	8.0	27.5	100	南東壁際床面	DP-63
18	球 状 土 錘	3.1	3.2	3.2	7.0	30.0	100	南東壁際下層	DP-64
19	球 状 土 錘	2.9	3.0	2.0	6.5	23.6	100	中央部中層	DP-65
20	球 状 土 錘	2.5	3.2	3.0	9.0	[22.1]	95	覆 土 中	DP-66
21	球 状 土 錘	2.6	2.9	3.0	8.0	22.2	100	南東壁際床面	DP-67
22	球 状 土 錘	2.4	2.8	2.8	7.0	17.8	100	中央部上層	DP-68
23	球 状 土 錘	2.8	2.7	2.6	5.0	18.3	100	覆 土 中	DP-69
24	球 状 土 錘	2.7	2.9	2.7	8.0	21.1	100	中央部上層	DP-70
25	球 状 土 錘	3.0	2.9	3.0	7.5	17.3	100	覆 土 中	DP-71
26	球 状 土 錘	2.7	2.9	2.8	7.5	16.1	100	覆 土 中	DP-72
27	球 状 土 錘	2.2	2.5	2.6	6.0	13.4	100	南東壁際中層	DP-73
28	球 状 土 錘	1.9	2.5	2.4	8.5	8.6	100	中央部上層	DP-74
29	球 状 土 錘	2.3	2.3	2.3	5.0	11.3	100	中央部下層	DP-75
30	ミニチュア	3.2	2.7	1.9	—	[ 9.3]	95	覆 土 中	DP-77

図版番号	器種	法 量(cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
31	釘	6.7	0.5	0.4	—	[ 4.4]	95	北西部覆土中	M-3



第56图 第18号住居跡出土遺物実測図(1)



第57图 第18号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

第19号住居跡（第58図）

位置 調査区の南部，D2f<sub>2</sub>区を中心に確認されている。

重複関係 第14号住居跡と重複している。本跡は，第14号住居跡の上に構築されており，本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸3.4m，短軸3.3mの隅丸方形を呈している。

主軸方向 N-13°-W。

壁 壁高22～28cmを測り，北壁は外傾し，他の壁は垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，竈の前面がよく踏み固められていて堅緻である。

ピット 1か所（P<sub>1</sub>）が検出されている。主柱穴で，長径38cm，短径32cm，深さ47cmを測る。他の柱穴は検出されなかった。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。トレンチャーにより大半が攪乱され，袖部が断片的に残存しているにすぎない。規模は，長さ114cm，幅140cmと推定される。火床は一部が検出され，床をわずかに掘り窪めている。煙道部は，不明である。

覆土 自然堆積。

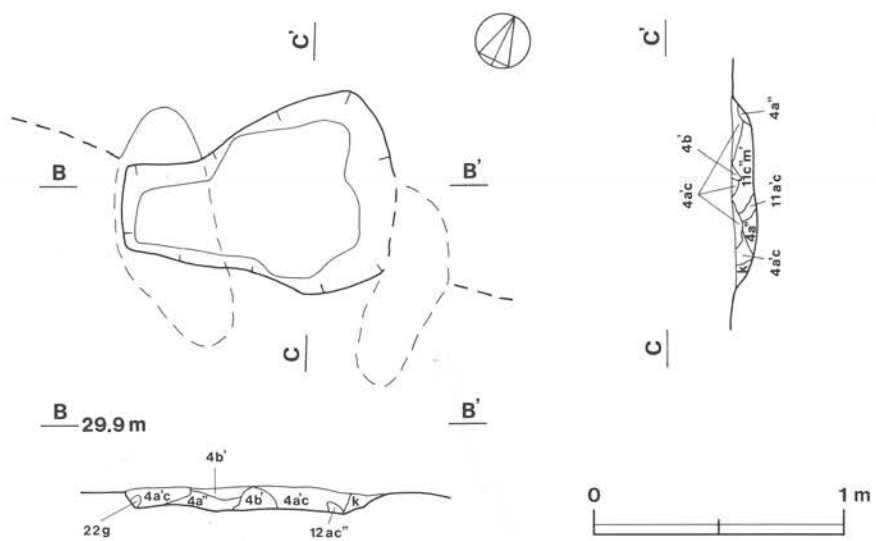
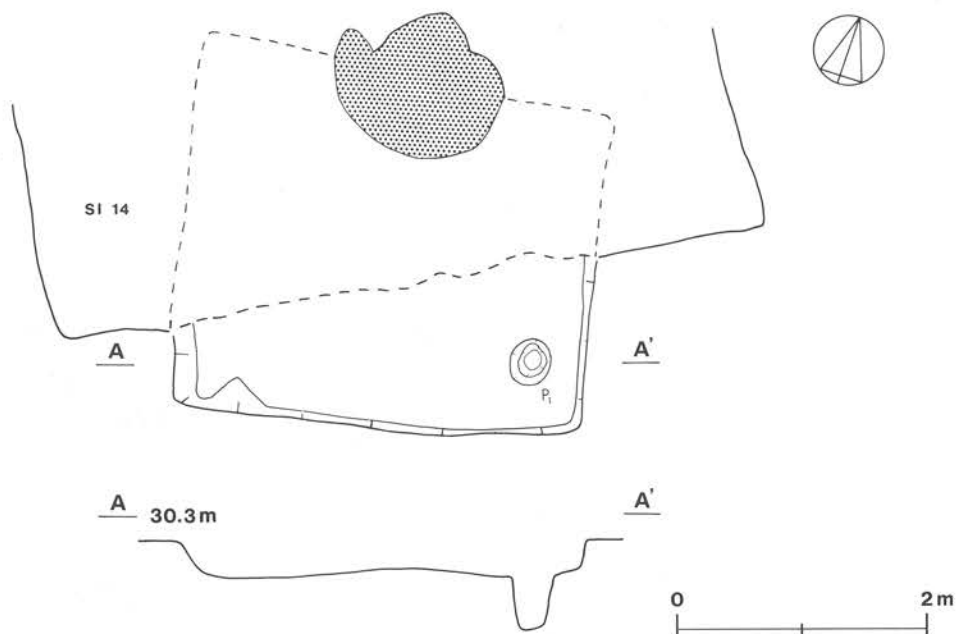
遺物 全域から少量の土師器片や須恵器が出土している。4の須恵器の浅鉢は，竈内からつぶれた状態で出土している。

所見 本跡は，出土遺物や住居跡の規模，形態等から奈良時代の住居跡と考えられる。

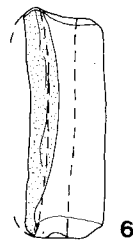
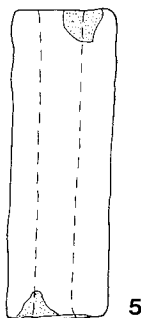
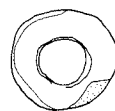
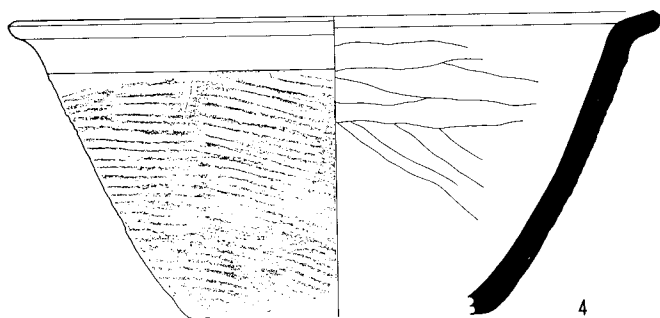
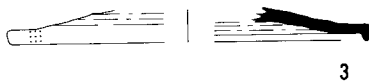
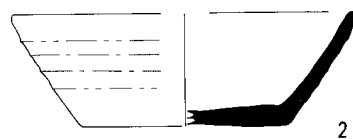
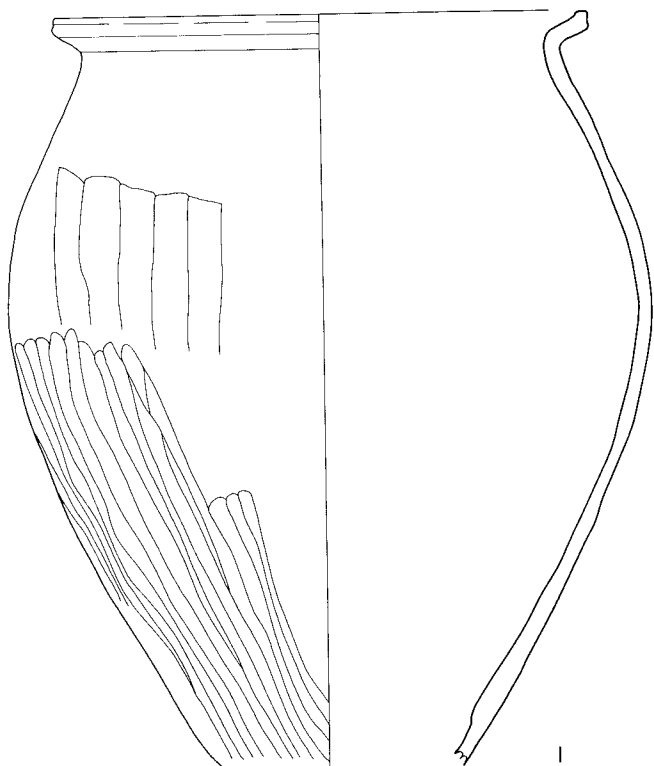
第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第59図 1	甕 土師器	A 21.1 B [30.2]	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり，頸部はくびれる。口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラ磨き。内面へラ削り後へラナデ。	砂粒，バミス，長石 にぶい褐色 普通	P-119 65% 中央部床面
2	坏 須恵器	A [13.8] B 4.5	平底。体部は外傾して立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。	砂粒，長石 灰色 普通	P-168 25% 竈西側下層
3	蓋 須恵器	A [14.5] B [ 1.3]	天井部欠損。体部は緩やかに傾斜する。口縁部は下方向に屈曲し，端部やや尖る。	水挽き成形。	砂粒，細礫 黄灰色 普通	P-169 15% 竈内
4	浅鉢 須恵器	A 26.1 B 12.1 C [11.8]	底部欠損。胴部は外上方に立ち上がり，口縁部は短く外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面平行叩き目，内面へラナデ。	砂粒，バミス，スコリア 浅黄褐色 普通	P-166 85% 竈内覆土上層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
5	管状土鍾	8.3	2.8	2.7	12.0	[71.1]	70	南壁際上層	DP-80
6	管状土鍾	6.0	[1.8]	[2.6]	10.0	[28.0]	95	南壁際床面	DP-81



第58図 第19号住居跡・竈実測図



5·6 s = 1/2



第59图 第19号住居跡出土遺物実測・拓影図

第20号住居跡（第53・54図）

位置 調査区の南部，E1c<sub>0</sub>区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は，第18号住居跡と重複している。本跡は第18号住居跡に掘り込まれているため本跡の方が古い。

規模と平面形 北壁両端の北東・北西コーナーしか検出されないため不明の点が多いが，一辺[5.0]m程の方形を呈する住居跡と思われる。

壁 壁高22～28cm測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 第18号住居跡よって床面のほとんどが削平されている。残存部は，平坦である。

覆土 自然堆積。

所見 本跡は，出土遺物は少なく，住居跡の規模，時期について比定することは困難で，第18号住居跡が古墳時代後期の住居跡と考えられることから，それ以前の住居跡である。

表1 住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規 模		床面積 (㎡)	各部の状況			竈 位 置	覆土	遺 物	備 考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)		溝	床	支柱 穴数				
1	E2j <sub>s</sub>	N-3°-W	隅丸方形	4.0×4.0	5~29	16.00	-	平坦	4	北壁中央部	自然	土師器片178点	
2	E2e <sub>2</sub>	N-22°-W	方 形	6.0×5.8	40~70	34.80	全周	平坦	4	北西壁中央部	自然	土師器片963点, 須惠器片7点	
3	E2f <sub>s</sub>	N-8°-W	方 形	5.0×4.8	10~45	24.00	-	平坦	2	北壁中央部	人為	土師器片794点	
4	E2b <sub>0</sub>	N-5°-W	隅丸方形	7.3×7.2	22~57	52.56	全周	平坦	4	北壁中央部	自然	土師器片471点	
5	D2j <sub>s</sub>	N-2°-W	方 形	3.5×3.2	7~13	11.20	-	平坦	-	北壁中央部	自然	土師器片20点	
6	D2h <sub>s</sub>	N-31°-W	隅丸方形	6.1×5.9	7~25	35.99	-	平坦	4	北西壁中央部	人為	土師器片109点, 須惠器片2点	
7	D2i <sub>6</sub>	N-8°-W	方 形	3.6×3.3	14~38	11.88	-	平坦	4	北壁中央部	自然	土師器片331点	
8	D2g <sub>4</sub>	N-22°-W	方 形	5.8×5.3	25~36	30.74	-	平坦	4	北西壁中央部	自然	土師器片278点, 須惠器片1点	
9	D3f <sub>1</sub>	N-36°-W	方 形	7.0×6.7	24~38	46.90	-	平坦	4	北西壁中央部	自然	土師器片430点	
10	D2g <sub>0</sub>	N-8°-W	方 形	3.4×[3.2]	25~36	[10.88]	-	平坦	-	北壁中央部	自然	土師器片34点	
11	D2e <sub>s</sub>	N-19°-W	隅丸方形	5.0×4.8	34~38	24.00	-	平坦	4	北壁中央部	人為	土師器片134点	
12	D2d <sub>7</sub>	N-10°-W	隅丸方形	5.2×4.9	20~44	25.48	-	平坦	4	北壁中央部	自然	土師器片848点, 須惠器片2点	
13	E2b <sub>3</sub>	N-38°-W	方 形	5.8×5.8	18~35	33.64	-	平坦	4	北壁中央部	人為	土師器片1070点, 須惠器片9点	
14	D2i <sub>2</sub>	N-27°-W	方 形	5.7×5.2	18~35	29.64	-	平坦	4	北西壁中央部	自然	土師器片528点, 須惠器片8点	SI-19と重複
15	D2f <sub>2</sub>	N-8°-W	方 形	[5.0]×[4.0]	30~50	[20.00]	全周	平坦	4	北壁中央部	自然	土師器片339点, 須惠器片3点	SI-16と重複
16	D2f <sub>2</sub>	—	方 形	[5.0]×[5.0]	4~32	[25.00]	北	平坦	1	—	自然	土師器片67点, 須惠器片1点	SI-15と重複
17	E1a <sub>0</sub>	N-3°-W	隅丸長方形	4.8×4.1	50~65	19.68	全周	平坦	4	北西壁中央部 東より	自然	土師器片1184点, 須惠器片6点	
18	E1c <sub>0</sub>	N~40°-W	長 方 形	[5.0]×[5.0]	[25.00]	24~51	-	平坦	4	北壁中央部	自然	土師器片543点	SI-20と重複
19	D2j <sub>2</sub>	N-13°-W	隅丸方形	4.4×3.8	22~28	16.72	-	平坦	1	北壁中央部	自然	土師器片92点, 須惠器片1点	
20	E1c <sub>0</sub>	—	方 形	[5.0]×[5.0]	22~28	[25.00]	-	平坦	-	—	自然	土師器片2点	SI-18と重複



## 2 土 坑

土坑として調査した遺構は、15基であるが、本項では、その内の土坑の主な物を記述し、他は一欄表にした。第8・12号土坑は、調査の結果風倒木痕と判断したので欠番とした。

### 第1号土坑（第60図）

**位置** 調査区の南部，E2j<sub>6</sub>区に位置する。

**重複関係** 第2号土坑を掘り込んでいるため，新旧関係は，本跡の方が新しい。

**規模と形状** 長径2.2m，短径1.4mの長楕円形を呈し，深さ40cmを測る。底面は，浅い皿状で，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

**長径方向** N-3°-E。

**覆土** 自然堆積。

**遺物** 覆土上層から土師器片，管状土錘が出土している。

**所見** 重複遺構との関連から，第2号土坑(古墳時代)より新しい土坑である。

### 第2号土坑（第60図）

**位置** 調査区の南部，E2j<sub>6</sub>区に位置する。

**重複関係** 第1号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径1.4m，短径1.0mの楕円形を呈し，深さ48cmを測る。底面は皿状で，壁は，南側がなだらかに立ち上がるほかは，ほぼ垂直に立ち上がる。

**長径方向** N-4°-W。

**覆土** 自然堆積。

**遺物** 土坑内から多量のヤマトシジミが検出され，覆土中層から管状土錘，雲母片岩及び土師器の細片が出土している。

**所見** 出土遺物から，古墳時代の土坑と考えられる。

### 第9号土坑（第60図）

**位置** 調査区の南部，E2j<sub>6</sub>区に位置する。

**規模と形状** 長径0.86m，短径0.74mの不整楕円形を呈し，深さ42~60cmを測る。底面には3か所のピットが検出され，Aは円筒状に掘り込まれ，B，Cは不整形の浅い掘り込みである。壁は，北壁がほぼ垂直に立ち上がる。東，西壁の上部は攪乱を受けている。

**長径方向** N-4°-W。

**覆土** 自然堆積。

遺物 覆土中層より、土師器片、3、4の坏片が出土している。

所見 出土遺物から、古墳時代後期の土坑と考えられる。

### 第10号土坑（第60図）

位置 調査区南部、E2b<sub>6</sub>区に位置する。

規模と形状 長径1.25m、短径1.1mの楕円形を呈し、深さ40cm程である。底面は、平坦で堅緻である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、堅く締まっている。

長径方向 N-10°-W。

覆土 自然堆積。

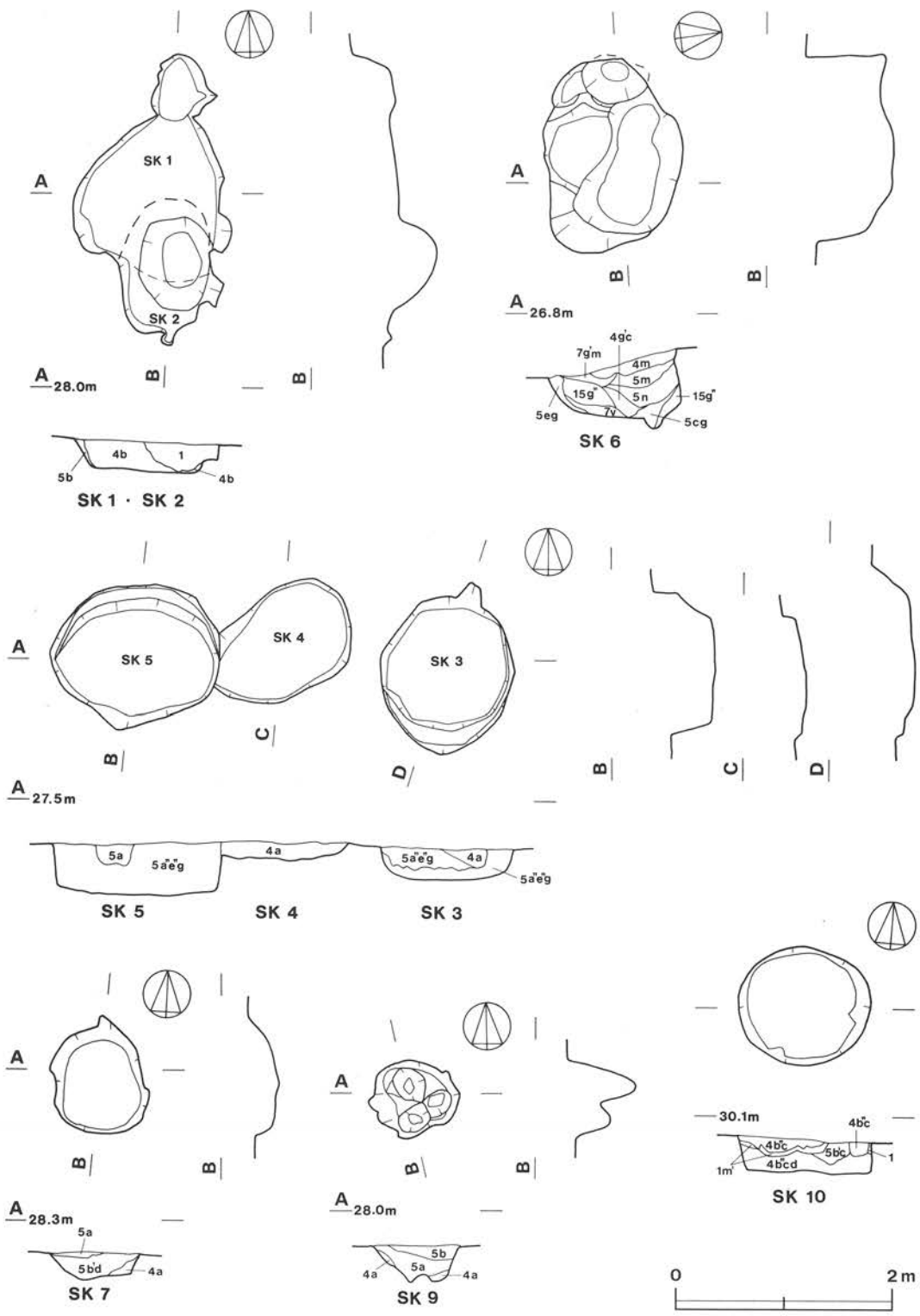
遺物 覆土中層からは、土師器の坏片や球状土錘が出土している。

所見 出土遺物から古墳時代後期の土坑と考えられる。

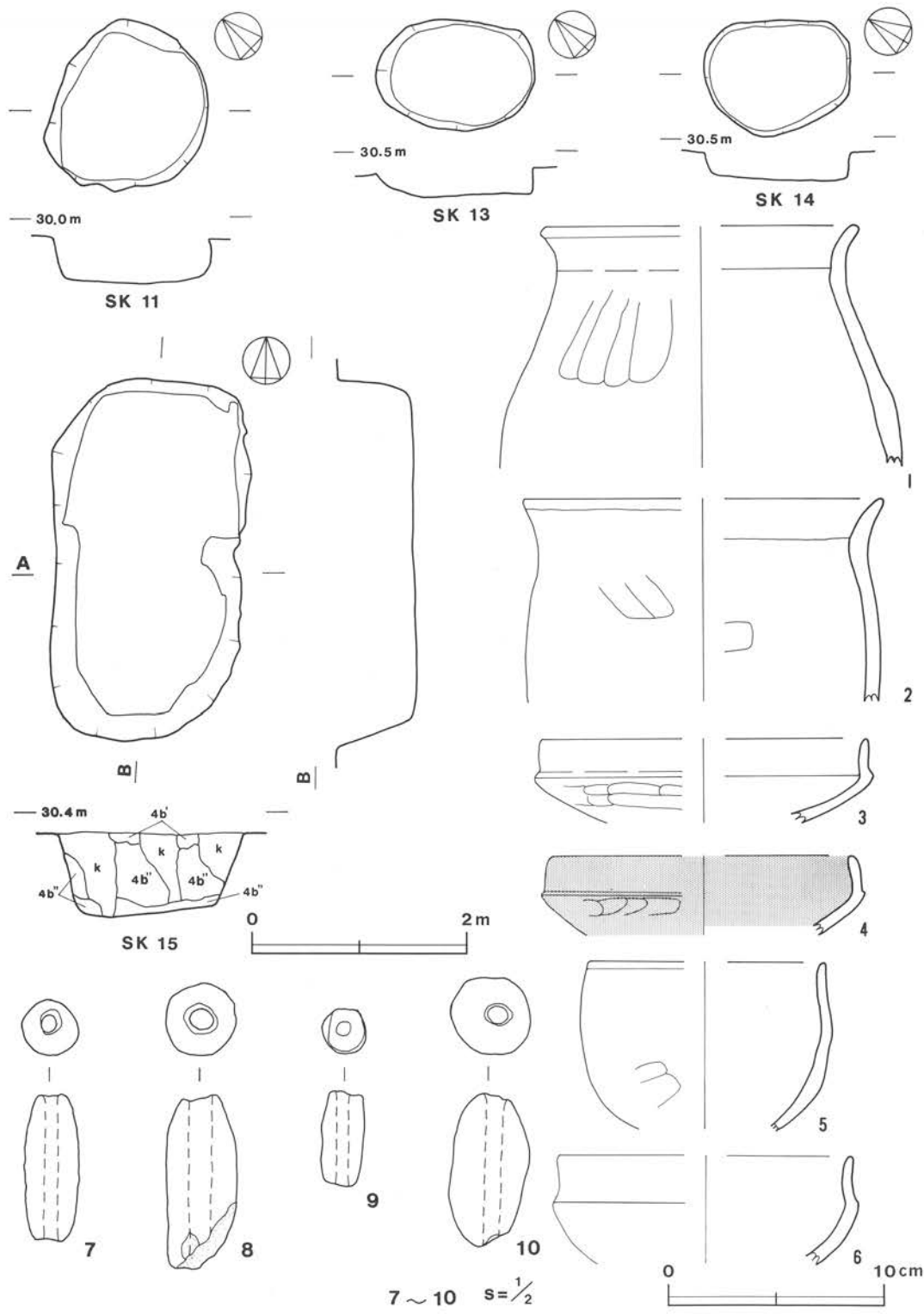
### 第9・10号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第61図 1	甕 土師器	A[14.4] B[11.3]	胴中央部以下欠損。頸部はくびれ、口縁部は短く外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒、長石、パミス 橙色 普通	P-173 5% 覆土中層
2	甕 土師器	A[16.6] B[9.4]	胴中央部以下欠損。胴部は内彎して頸部はややくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒、パミス、雲母 橙色 普通	P-174 5% 覆土中層
3	坏 土師器	A[15.0] B[3.9]	底部欠損。体部は内彎し、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒、パミス、長石 橙色 普通	P-175 20% 覆土中層
4	坏 土師器	A[14.0] B[3.7]	底部欠損。体部は内彎し、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は僅かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒、パミス、礫 黒褐色 普通	P-176 20% 中央部覆土中層
5	鉢 土師器	A[11.0] B[7.8]	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒、パミス、雲母 橙色 普通	P-177 25% 中央部覆土下層
6	坏 土師器	A[12.6] B[5.1]	底部欠損。体部は内彎し、口縁部との境にふい稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面剝離が著しく調整不明。	砂粒、パミス 暗赤褐色 普通	P-178 10% 覆土中層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
7	管状土錘	4.6	1.75	1.7	4.0	12.8	100	覆土中	DP-82 SK-1
8	管状土錘	[5.3]	2.1	2.2	6.0	[22.7]	70	覆土中	DP-83 SK-2
9	管状土錘	2.9	1.4	1.4	4.5	5.8	100	覆土中	DP-84 SK-6
10	管状土錘	4.7	2.5	2.4	6.5	[22.6]	90	覆土中	DP-85 SK-15



第60图 第1~7·9·10号土坑实测图



第61图 第11・13~15号土坑实测图，第9・10号土坑出土遗物实测图

表 2 土坑一覽表

土坑 番号	位 置	長 径 方 向	平 面 形	規 模		覆 土	底 面	壁 面	道 物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)					
1	E2i <sub>6</sub>	N-3°-E	不整楕円形	2.2 × 1.4	0.40	自然	皿状	外 傾	土師器片30片, 管状土錘	SK-2 と重複
2	E2i <sub>6</sub>	N-4°-W	楕 円 形	1.4 × 1.0	0.48	自然	皿状	垂 直	土師器片22片, 管状土錘	SK-1 と重複
3	F2a <sub>2</sub>	N-0°	楕 円 形	1.5 × 1.3	0.20	自然	皿状	垂 直		
4	F2a <sub>2</sub>	N-40°-W	不整楕円形	1.0 × 1.4	0.10	自然	皿状	外 傾		
5	F2a <sub>1</sub>	N-0°	楕 円 形	1.3 × 1.6	0.40	自然	皿状	垂 直		
6	F1b <sub>6</sub>	N-71°-W	不整楕円形	1.3 × 1.8	1.33	自然	皿状	垂 直	土師器片16片, 管状土錘	
7	E2i <sub>2</sub>	N-3°-W	楕 円 形	1.1 × 0.9	0.27	自然	皿状	外 傾		
9	E2i <sub>6</sub>	N-4°-W	楕 円 形	0.9 × 0.7	0.60	自然	皿状	外 傾	土師器片 6 片	
10	E 2 b <sub>4</sub>	N-10°-W	楕 円 形	1.3 × 1.1	0.40	自然	平坦	垂 直	土師器片196片, 球状土錘	
11	E2b <sub>6</sub>	N-7°-W	楕 円 形	1.4 × 1.6	0.45	自然	平坦	垂 直	土師器片22片	
13	D3d <sub>6</sub>	N-40°-W	楕 円 形	1.5 × 1.0	0.20	自然	皿状	外 傾		
14	D3d <sub>4</sub>	N-39°-W	楕 円 形	1.4 × 1.1	0.25	自然	皿状	垂 直		
15	D2b <sub>2</sub>	N-2°-W	楕 円 形	3.4 × 1.8	0.77	自然	平坦	垂 直	縄文式土器片 4 片, 土師器片63片, 管状土錘	

### 3 ピット群

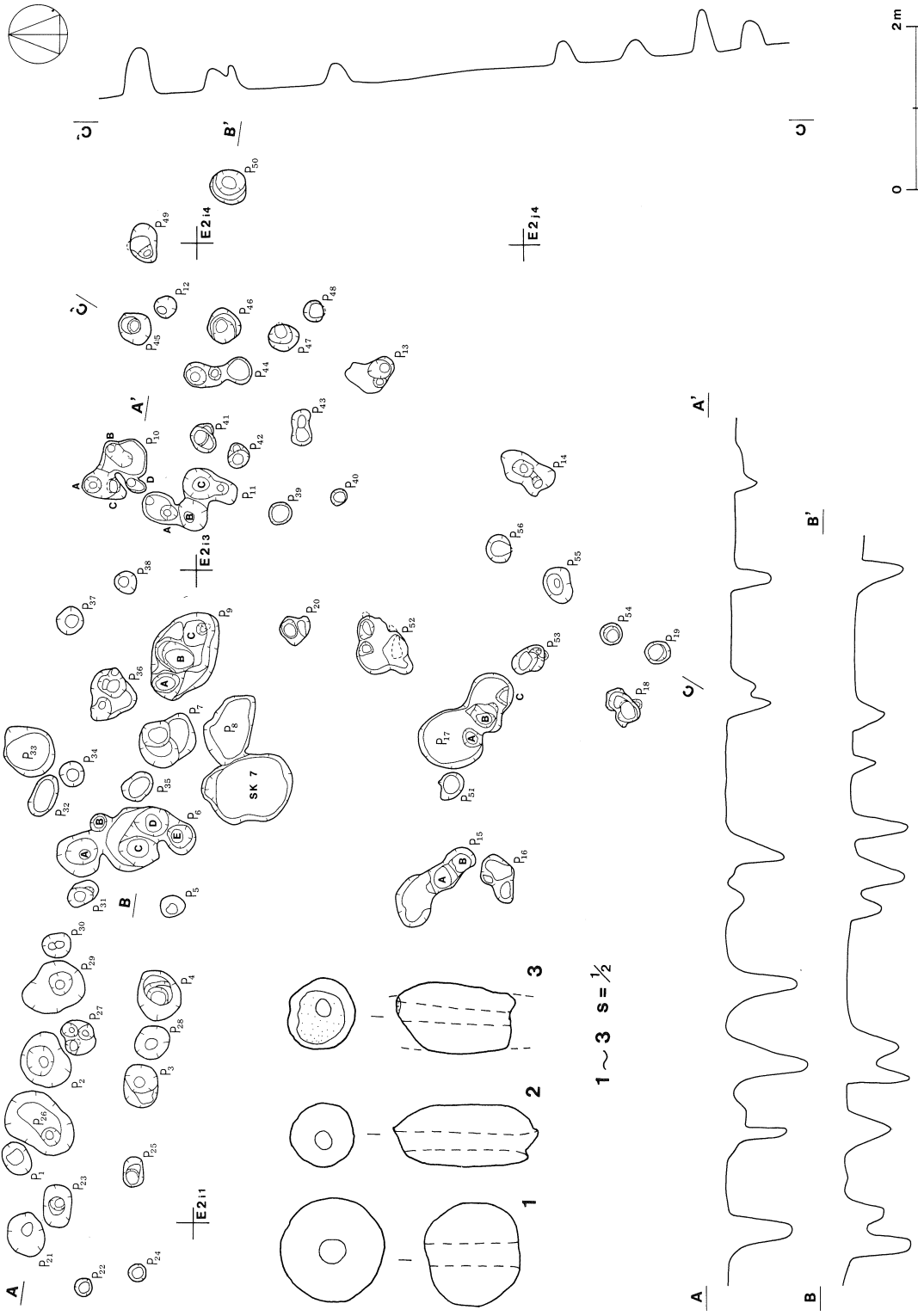
当調査区からは、総数56基にのぼるピットが検出された。調査区の南側の緩斜面に位置し、ピットの規模、形状及び深さなどは様々で、位置関係の上から竪穴住居跡や掘立柱建物跡のように明確な遺構として確認できない要素が多いため、ピット群として取り扱うことにする。

これらのピット群は、調査区の南側に一つの大きなまとまり(長さ13m、幅9m)として分布している。これらのピットについては、一欄表において掲載した。

表3 ピット群一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模		出土遺物
				長径×短径(m)	深さ(m)	
1	E2h <sub>1</sub>	N-80°-E	楕円形	0.40 × 0.33	0.30	自然石3点
2	E2h <sub>1</sub>	N-0°	楕円形	0.67 × 0.60	0.96	土師器片1片, 自然石4点
3	E2h <sub>1</sub>	N-78°-E	楕円形	0.56 × 0.44	0.72	須恵器片1片
4	E2h <sub>1</sub>	N-54°-E	楕円形	0.63 × 0.52	0.82	土師器片1片
5	E2h <sub>1</sub>	N-0°	楕円形	0.32 × 0.28	0.70	土師器片1片, 球状土錘1点
6 <sub>A</sub>	E2h <sub>2</sub>	N-7°-W	不定形	0.55 × 0.70	0.70	縄文式土器片1片
6 <sub>B</sub>	E2h <sub>2</sub>	N-20°-W	円形	0.21 × 0.18	0.48	
6 <sub>C</sub>	E2h <sub>2</sub>	N-78°-W	楕円形	0.52 × 0.36	0.84	
6 <sub>D</sub>	E2h <sub>2</sub>	N-0°	円形	0.42 × 0.36	0.50	
6 <sub>E</sub>	E2h <sub>2</sub>	N-78°-W	不定形	0.40 × 0.36	0.72	
7	E2h <sub>2</sub>	N-47°-W	楕円形	0.74 × 0.71	0.58	土師器片3片, 自然石1点
8	E2i <sub>2</sub>	N-66°-W	不定形	0.94 × 0.58	0.14	管状土錘1点
9 <sub>A</sub>	E2h <sub>2</sub>	N-0°	不定形	0.40 × 0.38	0.78	自然石1点
9 <sub>B</sub>	E2h <sub>2</sub>	N-28°-W	楕円形	0.52 × 0.32	0.67	土師器片1片
9 <sub>C</sub>	E2h <sub>2</sub>	N-0°	不定形	0.33 × 0.26	0.47	
10 <sub>A</sub>	E2h <sub>3</sub>	—	円形	0.21 × 0.21	0.55	
10 <sub>B</sub>	E2h <sub>3</sub>	N-56°-W	不定形	0.38 × 0.18	0.26	
10 <sub>C</sub>	E2h <sub>3</sub>	N-0°	楕円形	0.23 × 0.15	0.57	
10 <sub>D</sub>	E2h <sub>3</sub>	N-32°-W	楕円形	0.25 × 0.18	0.29	
11 <sub>A</sub>	E2h <sub>3</sub>	N-14°-W	円形	0.45 × 0.37	0.23~0.65	土師器片3片, 自然石2点
11 <sub>B</sub>	E2h <sub>3</sub>	N-34°-W	楕円形	0.41 × 0.36	0.40	
11 <sub>C</sub>	E2h <sub>3</sub>	N-55°-W	不定形	0.68 × 0.32	0.65	
12	E2h <sub>3</sub>	—	円形	0.28 × 0.27	0.40	土師器片1片
13	E2i <sub>3</sub>	N-15°-W	不定形	0.61 × 0.35	0.68	土師器片5片
14	E2j <sub>3</sub>	N-28°-E	不定形	0.72 × 0.33	0.41	土師器片2片
15 <sub>A</sub>	E2i <sub>2</sub>	N-43°-W	方形	0.40 × 0.34	0.52	土師器片1片
15 <sub>B</sub>	E2i <sub>2</sub>	N-31°-W	楕円形	0.33 × 0.30	0.49	
16	E2i <sub>2</sub>	N-75°-E	不整楕円形	0.64 × 0.41	0.46~0.52	土師器片1片
17 <sub>A</sub>	E2i <sub>2</sub>	N-27°-W	楕円形	0.23 × 0.20	0.30	土師器片2片
17 <sub>B</sub>	E2i <sub>2</sub>	N-23°-E	不定形	0.40 × 0.31	0.66	

番号	位置	長軸方向	平面形	規模		出土遺物
				長径×短径(m)	深さ(m)	
17c	E2i <sub>2</sub>	—	三角形	0.22 × 0.17	0.14	
18	E2j <sub>2</sub>	N-39°-E	不定形	0.51 × 0.32	0.39	土師器片 3片
19	E2j <sub>2</sub>	N-0°	楕円形	0.33 × 0.26	0.33	土師器片 5片
20	E2i <sub>2</sub>	N-56°-W	不定形	0.39 × 0.33	0.46	土師器片 4片
21	E2g <sub>0</sub>	N-0°	楕円形	0.55 × 0.44	0.77	
22	E2g <sub>0</sub>	N-52°-W	円形	0.22 × 0.21	0.88	
23	E2h <sub>1</sub>	N-73°-E	楕円形	0.52 × 0.32	0.50	
24	E2g <sub>0</sub>	N-88°-W	円形	0.22 × 0.20	0.15	
25	E2h <sub>1</sub>	N-75°-E	楕円形	0.35 × 0.24	0.45	
26	E2a <sub>1</sub>	N-46°-E	楕円形	0.94 × 0.67	0.65	
27	E2h <sub>1</sub>	N-88°-E	円形	0.43 × 0.39	0.54	
28	E2h <sub>1</sub>	N-22°-W	楕円形	0.44 × 0.40	0.71	
29	E2h <sub>1</sub>	N-19°-W	楕円形	0.79 × 0.61	0.83	
30	E2h <sub>1</sub>	N-40°-W	楕円形	0.35 × 0.34	0.15	
31	E2h <sub>1</sub>	N-30°-W	不定形	0.41 × 0.29	0.14	
32	E2h <sub>2</sub>	N-58°-W	楕円形	0.53 × 0.29	0.15	
33	E2h <sub>2</sub>	N-54°-E	楕円形	0.71 × 0.60	0.24	
34	E2h <sub>2</sub>	—	円形	0.32 × 0.31	0.69	
35	E2h <sub>2</sub>	N-32°-W	楕円形	0.41 × 0.31	0.78	
36	E2h <sub>2</sub>	N-67°-W	不定形	0.72 × 0.58	0.52	
37	E2h <sub>2</sub>	N-3°-E	円形	0.36 × 0.34	0.67	
38	E2h <sub>2</sub>	N-51°-E	不定形	0.31 × 0.26	0.40	
39	E2i <sub>3</sub>	N-43°-W	円形	0.29 × 0.27	0.10	
40	E2i <sub>3</sub>	N-60°-W	円形	0.22 × 0.20	0.20	
41	E2i <sub>3</sub>	N-67°-W	不定形	0.37 × 0.28	0.72	
42	E2i <sub>3</sub>	N-70°-E	不定形	0.33 × 0.26	0.44	管状土錘 1点
43	E2i <sub>3</sub>	N-0°	不定形	0.47 × 0.26	0.26~0.30	
44	E2i <sub>3</sub>	N-7°-W	不定形	0.85 × 0.35	0.29~0.72	
45	E2h <sub>3</sub>	N-0°	楕円形	0.43 × 0.38	0.77	
46	E2i <sub>3</sub>	N-85°-E	円形	0.44 × 0.40	0.38	
47	E2i <sub>3</sub>	N-75°-W	楕円形	0.40 × 0.35	0.38	
48	E2i <sub>3</sub>	N-16°-W	円形	0.27 × 0.27	0.22	
49	E2h <sub>3</sub>	N-85°-W	楕円形	0.50 × 0.35	0.33	
50	E2i <sub>4</sub>	N-2°-W	円形	0.45 × 0.44	0.51	
51	E2i <sub>2</sub>	N-57°-W	楕円形	0.38 × 0.27	0.17	
52	E2i <sub>2</sub>	N-53°-E	不定形	0.93 × 0.62	0.52~0.79	
53	E2j <sub>2</sub>	N-45°-W	楕円形	0.57 × 0.33	0.39	
54	E2j <sub>2</sub>	—	円形	0.30 × 0.28	0.54	
55	E2j <sub>2</sub>	N-70°-E	楕円形	0.47 × 0.33	0.26	
56	E2j <sub>3</sub>	N-3°-W	円形	0.37 × 0.32	0.28	



第62図 ピット群実測図，出土遺物実測図



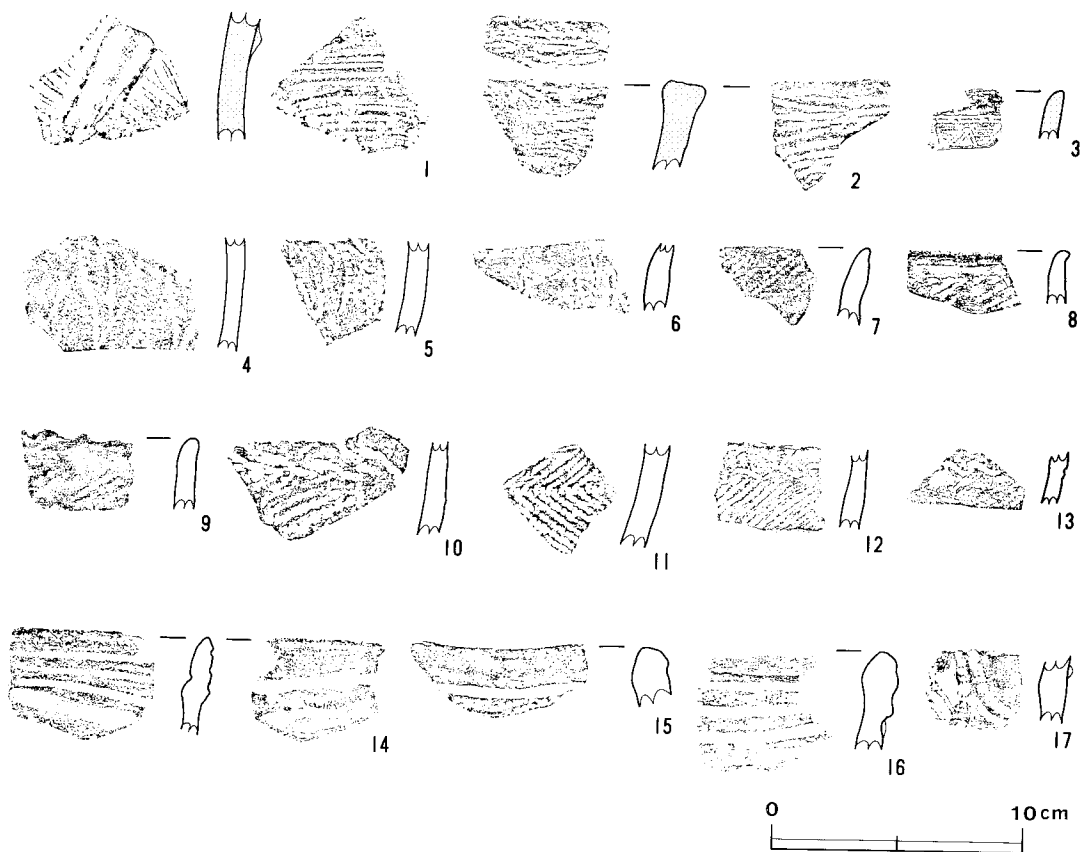
#### 4 その他の遺物

沢三木台遺跡の遺構内・外から縄文式土器及び鉄製品などが出土している。縄文式土器には簡単な解説を加え、他の遺物は一欄表で記載した。

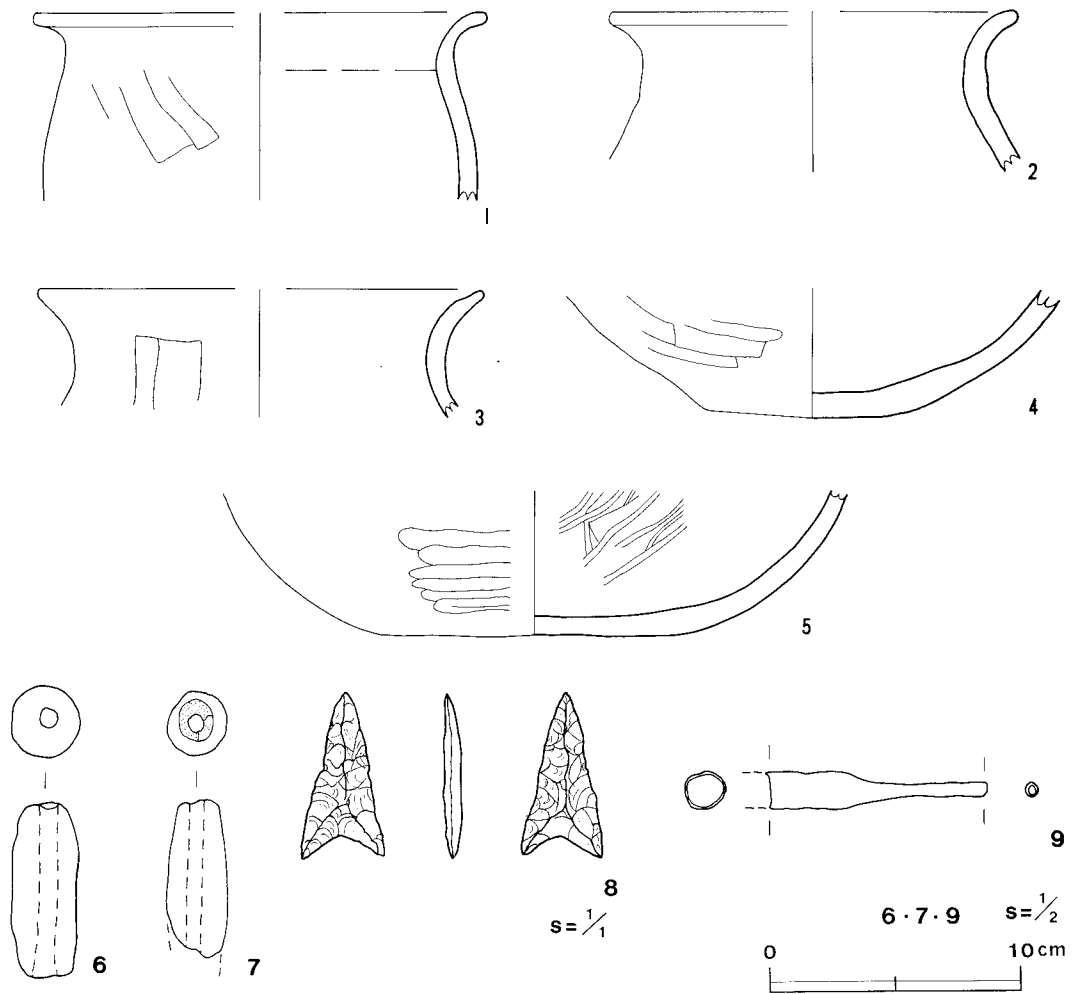
##### (1) 縄文式土器

沢三木台遺跡から出土した縄文式土器片の主なものを記載した。

1は、胎土に繊維を含み内・外面に条痕を施し、断面三角の隆帯を貼付している。早期の野島式と思われる。2は、胎土に繊維を含み口唇部や外面に撚糸を施し、内面には条痕を施している。早期末の土器である。3は、黒浜式土器の口縁部片で胎土に繊維を含んでいる。4～6は、浮島式土器である。波状に貝殻文を施している。7～13は、前期末葉の土器群で、9は、小波状の口縁部片である。14～17のうち16までが口縁部片で、いずれも五領が台式土器である。半載竹管による沈線が口縁部に施されている。17は、三角形沈刻文が施されており、14～16より新しい。



第63図 遺構外出土遺物拓影図



第64図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第64図 1	甕 土師器	A [18.2] B [ 7.6]	胴部中央以下欠損。胴部は内彎し、頸部はくびれる。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部は内・外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒、長石、バミス 明赤褐色 普通	P-179 10% E2b <sub>3</sub>
2	甕 土師器	A [16.2] B [ 6.4]	口縁部片。頸部はくびれ、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒、バミス、長石 明赤褐色 普通	P-181 5% E2d <sub>3</sub>
3	甕 土師器	A [18.0] B [ 5.1]	口縁部片。頸部はくびれ、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒、バミス 明赤褐色 普通	P-180 5% E2d <sub>3</sub>
4	甕 土師器	B [ 5.2] C 6.5	底部片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	胴部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒、バミス、長石 橙色 普通	P-182 20% E2b <sub>3</sub>

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第64図 5	鉢 土師器	B[5.7] C[11.8]	底部片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面へラ削り後へラナデ。内面放射状のへら磨き。	砂粒, パミス 橙色 普通	P-183 30% E2b <sub>3</sub>

図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
6	管状土錘	[4.2]	1.5	1.7	4.0	[11.3]	80	覆土中	DP-86
7	管状土錘	4.6	1.8	1.9	5.0	[15.6]	90	覆土中	DP-87

図版番号	器種	石質	法量(cm)			重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
8	石鉢	チャート	[2.2]	1.2	0.3	[0.2]	95	A3i <sub>a</sub>	Q-9

図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
9	煙管	[6.1]	1.1	0.1	1.0	[3.6]	50	SI-3覆土中	M-2

図版番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第62図 1	球状土錘	3.0	3.3	3.2	7.0	[30.8]	95	覆土中	DP-90
2	管状土錘	4.5	2.0	2.0	6.0	[16.1]	95	覆土中	DP-91
3	管状土錘	[3.6]	2.2	2.1	5.0	[16.3]	70	覆土中	DP-89

## 第3節 考 察

沢三木台遺跡から検出された遺構は出土遺物から、縄文時代、古墳時代、奈良時代に大別することができる。ここでは、検出された各時代の遺構や遺物をⅠ～Ⅲ期に区分し各期ごとにその特徴を述べ、若干の考察と検討を加えて行くことにする。

なお、集落については、道路幅という限定された範囲内の調査であり、集落の全容はとらえることができない。集落は、調査の結果や地形等から、さらに調査区外の北東側や北西側の台地の先端部付近にまで広がっていることが考えられる。

### Ⅰ 沢三木台遺跡における出土土器と住居跡の形態について

#### (Ⅰ) 各期の土器の様相

##### ○ 縄文時代

###### 沢三木台Ⅰ期

この期に伴う縄文時代の遺構は、今回の調査では確認されていない。出土した縄文式土器は、いずれも表土及び古墳時代や奈良時代の遺構の覆土内からのもので、早期後葉では野島式に比定されるもの、前期では黒浜式、浮島式に比定されるもの、中期では、五領ガ台式に比定される土器がいずれも破片の状態で出土している。

##### ○ 古墳時代後期

###### 沢三木台Ⅱ期（鬼高期）

古墳時代後期をそれぞれⅡA、ⅡB、ⅡC期と3期に分けた。各期の遺物の中で、普遍的に存在するものは甕と坏である。甕は量的に少ないことや器形を復元できたものが極少量であるので、形態の分類はしない。坏は各期における出土量が多量なことや、出土土器の中の器種の割合が40～50%をこえることなどから、その形態の分類を行い、坏を中心にⅡA～ⅡC期における出土土器と住居跡について考察を試みる。

###### 坏

a類 口縁部と体部の境に稜を有する。所謂須恵器の模倣坏が主体となる。底部は丸底である。

a-1類 体部は皿状を呈する。口縁部は直立する。整形技法は口縁部横ナデ、体部内面ヘラ磨きないしヘラナデ、外面ヘラ削り後ヘラナデが施されるもの。

a-2類 体部は皿状を呈する。口縁部は内傾する。整形技法は口縁部横ナデ、体部内面ヘラ磨きないしヘラナデ。外面ヘラ削り後ヘラナデが施されるもの。

a-3類 体部は皿状を呈する。口縁部は外反する。整形技法は、口縁部横ナデ、体部内面ヘラ磨きないしヘラナデ。外面ヘラ削り後ヘラナデが施されるもの。

b類 体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。底部は丸底と平底があるが丸底が多い。

b-1類 体部は、皿状を呈する。口縁部は直立する。整形技法は口縁部横ナデ、体部ヘラナデ、外面ヘラ削りないしヘラナデが施されるもの。

b-2類 体部は皿状を呈する。口縁部はやや内傾する。整形技法は口縁部横ナデ、体部内面ヘラナデ、外面ヘラ削りないしヘラナデが施されるもの。

b-3類 体部は皿状を呈する。口縁部はやや外傾する。整形技法は口縁部横ナデ、体部内面ヘラナデ、外面ヘラ削りないしヘラナデが施されるもの。

これらの坏や他の遺物について各期ごとに検討していく。(表中「1-12」と表記したものは第1号住居跡山土遺物の遺物番号1を表している。)

#### 沢三木台ⅡA期(鬼高1期)

当該期の出土土器は、土師器が中心で甕、甗、坏、鉢及び高坏等が出土している。須恵器は出土していない。第14・18号住居跡出土の土器を中心として設定した。

坏はa類のa-1・2類が出土し、b類はb-1・3類が出土している。坏の平均器高指数は、43である。体部内面の整形技法は、暗文状のヘラ磨きよりも異方向のヘラ磨きが多く、中には内・外面黒色処理が施されているものも見受けられる。

甕は、全体の器形を窺えるものは少ない。底部は、平底である。胴部は、胴部中央に最大径をもつ球形状を呈すると思われる。口縁部が「く」の字状に外反するものが存在する。整形技法は口縁部内・外面横ナデ、胴部内面はナデ、外面はヘラ削りをしているものが多い。甗は胴部が緩く内彎し、口縁部は外反している。底部は2孔式である。整形技法は、口縁部内・外面横ナデ、胴部外面ヘラ削り後ヘラナデ。

高坏は、脚が短く「ハ」の字状に開き、外稜を有している。整形技法は、口縁部内・外面横ナデ、体部外面ヘラ削り後ヘラナデ、脚部外面ヘラ磨きが施されている。内面に輪積痕が残るものが出土している。

#### 沢三木台ⅡB期(鬼高2期)

ⅡA期と同様土師器の甕、坏、鉢及び高坏が出土している。須恵器は出土していない。この期は第1・2・4号住居跡出土土器を中心として設定した。

坏は、a類はすべて出土している。b類はb-1類だけが出土している。坏の平均器高指数は36である。Ⅱ期よりも器高指数が低くなっている。坏の口径は、沢三木台ⅡA期よりも大きくなることが特徴である。ⅡA期と同様に内・外面に黒色処理の坏が見受けられる。

甕は、胴部が丸みを帯びた球状を呈し、口縁部が外反するものや短く外反するものが存在する。整形技法は、口縁部内・外面横ナデ、胴部外面ヘラ削り後ヘラナデであり A 期と形状には差が見受けられない。

高坏は脚部や坏部が出土し II A 期よりも脚部が長くなり赤彩されている。整形技法は脚部外面ヘラ磨きが施され、内面輪積痕が残るものが出土している。

#### 沢三木台 II C 期（鬼高 3 期）

II A・II B 期と同様に土師器の甕、坏及び鉢が出土しているが、II C 期においては須恵器の甕の口縁部片が出土している。この期は、第13号住居跡出土の土器を中心として設定した。

坏は丸底で、a 類、b 類とも全て出土している。坏の平均器高指数は30である。器高は時期ごとに低くなっている。坏の整形技法は II A・II B 期と変化はない。

甕は、やや長胴化してきている。

高坏は出土していない。

### ○ 奈良時代

#### 沢三木台 III 期

本期の住居跡は 5 軒検出されているが、出土遺物が少ないため土器を細別することができないが、5 軒の内比較的多く土器を出土した第17・19号住居跡の出土土器について述べたい。

第17号住居跡は土師器の出土が少なく、須恵器は、高台付坏で体部と底部の境に高台を貼り付けており、奈良時代前半の湖西古窯産<sup>(1)</sup>のもので、第19号住居跡より古い段階の土器と思われる。

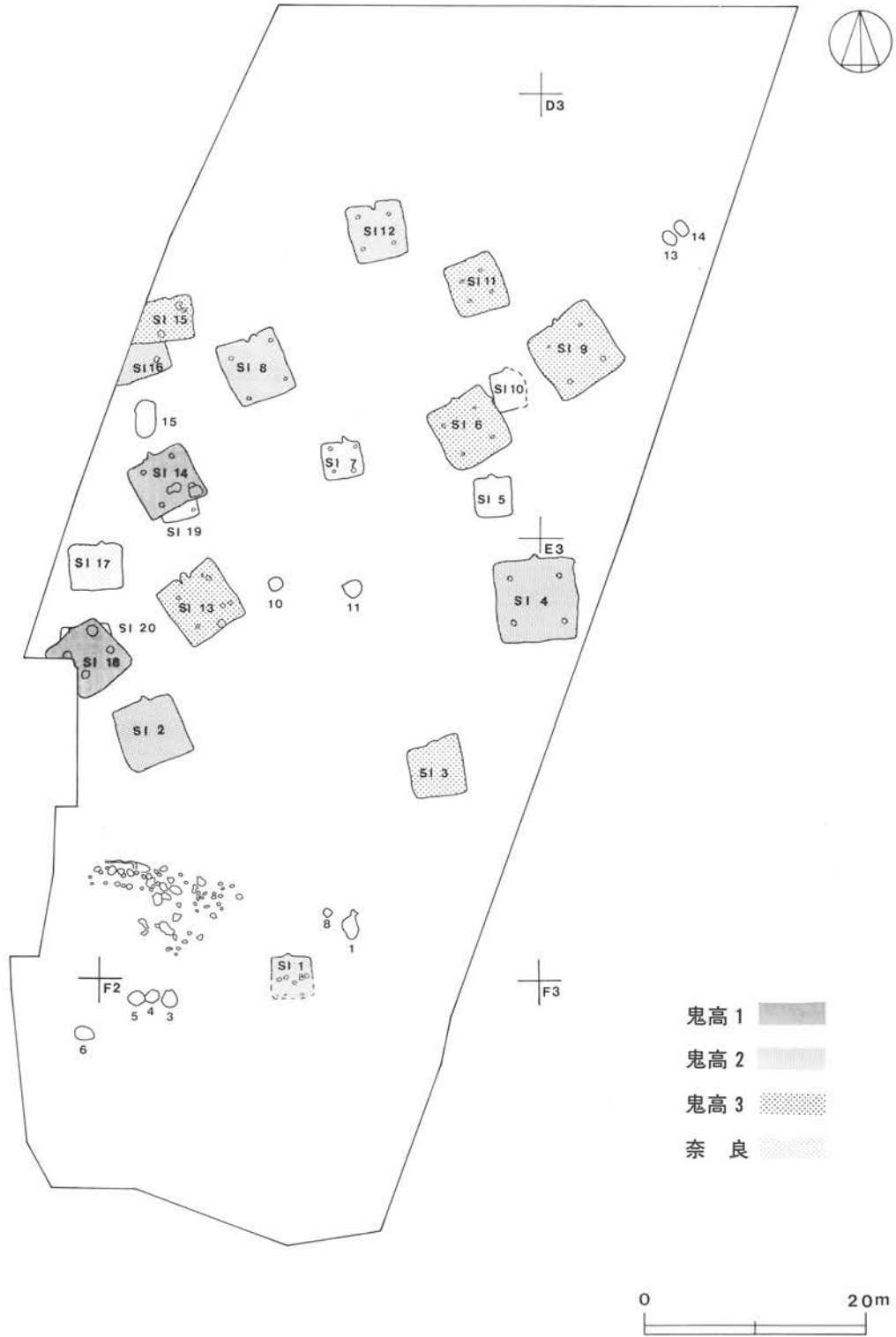
第19号住居跡からは、土師器の甕が出土し、甕は口唇部をつまみあげた後沈線をいれ、胴部外面下半部にはヘラ削り後ヘラナデを施す、所謂「常総型甕」である。須恵器は坏、蓋、浅鉢が出土している。坏は、第19号住居跡から体部が直線的に外傾するもの。蓋は天井部に平坦面を作り、口縁部にむかって緩やかに下降し、口縁端部が尖るもの。浅鉢は、底部が平底で、体部はやや外傾して立ち上がり口縁部は屈曲し、体部外面にタタキ目が見られる。奈良時代後半と考えられる。他の 3 軒の住居跡については、時期決定する遺物が出土しないが、住居跡の形態や配置等から第19号住居跡とほぼ同時期と思われる。

### (2) 各期の住居跡の形態

#### ○ 縄文時代

#### 沢三木台 I 期

この時期が当調査区に於いて、人間が生活を始めた最初の時期であると思われる。調査区内からは、本期の遺構は検出されていないが、早期～中期にかけての遺物が出土していることから、調査区外の北東側台地に当該期の遺構が存在する可能性も考えられる。



第65図 沢三木台遺跡遺構配置図

	a - 1	a - 2	a - 3	b - 1	b - 2	b - 3	伴出遺物						
鬼 高 1 期	 14-7	 14-6		 14-8		 18-8	 14-4	 18-3	 14-14	 18-14	 14-13	 18-12	
鬼 高 2 期	 1-6	 1-4	 1-9	 2-8			 2-1	 4-1	 2-9	 4-8	 1-15	 6-4	
鬼 高 3 期	 13-6	 13-8	 13-10	 9-7	 13-17	 13-16	 13-5				 13-20	 13-21	 13-22

S = 1/6

第66図 沢三木台遺跡鬼高期遺物集成図



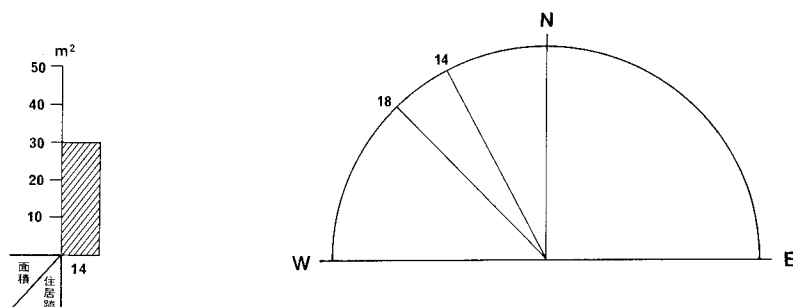
○ 古墳時代後期

沢三木台Ⅱ期（鬼高期）

当該期に属する住居跡は14軒（第1・2・3・4・6・8・9・11・12・13・14・15・16・18号住居跡）検出されている。これらの住居跡について出土遺物や重複関係などから、古墳時代後期をⅢ期（ⅡA，ⅡB，ⅡC）に区分し、各期毎の特徴について述べて行くことにする。

沢三木台ⅡA期（鬼高1期）

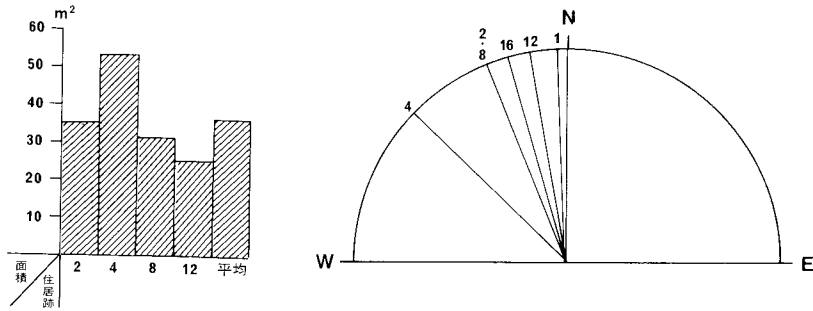
第14・18号の2軒の住居跡が当該期に属する。平面形は、方形又は長方形を呈し、一辺が5～6m程の中形住居跡が2軒である。主軸方向は、いずれも西にほぼ27°～40°傾く範囲に収まる。床面積は30.0m<sup>2</sup>である。支柱穴は基本的に4か所で、対角線上に規則的に配置されている。竈は北西壁側に付設されていることが特徴である。第14号住居跡には南西コーナーに貯蔵穴を有している。



第67図 沢三木台ⅡA期住居跡規模・主軸方向

沢三木台ⅡB期（鬼高2期）

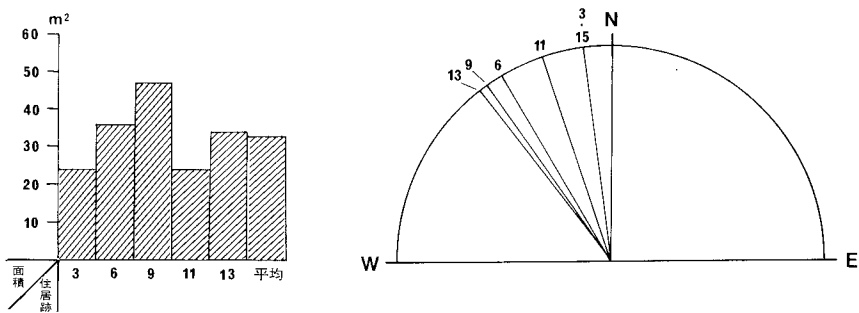
第1・2・4・8・12・16号の6軒の住居跡が当該期に属する。平面形はいずれも方形又は隅丸方形を呈し、一辺が7.0m程で床面積52m<sup>2</sup>の大形住居跡が1軒、一辺が5.0～6.0m程で床面積30.5m<sup>2</sup>の中形の住居跡が4軒、一辺4m程で床面積[15.2]m<sup>2</sup>の小形の住居跡が1軒であるが、第1号住居跡は南壁が斜面により削平されたため、本来はもっと大きなものと推定される。平均床面積は36.0m<sup>2</sup>である。主軸方向はいずれも西にほぼ2°～22°傾く範囲に収まる。支柱穴は基本的に4か所である。周溝が全周する住居跡は、第2・4・15号住居跡である。周溝が全周する住居跡は、ⅡA期にはなく、本期に存在している。これらの住居跡は、南東側の傾斜地を囲むように配置され、第1号住居跡は、南東側の傾斜地に他の住居跡と離れて配置されている。竈は北壁や北西壁に付設されている。第2号住居跡床面直上からは焼土が検出され、竈の東側から多量の砂が流れ出した状態で検出されている。時期は異なるが第17号住居跡の竈西側からも同様な状態で砂が検出されている。この砂は、竈周辺にあることから竈に関係するのではないかと考えられる。



第68図 沢三木台ⅡB期住居跡規模・主軸方向

### 沢三木台ⅡC期（鬼高3期）

第3・6・9・11・13・15号の6軒の住居跡が当該期に属する。平面形は方形ないし隅丸方形を呈するが、第15号住居跡は一部調査区外に延びるため長方形を呈していると推定される。規模は、一辺が7m程で床面積46.9m<sup>2</sup>の大形住居跡が1軒、5.0~6.0m程で床面積29.4m<sup>2</sup>の中形の住居跡が5軒で、小形の住居跡は認められない。平均床面積は、32.9m<sup>2</sup>であり、ⅡB期よりも狭くなっている。主軸方向は、いずれも西に8°~36°に傾く範囲に収まる。主柱穴は、基本的に4か所である。周溝は存在していない。竈は北壁や北西壁に付設している。これららの住居跡は南東側の傾斜地を囲むように配置されている。焼失家屋は1軒存在する。



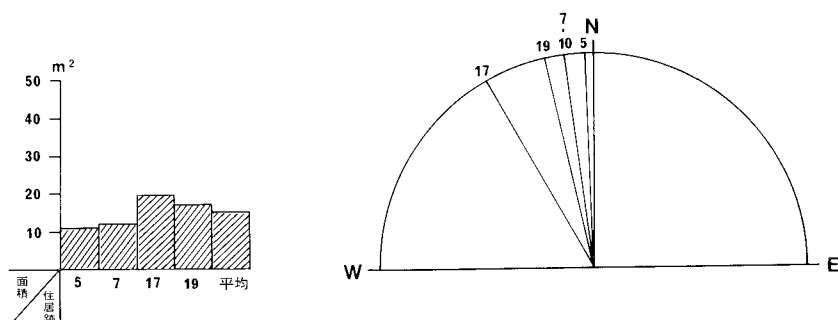
第69図 沢三木台ⅡC期住居跡規模・主軸方向

## ○ 奈良時代

### 沢三木台Ⅲ期

第5・7・10・17・19号の5軒の住居跡が当該期に属する。平面形はいずれも方形又は方形状を呈し、これらの住居跡は、一辺が3.5m程の小形住居跡である。平均床面積は、15m<sup>2</sup>であり、沢三木台遺跡の中では、最も狭くなっている。主軸方向は、10°以内で西に傾く範囲に収まる。第17号住居跡は一辺5m程の長方形を呈している住居跡で竈の付設が他の住居跡とは違い、中央からや

や東寄りに偏って付設されている。これらの住居跡は南東側の傾斜地を囲むように弧状に配置されている。



第70図 沢三木台Ⅲ期住居跡規模・主軸方向

### (3) 古墳時代後期（鬼高期）の鉾田町について

沢三木台遺跡における土器の様相ならびに住居跡の形態をⅠ～Ⅲ期に分けてその特徴を述べてきたが、当調査区からは、古墳時代後期の住居跡が14軒検出されているので、当遺跡は古墳時代後期に最も繁栄していたと考えられる。そこで鉾田町における古墳時代後期の遺跡からその概要を述べてみたい。古墳時代後期の遺跡は、昭和53年度に当教育財団が調査を実施した鹿島線関係の烟田遺跡<sup>(2)</sup>、埴遺跡<sup>(2)</sup>及び昨年度報告された烟田川波遺跡<sup>(3)</sup>がある。

烟田遺跡は、鹿島郡鉾田町大字烟田に所在し、烟田川波遺跡も、同様に鉾田町大字烟田に所在し、烟田遺跡とは、ほぼ100mしか離れていないためほぼ同一集落ととらえることができる。埴遺跡は、同郡鉾田町大字安房に所在している。

烟田川波・烟田遺跡は、沢三木台遺跡から、ほぼ東南東へ2km、埴遺跡は、ほぼ北東へ2.5km隔てて所在している。古墳時代後期の住居跡は、烟田遺跡からは32軒、烟田川波遺跡からは15軒、埴遺跡からは2軒が報告されている。

烟田遺跡の出土土器は、土師器が中心で甕、甗、坏、鉢及び高坏が出土し、烟田川波も同様の器種構成である。埴遺跡は遺構数がすくないため甕、甗及び鉢が出土しているだけで坏は出土していない。これらの住居跡に伴う多量の土師器の中で特に坏については、烟田遺跡では82個体、烟田川波遺跡では55個体、沢三木台遺跡では68個体が出土している。これらの坏について前述の形態に従い分類すると烟田遺跡は、全ての形態が出土し、b-1類(41.5%)が多く、a-3類(26.8%)、b-3類(13.4%)、a-1類(9.8%)、b-2類(4.9%)、a-2類(3.7%)の順で出土している。烟田川波遺跡でも全ての形態が出土し、a類はa-3類(32.7%)が多く、a-2類(23.6%)、b-1類(21.8%)、b-2類(9.1%)、a-1類(7.3%)、b-3類(5.5%)

と順に出土している。沢三木台遺跡については、b-1類(29.4%)、a-2類(26.5%)、a-1類(19.1%)、a-3類(14.7%)、b-3類(8.8%)、b-2類(1.5%)の順で出土している。これらの遺跡は、全ての形態が出土し、a類の坏では、沢三木台遺跡はa類の出土量が平均しており、畑田遺跡はa-2類、畑田川波遺跡ではa-1類の坏の割合が少ない。b類の坏では、沢三木台遺跡、畑田遺跡及び畑田川波遺跡からb-1類が多く出土し、b-3類、b-2類の割合が少ない。

また、畑田遺跡からは32軒中5軒(第9・10・23・24・37号住居跡)から石製模造品が出土している。畑田川波遺跡は、15軒の中で第15号住居跡から石製模造品と須恵器の高坏が出土している。この須恵器の高坏は中村編年<sup>(4)</sup>によるとI形式の3段階という古い段階の様相を示している。一応の目安としての年代については、坏の形態の変遷や須恵器の編年から沢三木台遺跡の年代は、沢三木台II A期は6世紀前葉、沢三木台II B期は6世紀中葉、沢三木台II C期は6世紀後葉頃と考えられる。畑田・畑田川波遺跡の初源は、5世紀後葉から6世紀前葉と考えられるため沢三木台遺跡より集落としての始まりは古いものと推定される。

なお、埴遺跡の第3号住居跡出土土器は、沢三木台II A期とほぼ同時期と思われ、畑田川波遺跡では鬼高II期と報告されたものは沢三木台遺跡のII A期と同時期と考えられる。

銚田町における古墳時代後期の時期について述べてきたが、限られた調査範囲であり、出土遺物等も限られているため今後の類例を待ち、さらに再検討を加えて行かなければならない。

以上、沢三木台遺跡は、古墳時代後期前半にはこの地が最も栄え大きな集落を形成し、その後一時期集落の断絶を経て奈良時代に再び集落が形成されたものと思われる。

#### 引用・参考文献

- (1) 静岡県湖西市「大沢第4・5地点遺跡発掘調査報告書」1985年
- (2) 茨城県教育財団「畑田遺跡他」 茨城県教育財団文化財調査報告VI 1980年
- (3) 茨城県教育財団「畑田川波遺跡 畑田城跡」茨城県教育財団文化財調査報告第68集1990年
- (4) 中村浩「和泉陶邑窯の研究」柏書房 1981年

## 結 語

主要地方道水戸鉾田佐原線道路改良工事に伴い、鉾田町に所在する沢三木台遺跡、餓鬼塚の発掘調査は昭和61年7月から同年10月にかけて実施された。

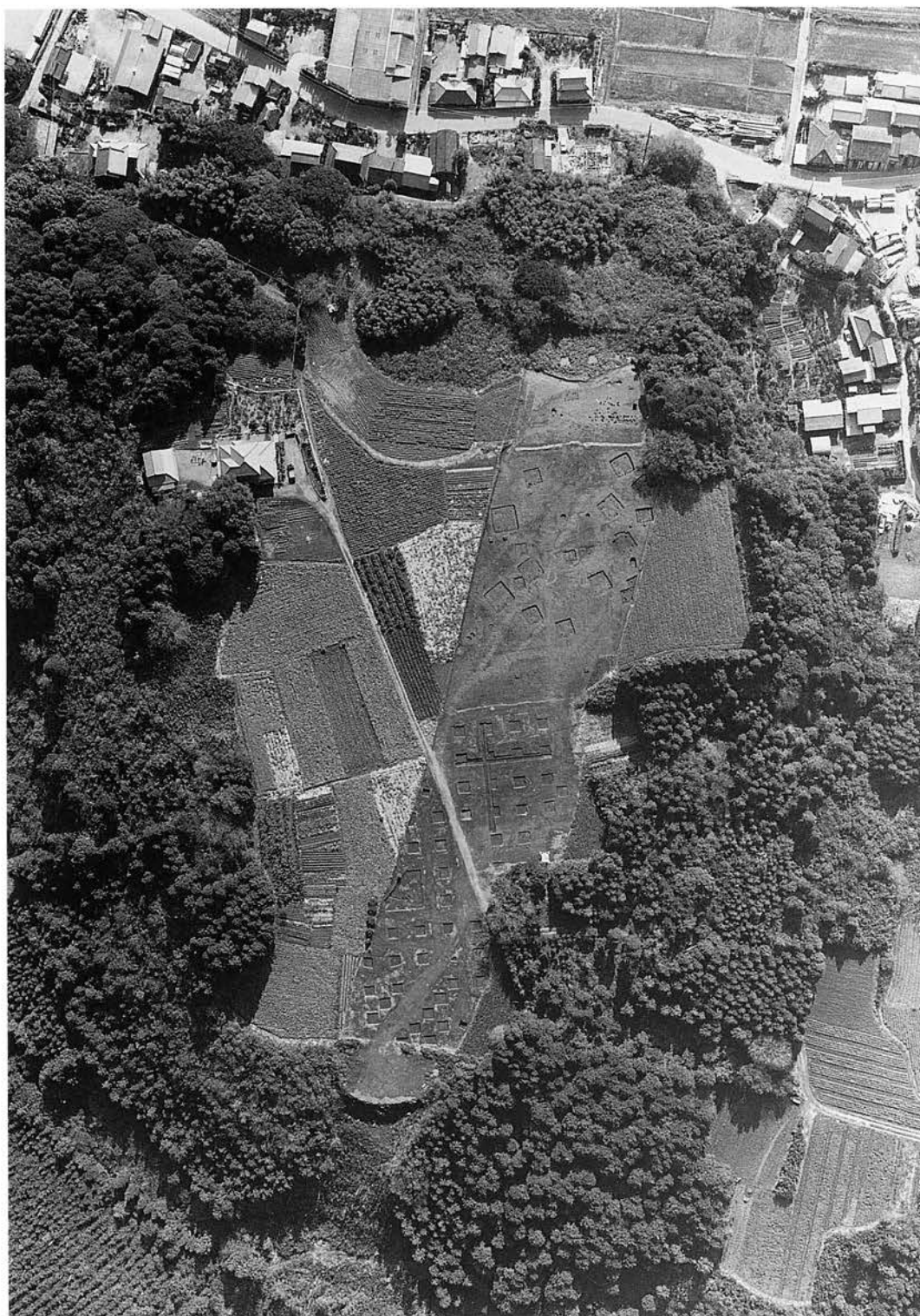
調査の結果、餓鬼塚からは、部分的な堀1条が検出されるのみで、遺物もほとんど出土しなかった。沢三木台遺跡からは、古墳時代後期から奈良時代の竪穴住居跡20軒、土坑15基、ピット群1か所が検出された。古墳時代の遺構は、後期（鬼高期）の住居跡が中心ですべてに竈が付設されている。遺物は、土師器を中心にして、僅かに須恵器が出土している。第13号住居跡出土の一括資料は、この期の器種構成を示唆するものと考えられる。

奈良時代の遺構は、攪乱を受け不明な点も多いが、第17号住居跡が、他の住居跡の形態と相違することなどが上げられる。遺物についても、この住居跡から高台付坏が出土し、胎土や整形技法等から在地の須恵器ではなく、東海系の湖西古窯の須恵器であることから当時の文化交流の一端について知ることができた。

今回の調査は、道路幅という限定された範囲の調査であったが、古墳時代後期から奈良時代の集落跡を検出できたことや数少ない遺物の中から、当時の文化交流について確認できたことなど一応の調査成果を上げることができた。本報告書が鉾田町ならびに鹿行地方の歴史を解明するための研究資料として活用されれば幸いである。

なお、本報告書をまとめるにあたり、鉾田町教育委員会をはじめ、関係各位から多くの御指導、御協力を頂いたことに対し、心から感謝の意を表したい。

# 写 真 图 版



遺跡遠景（沢三木台遺跡）

PL2



餓鬼塚調査前全景



試掘（南）



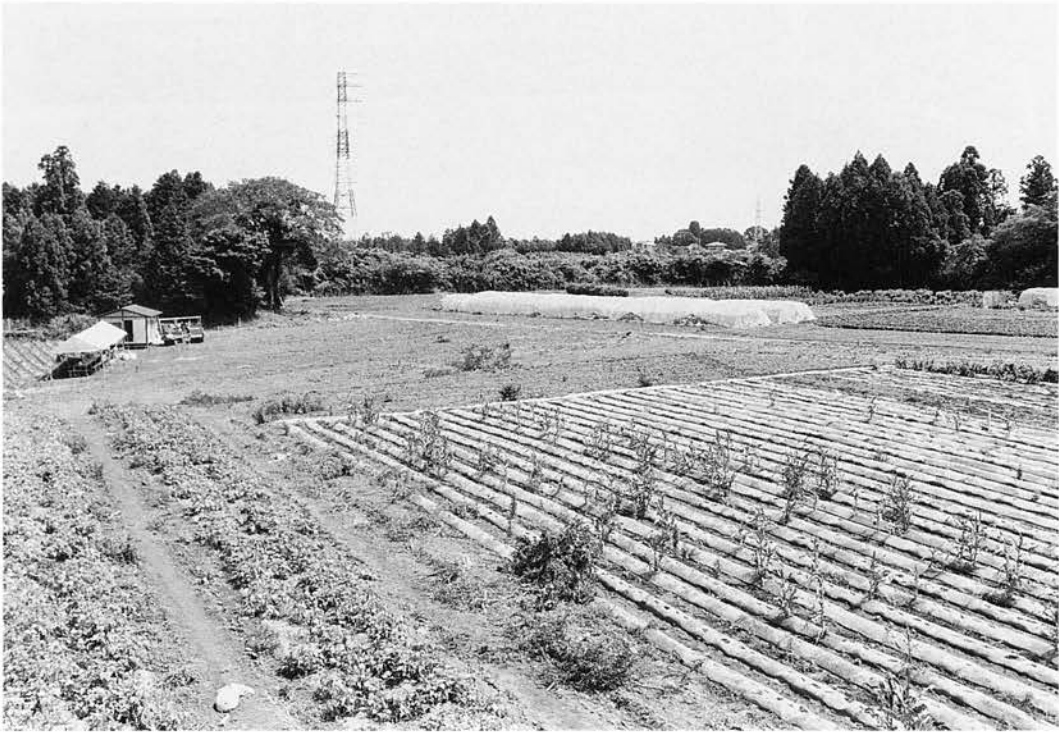


第1号掘土層セレクション



第1号掘完堀

PL4



沢三木台遺跡調査前全景

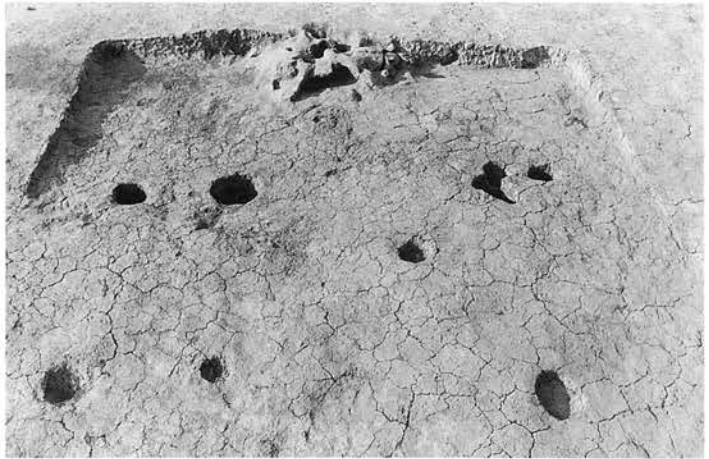


試 掘



谷部試掘

第1号住居跡  
完掘



第1号住居跡  
遺物出土状況



第2号住居跡  
完掘



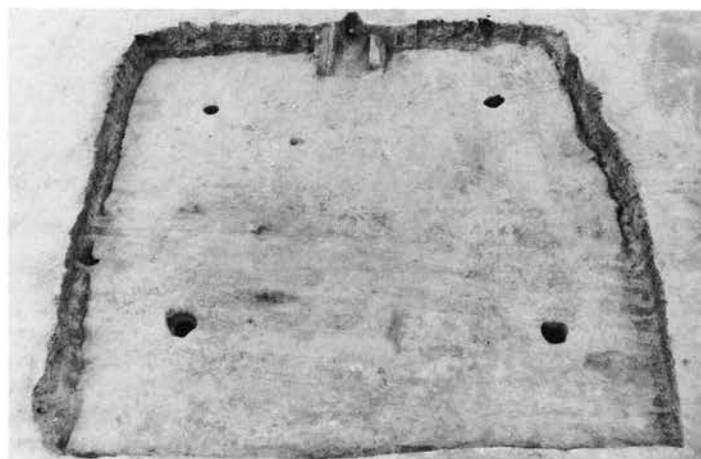
PL6



第2号住居跡  
遺物出土状況

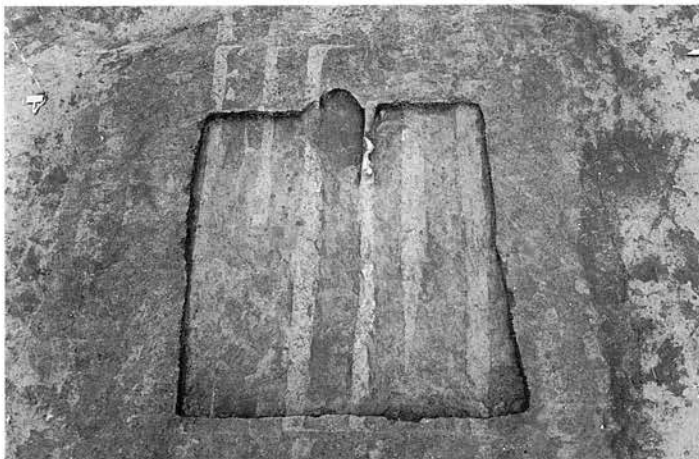


第3号住居跡  
完掘

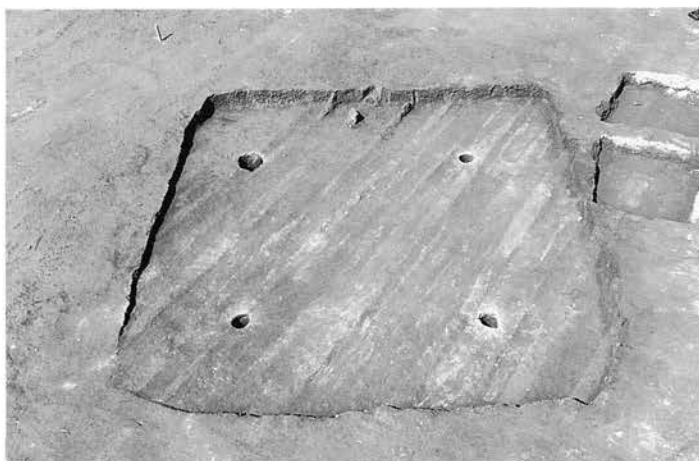


第4号住居跡  
完掘

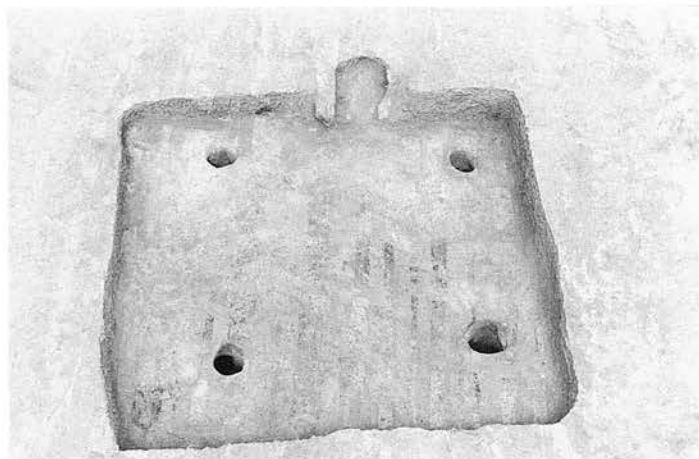
第5号住居跡  
完掘



第6号住居跡  
完掘

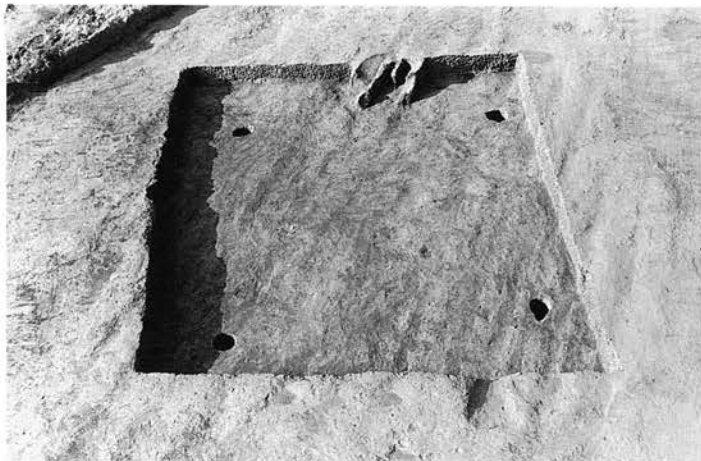


第7号住居跡  
完掘

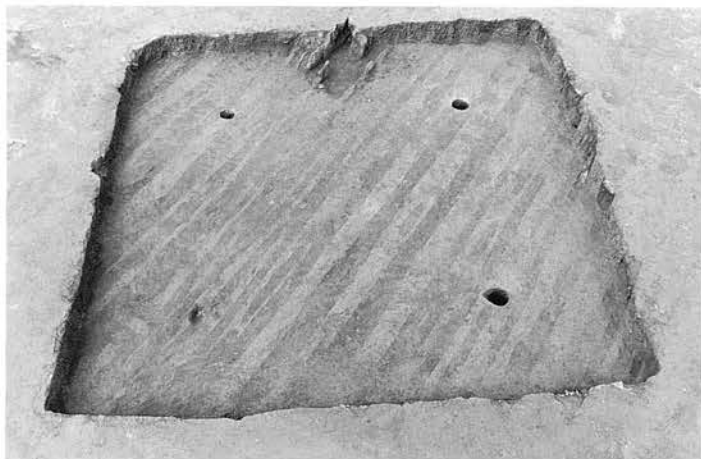




PL8



第8号住居跡  
完 掘

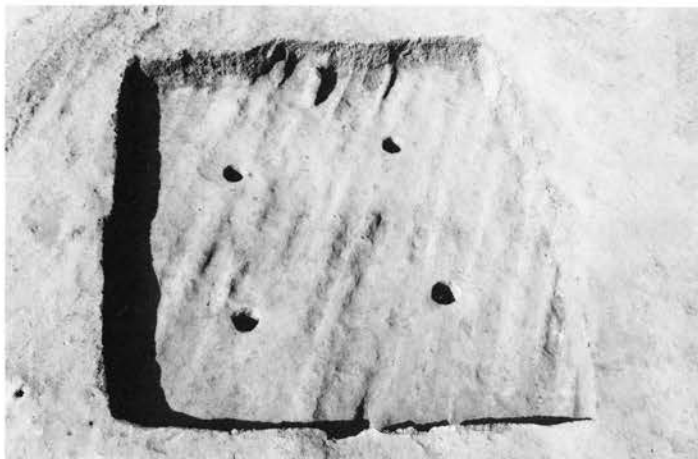


第9号住居跡  
完 掘

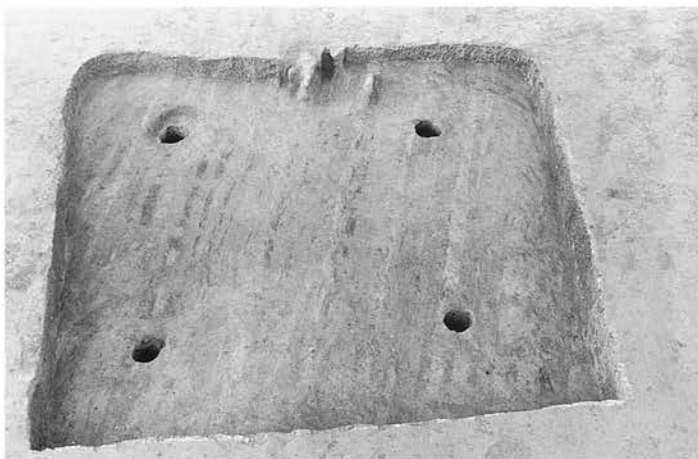


第10号住居跡  
完 掘

第11号住居跡  
完 掘



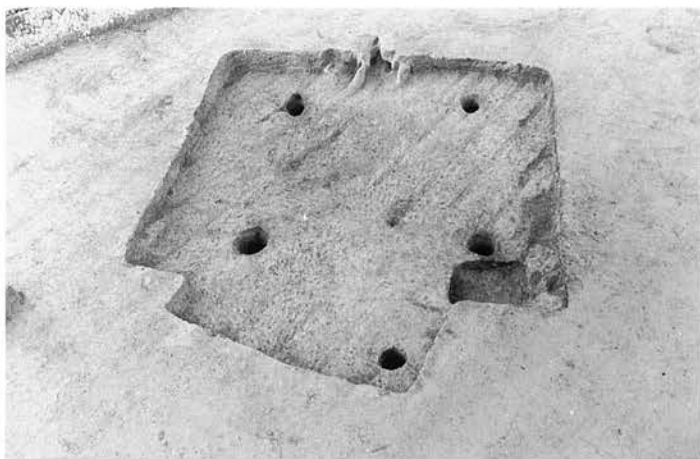
第12号住居跡  
完 掘



第13号住居跡  
完 掘



PL10



第14・19号住居跡  
完 堀



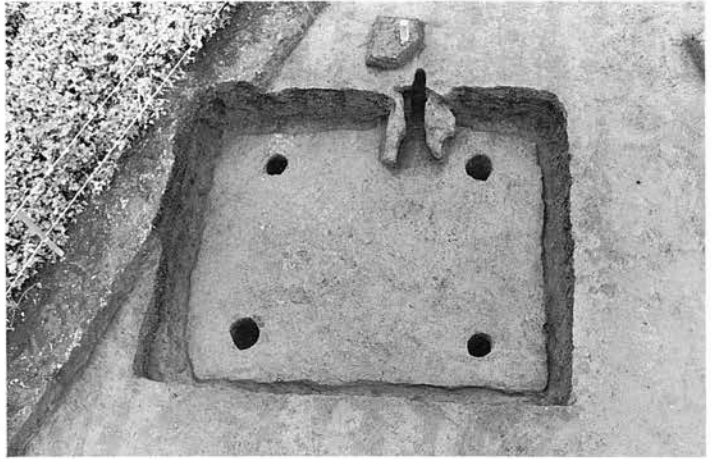
第14号住居跡  
竈土層セクション



第15・16号住居跡  
完 堀



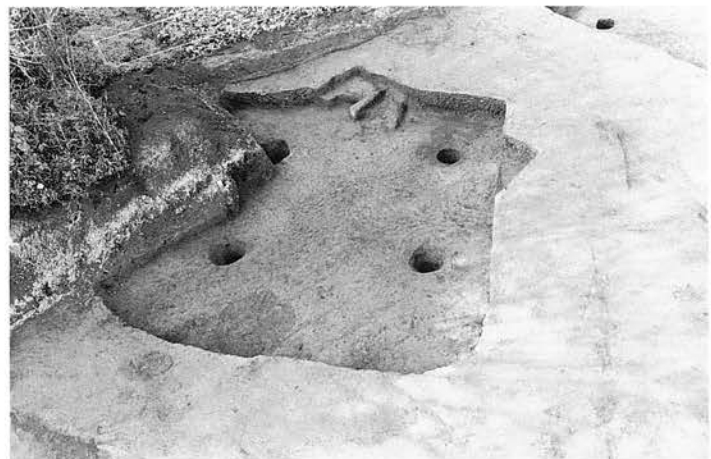
第17号住居跡  
完掘



第17号住居跡  
遺物出土状況



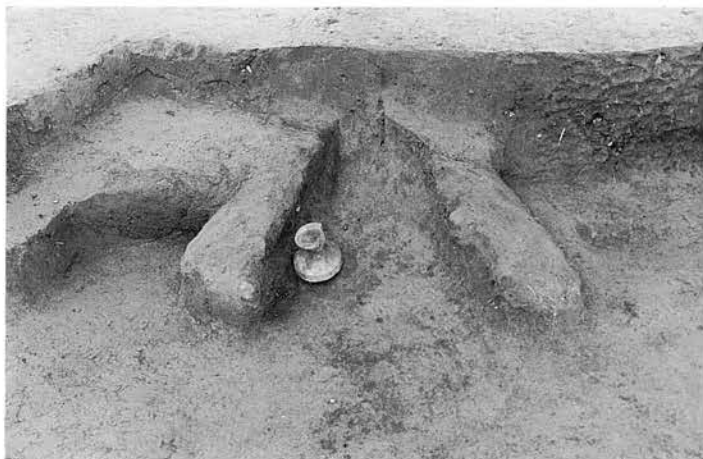
第18・20号住居跡  
完掘



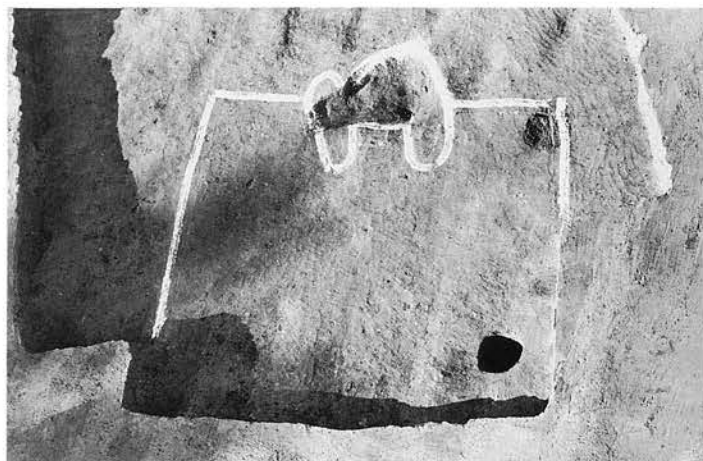
PL12



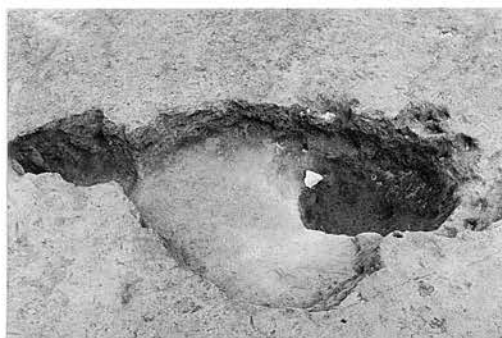
第18号住居跡  
竈土層セレクション



第18号住居跡  
遺物出土状況



第19号住居跡  
完 掘



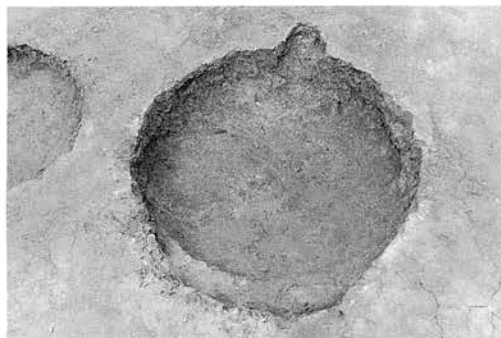
第1 A・B号土坑完掘



第2号土坑完掘



第2号土坑遺物(貝)出土状況



第3号土坑完掘



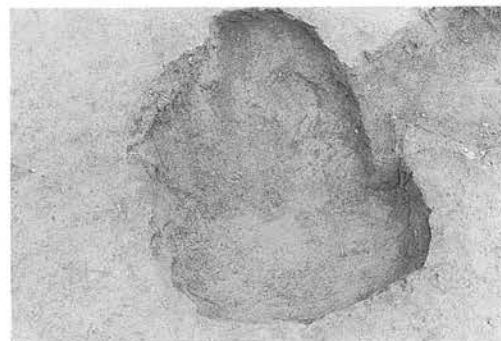
第4号土坑完掘



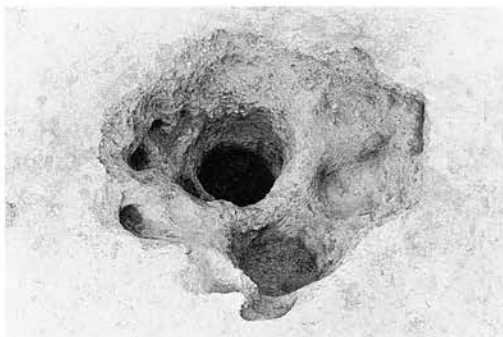
第5号土坑完掘



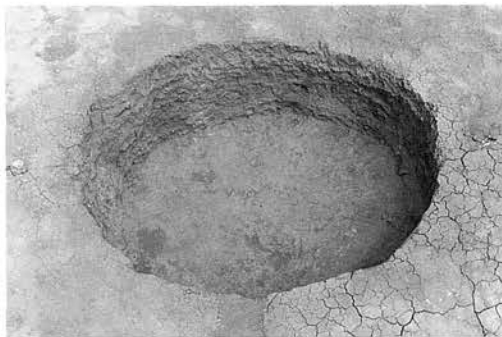
第6号土坑土層セレクション



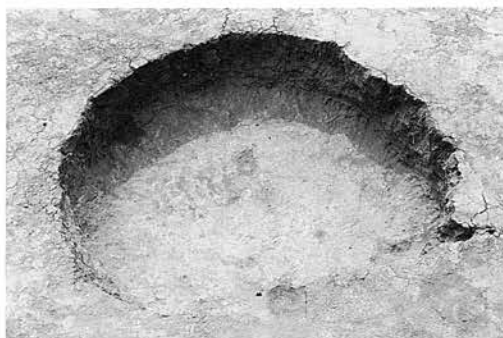
第7号土坑完掘



第9号土坑完堀



第10号土坑完堀



第11号土坑完堀



第13号土坑土層セクション



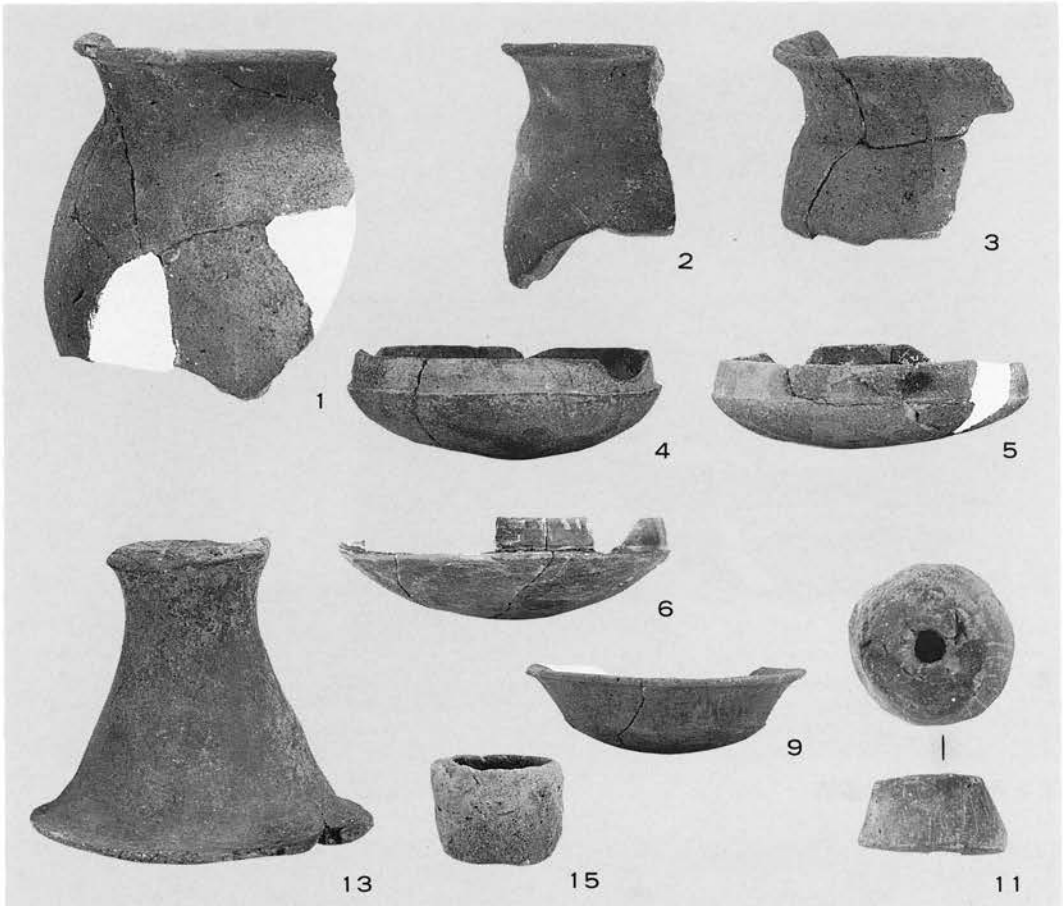
第14号土坑土層セクション



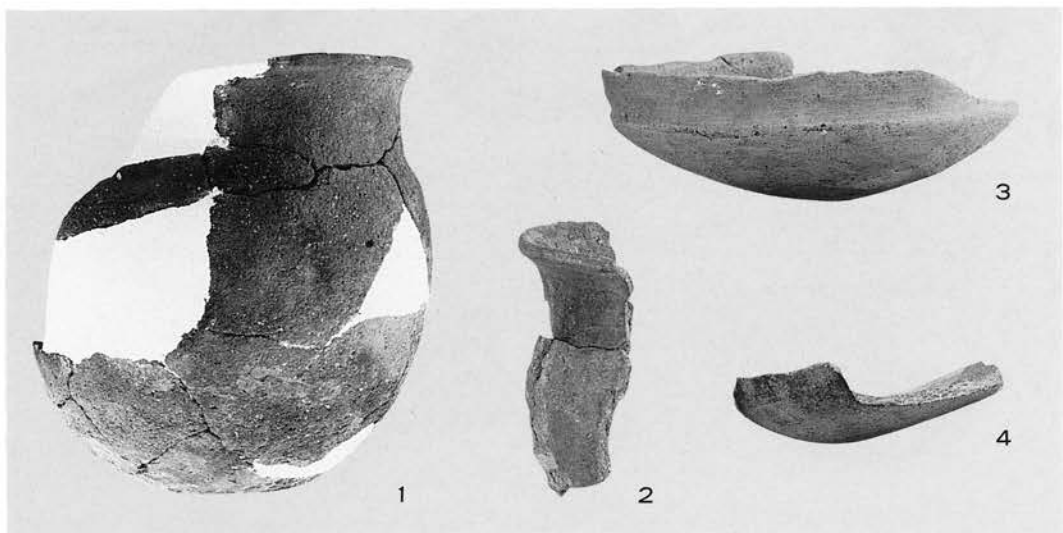
第15号土坑完堀



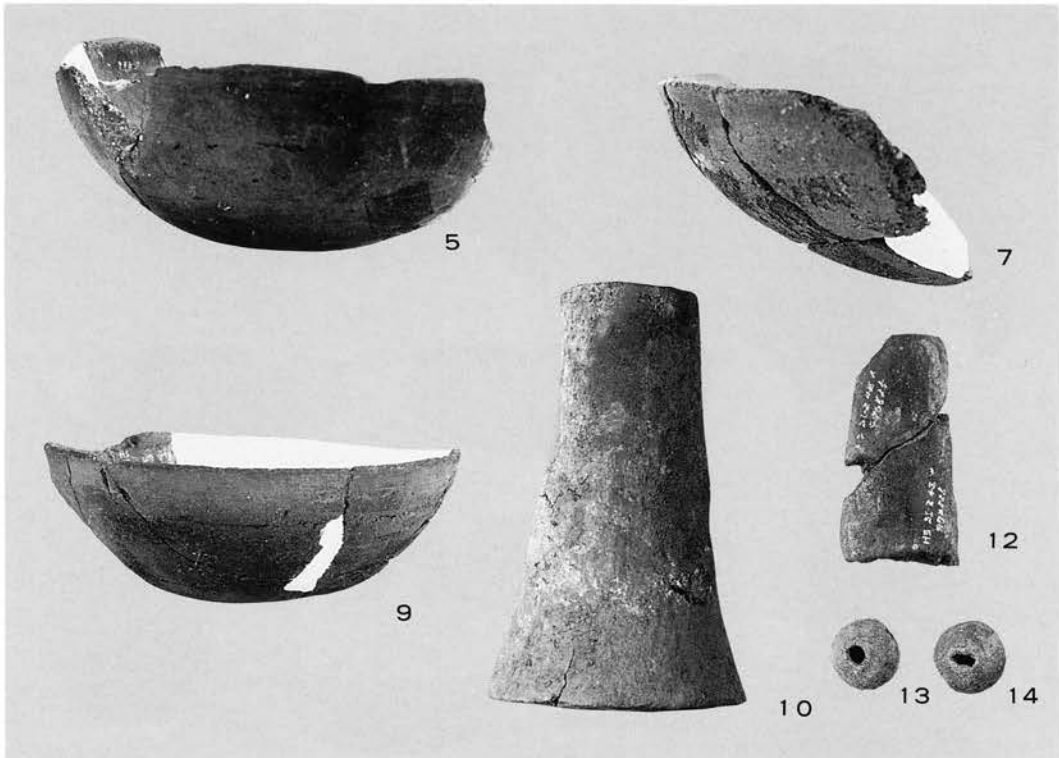
ビット群



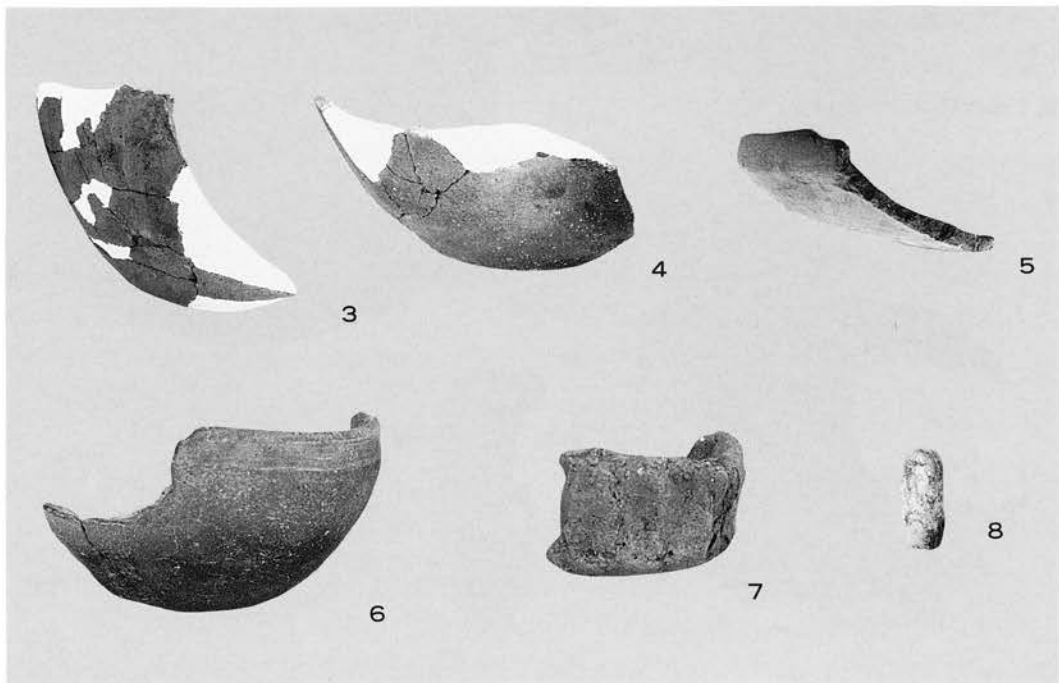
第1号住居跡出土遺物



第2号住居跡出土遺物

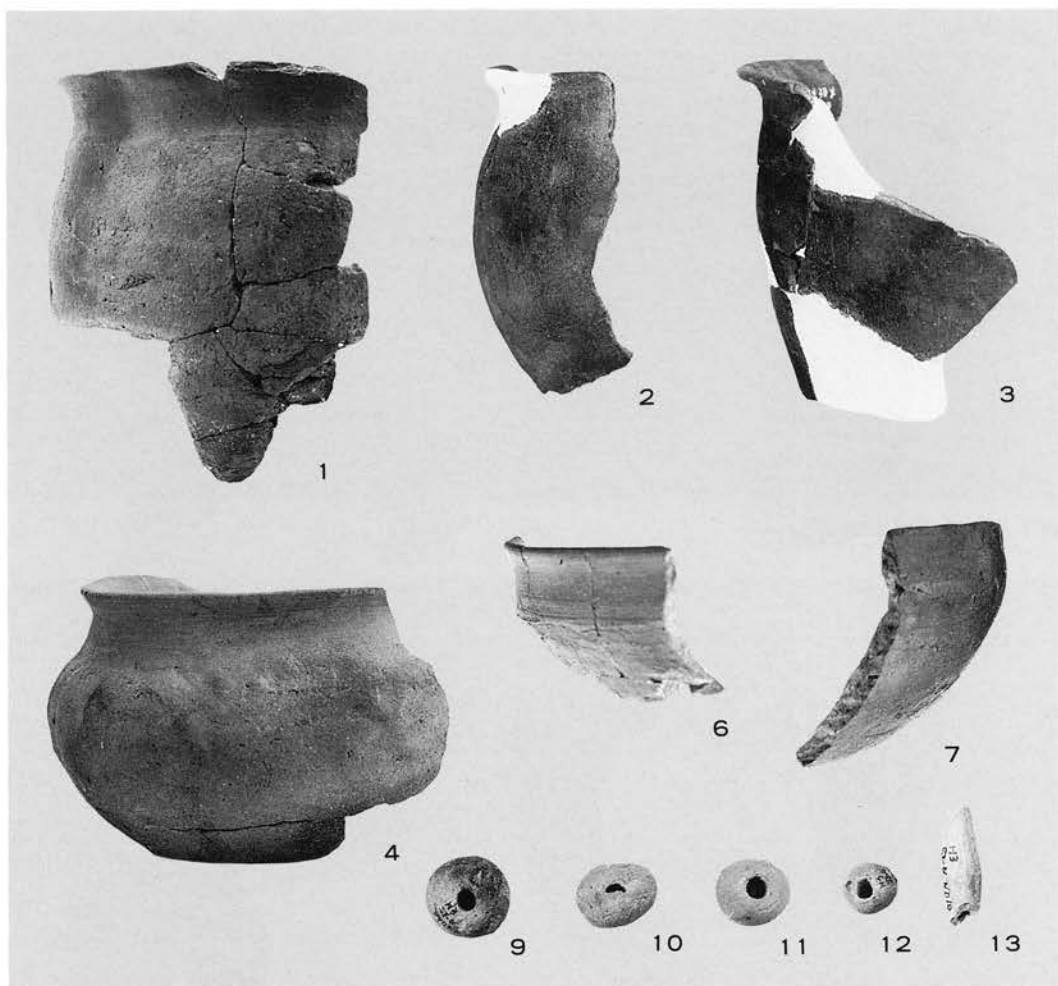


第2号住居跡出土遺物

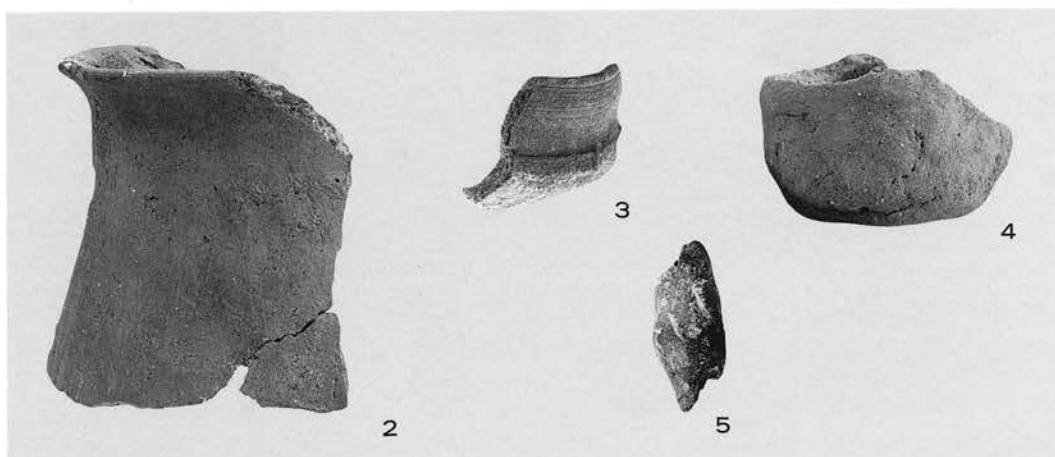


第3号住居跡出土遺物

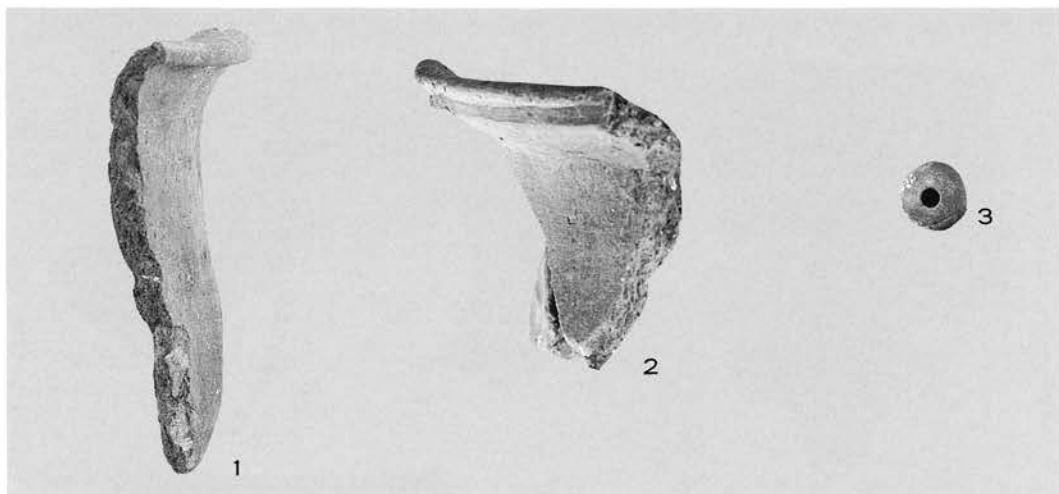




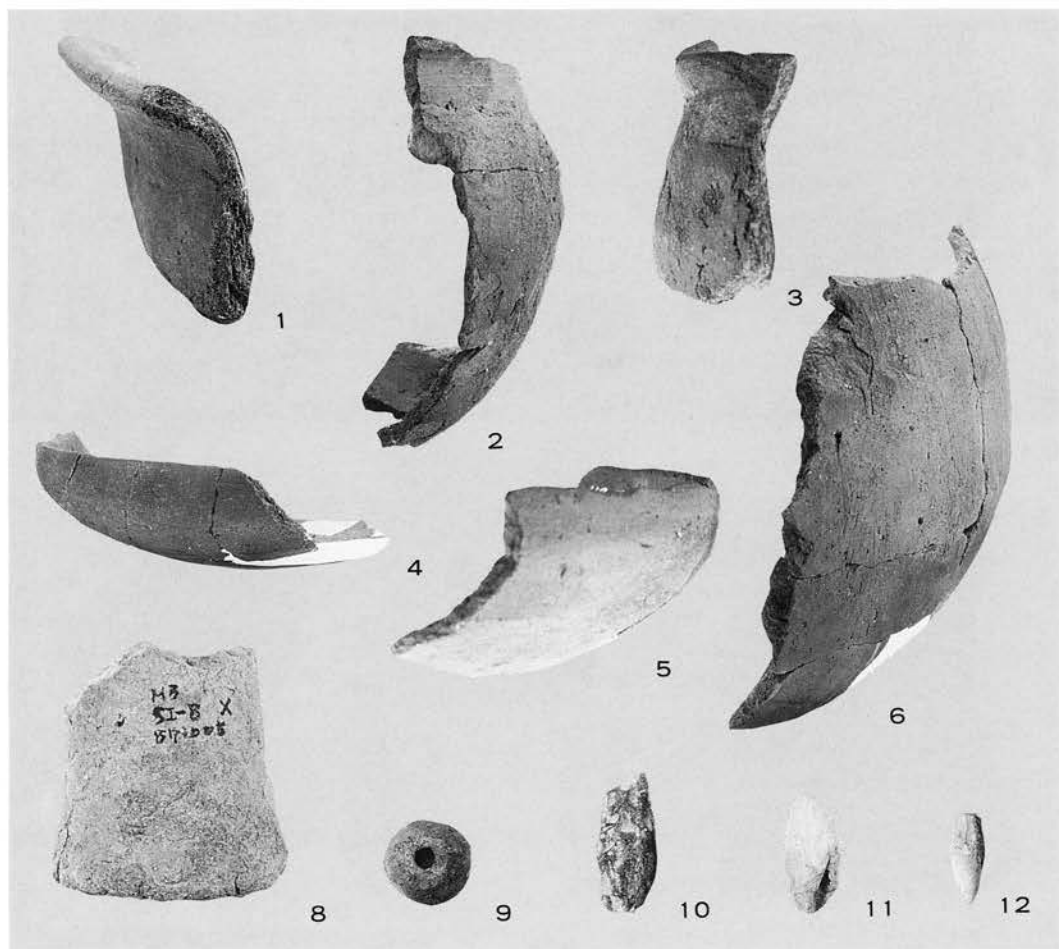
第4号住居跡出土遺物



第6号住居跡出土遺物

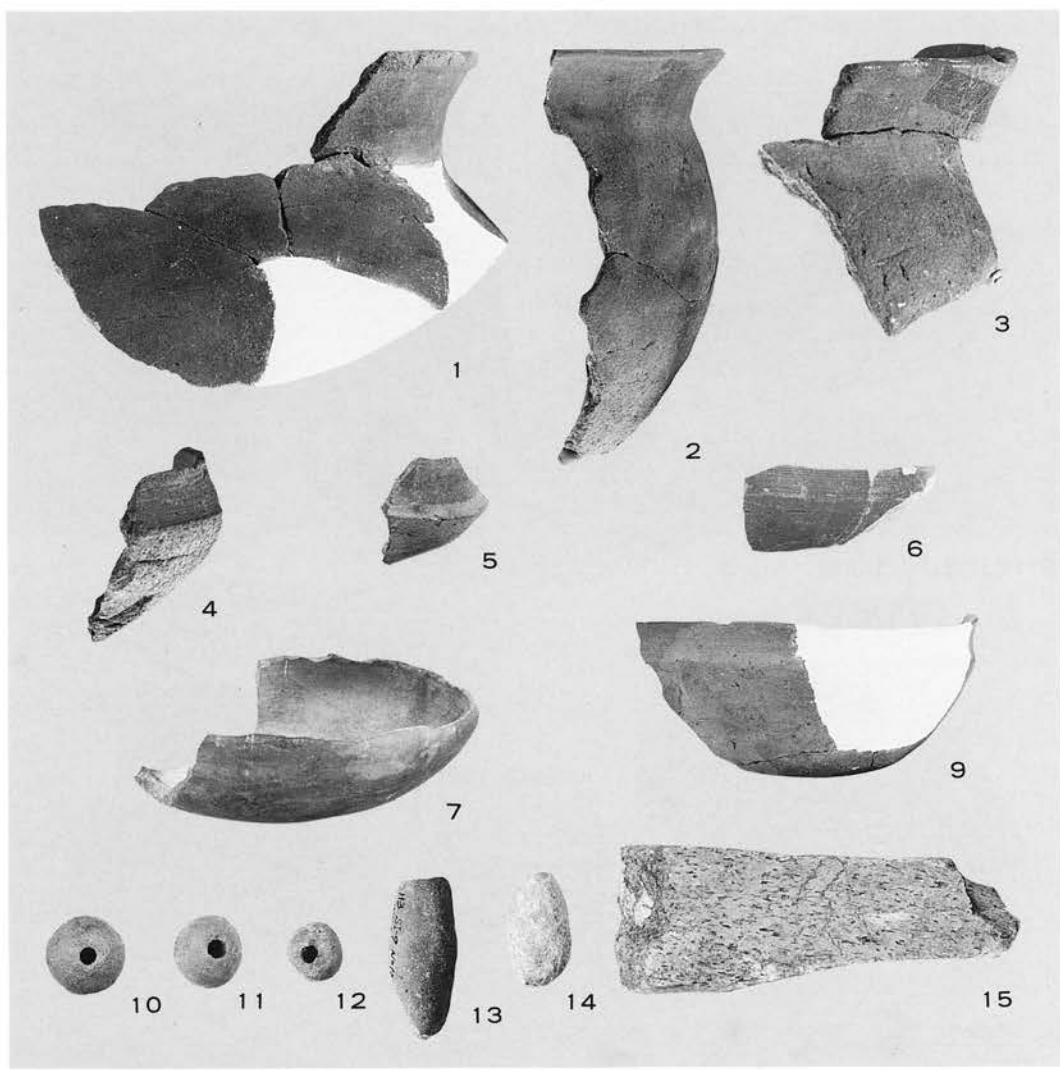


第7号住居跡出土遺物

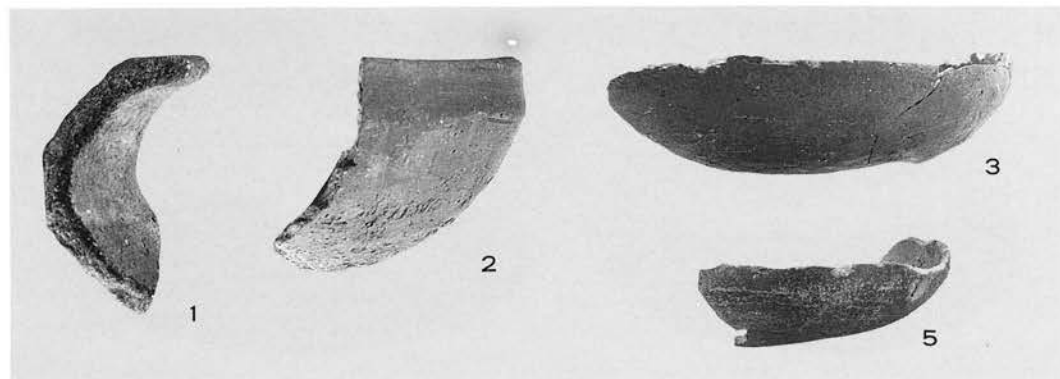


第8号住居跡出土遺物

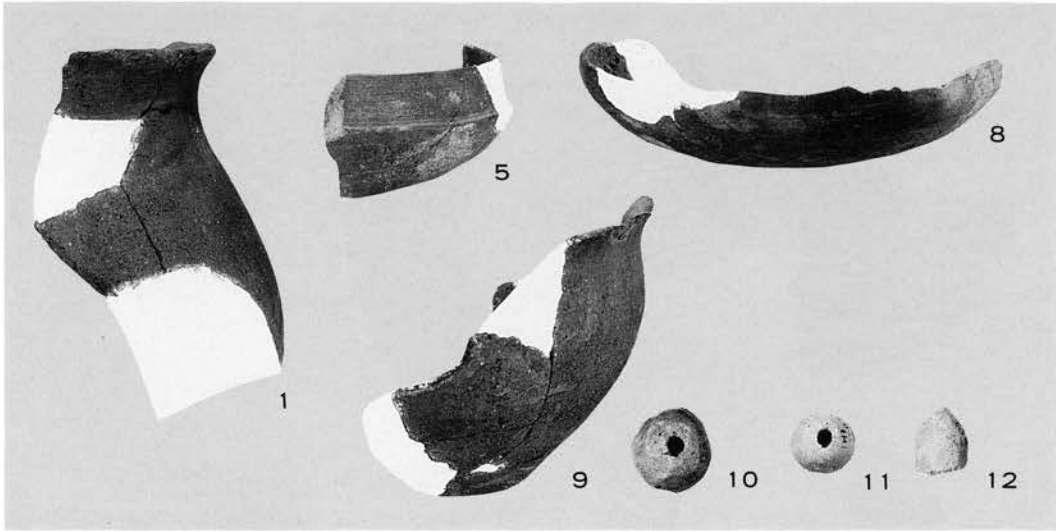




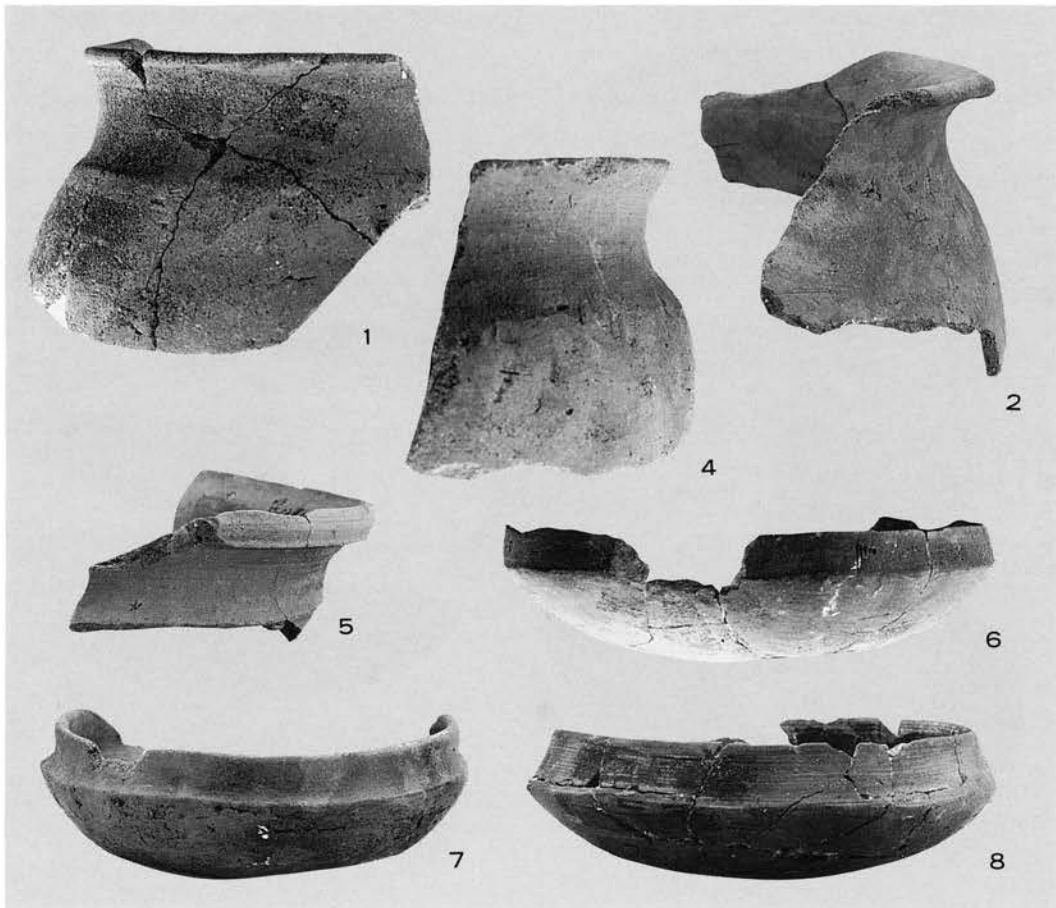
第9号住居跡出土遺物



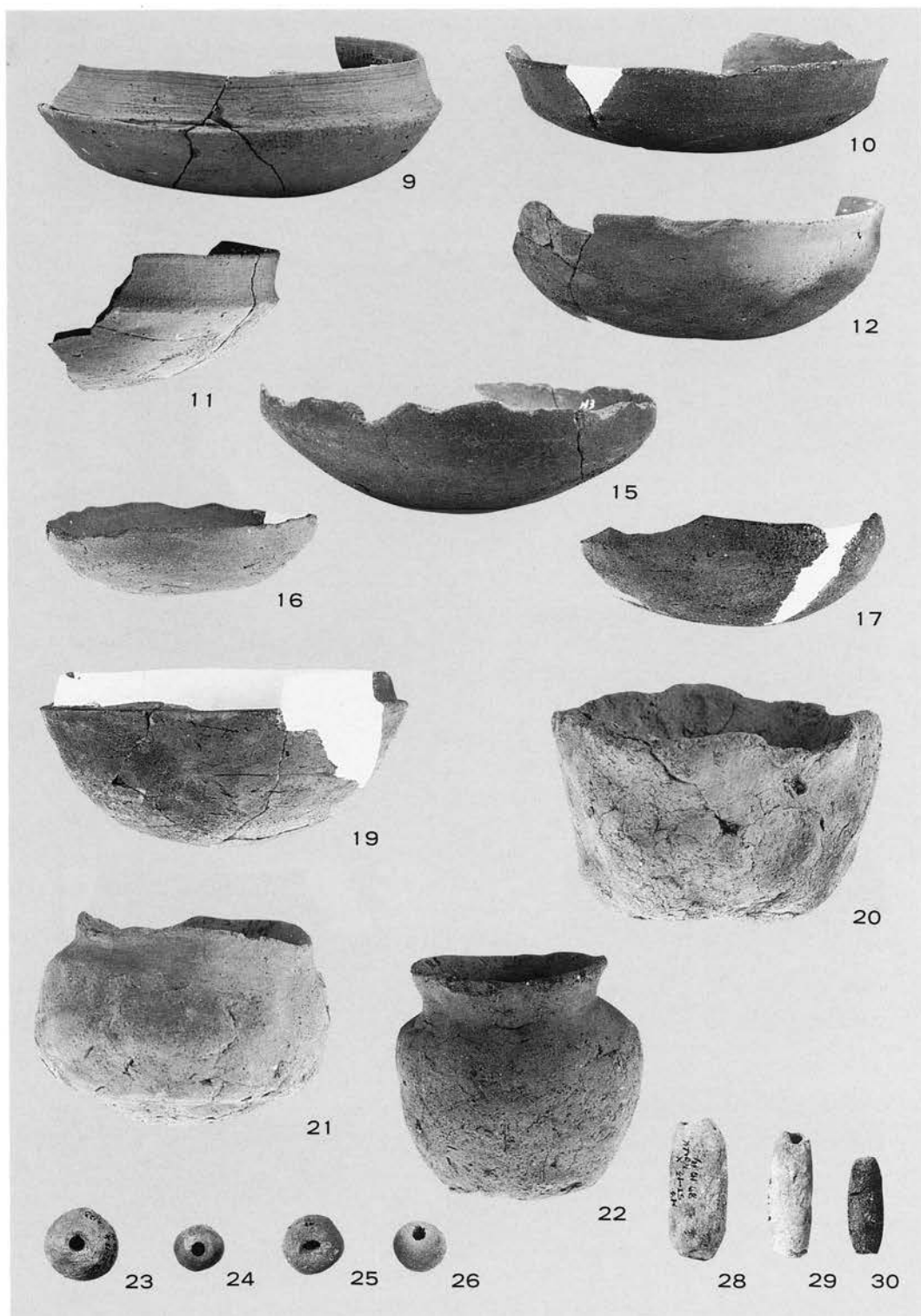
第11号住居跡出土遺物



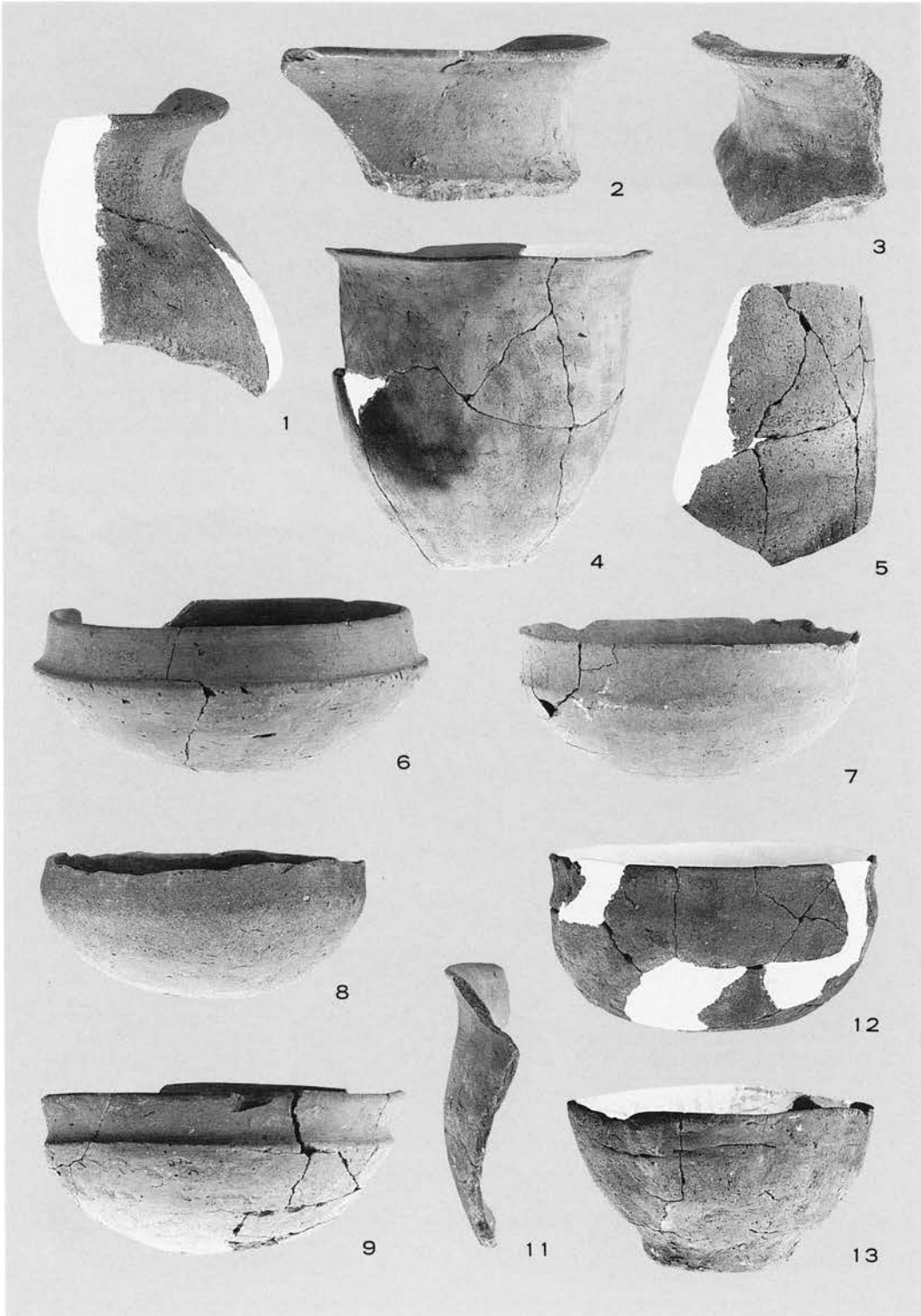
第12号住居跡出土遺物



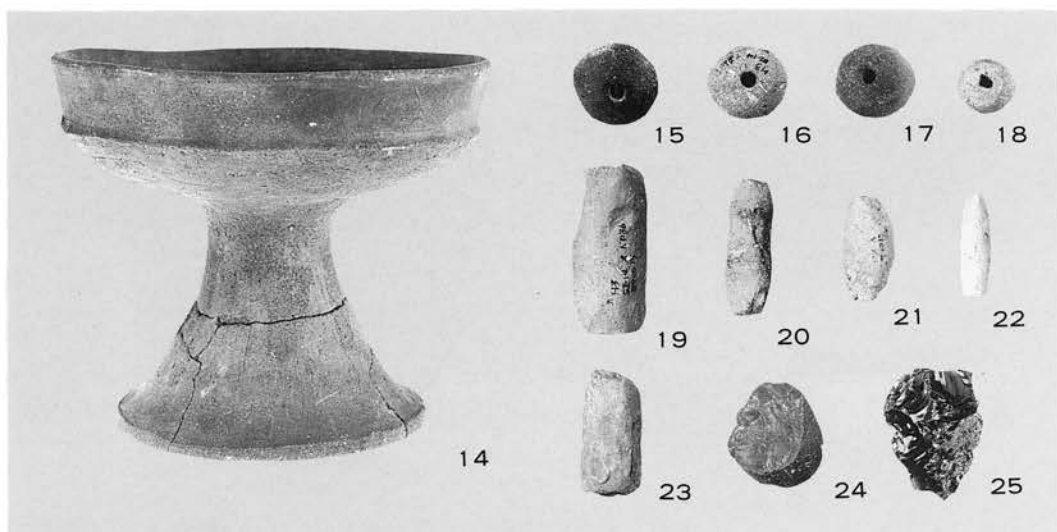
第13号住居跡出土遺物



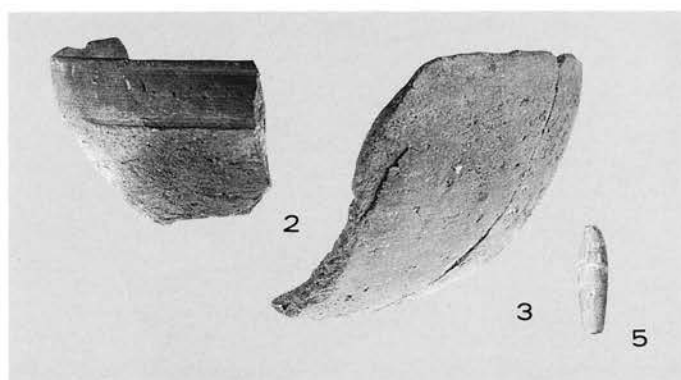
第13号住居跡出土遺物



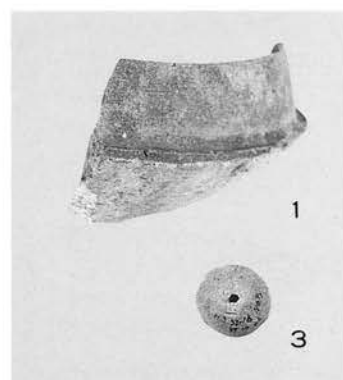
第14号住居跡出土遺物



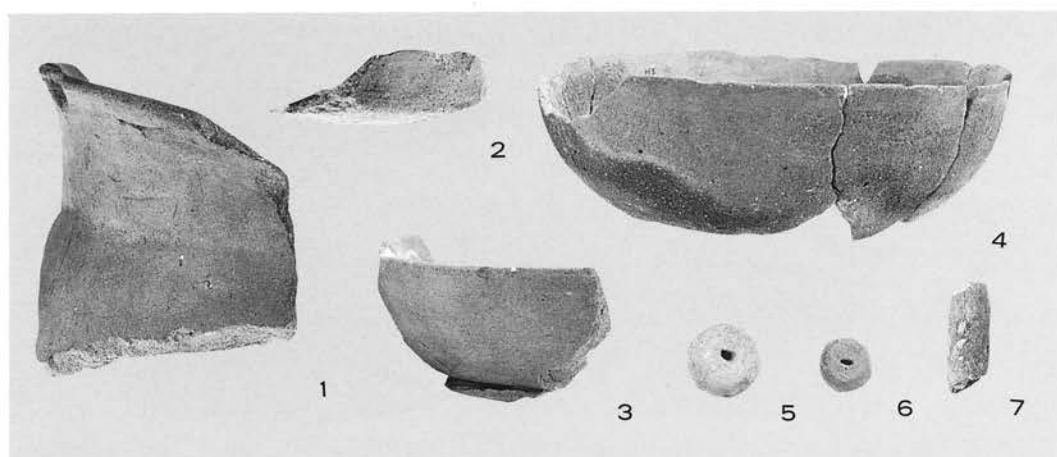
第14号住居跡出土遺物



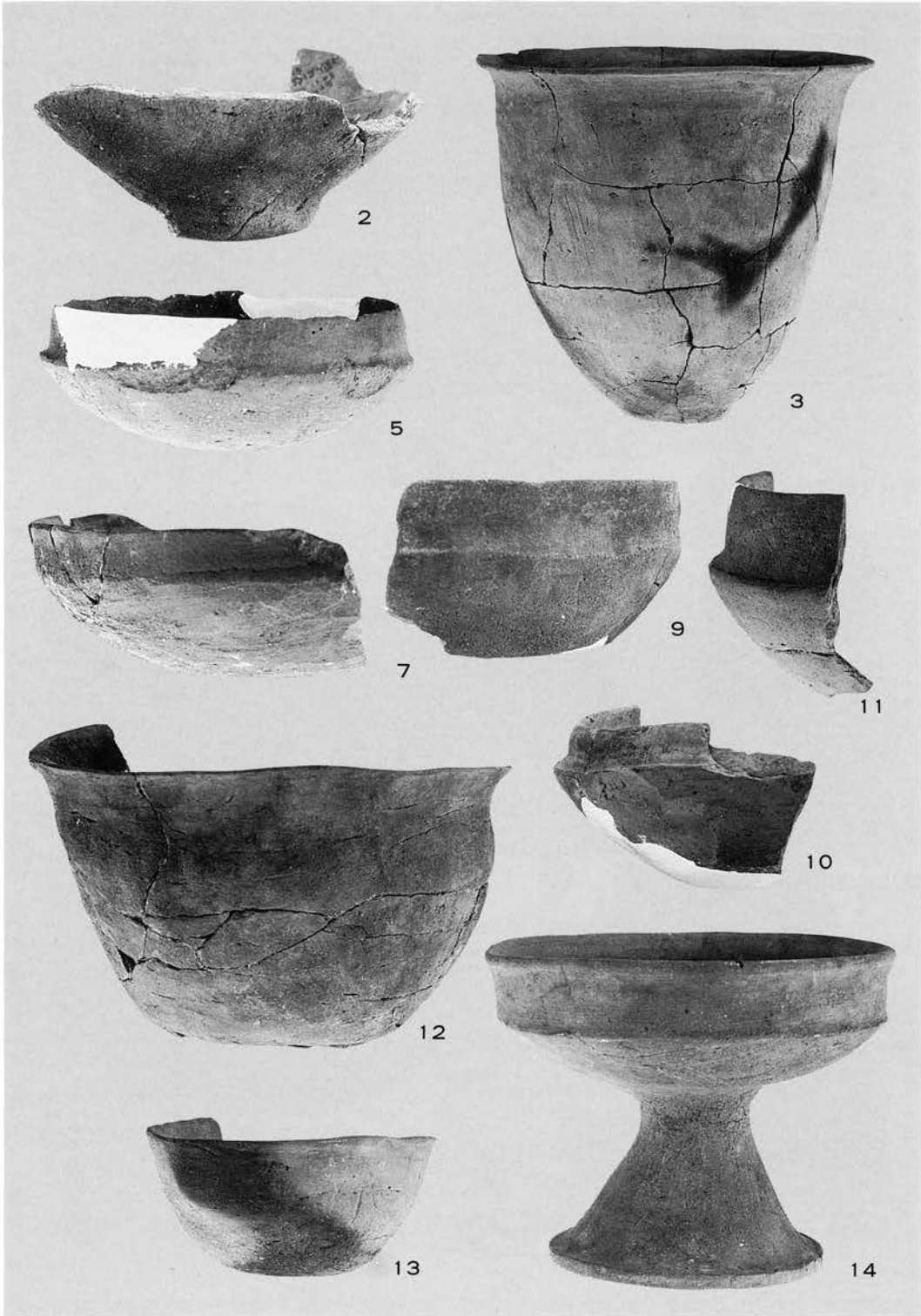
第15号住居跡出土遺物



第16号住居跡出土遺物

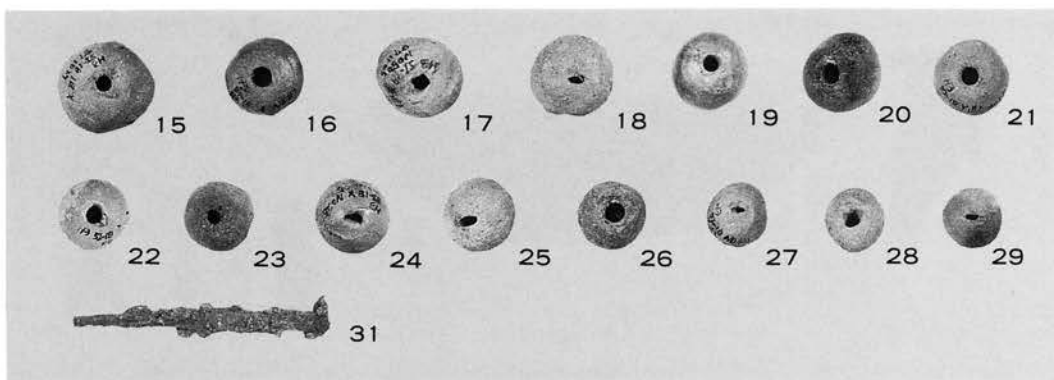


第17号住居跡出土遺物



第18号住居跡出土遺物

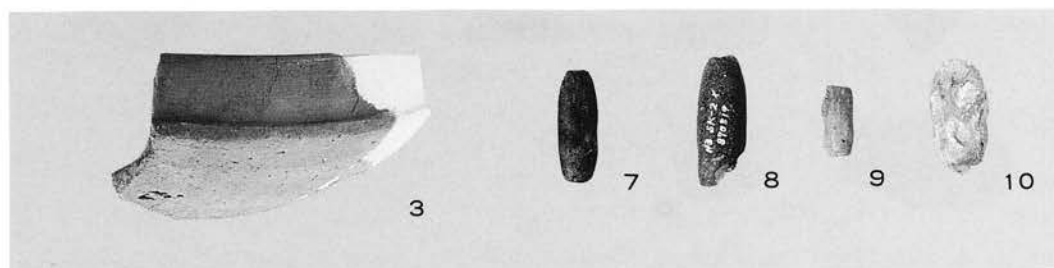




第18号住居跡出土遺物

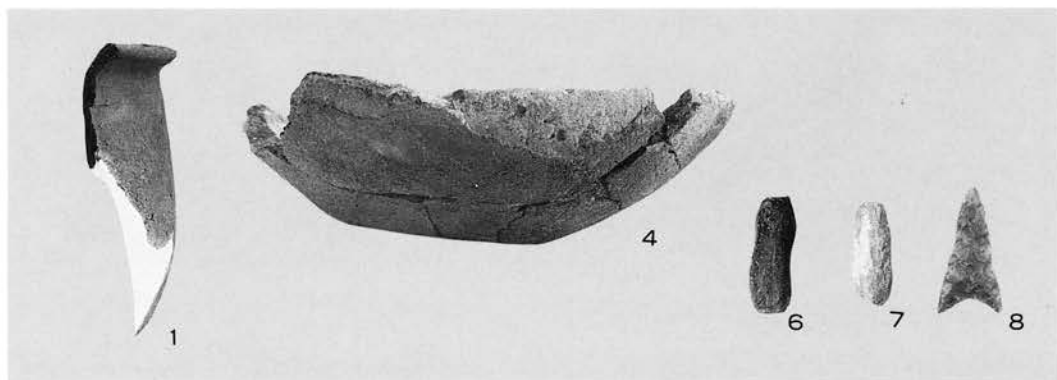


第19号住居跡出土遺物

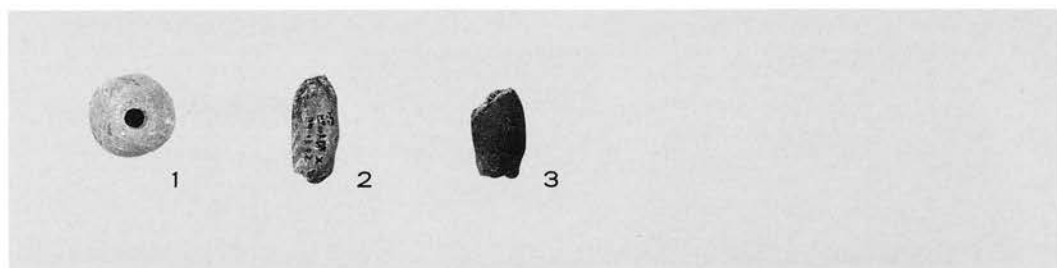


第1・2・6・9・15号土坑出土遺物

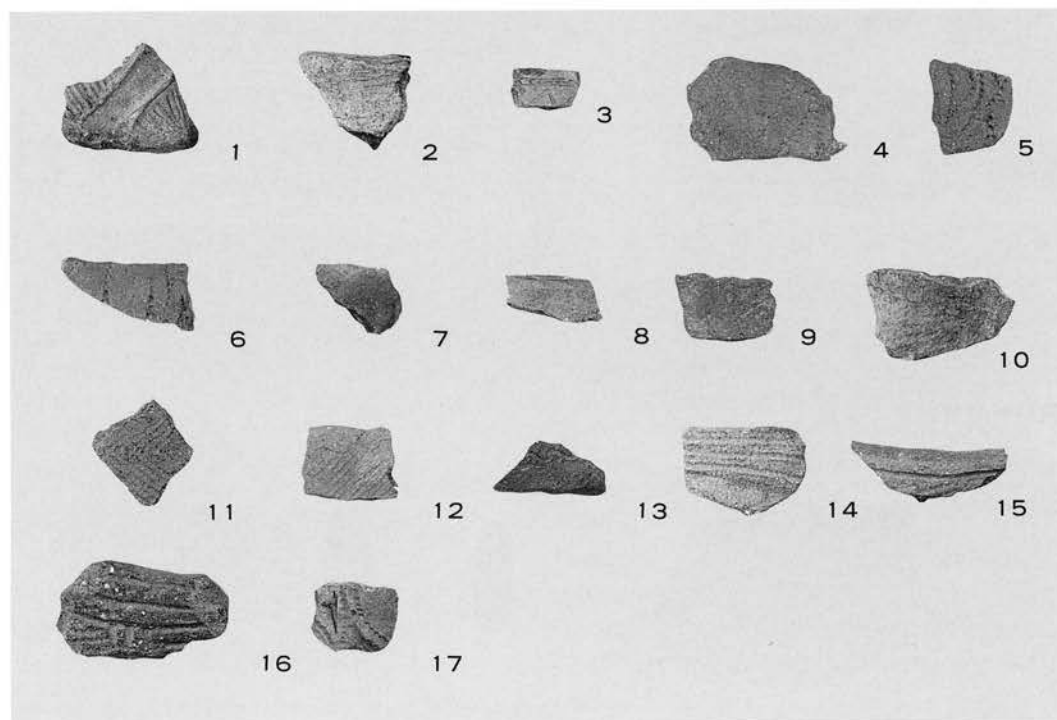
PL26



遺構外出土遺物



ピット群出土遺物



縄文土器



茨城県教育財団文化財調査報告第70集

主要地方道水戸鉾田佐原線道路改良  
工事地内埋蔵文化財調査報告書

餓 鬼 塚  
沢 三 木 台 遺 跡

平成3年10月25日印刷

平成3年10月31日発行

発 行 財団法人 茨城県教育財団  
水戸市南町3丁目4番57号

TEL：0292-25-6587

印 刷 有限会社 川田プリント  
水戸市上水戸4丁目6番53号

TEL：0292-53-5551(代)

